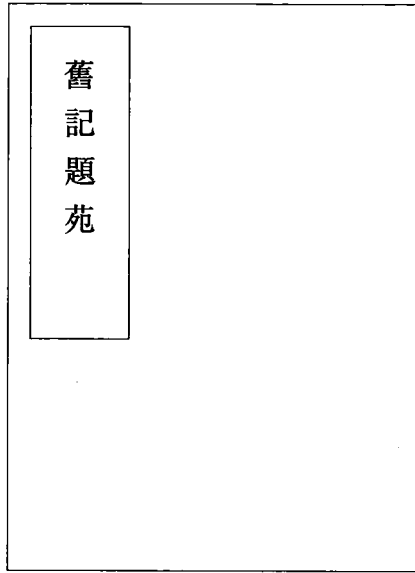


旧記題苑（東京大学史料編纂所）

(表紙)



1 舊記題苑序

〔礼合濟〕

予有好古書之癖、近年涉獵於群書、而多雖親有觸目者、亦石渠之秘書、只看外題耳者亦多焉、閑歲觸興隨筆、不暇分先後雅俗、謾書集載、而成一冊子矣、故不分部辨類、粗淨寫、而名舊記題苑、姑待他日之考正耳、固淺陋、遺脱亦幾莫、今爰所載、聞違考誤、或同書異名、重出殊多矣、只備考古事之考授耳、更就博古之君子、若能同好尚、

不吝補賜、有快魯魚正者、聊予屯戲之幸甚、文化▽丙子△〔中〕春晦夜、城北馬背岡之讀隱舎把筆、

▽平季彬序
伊地知小十郎ナリ、
後ニ季安ト改ム、△

▽「此序文拙陋、不可讀」△

▽一本此序文假名ニカケリ△

▽◎予古書ヲ好ノ癖アリテ、日頃群籍ヲ涉獵シ、親敷睹及ヒタルモノ、或ハ唯石渠ノ秘書トヤラニテ、外題ノミ聞及ベルナト、間歲興ニ觸レ筆ニ隨ヒ、先後ヲ分タス、雅俗ヲ辨セス、漫ニ書ツラネ侍リシニ、覺ヘス一冊子ト成ス、サレ共未部ヲ分ケ類ヲ分ツニ暇アラス、粗淨寫シテ舊記題苑ト號ケ、姑ク他日ノ考正ヲ待ツ、固ヨリ淺陋ナレハ、脱セルモノ如何程カアラン、且今載スル所ニモ題號等ニ間違ヒ、考誤リ、或ハ一書異名ニシテ、重出セルモノ殊ニ多カランハ按中ナリ、更ニ能ク博古ノ君子ニ就キ、誤リヲ訂シ、漏レルヲ補ヒ、重テ故事ヲ訪ノ考授ニ備ントス、若シ世ニ好尚ヲ同フシテ、一部モ補闕ノ賜モノヲ吝マス、一字モ魯魚ノ正シキヲ快クスル人アラハ、聊カ予カ戯レノ幸益ナラント、文化丙子仲春ノ晦夜、城北馬背岡ノ潛隱舎ニ筆ヲ把ル、

伊地知小十郎

平季彬序△

▽○「此点所藏之印也」△

▽一本ト得能彦左衛門通古ノ藏本ヲ以テ校正スルナリ△
カクハ得能彦左衛門通古ノ藏本ヲ以テ校正スルナリ△

(以下○印ハ東大本ニハナシ、③ニヨリ補フ、朱書ナリ)

2 舊記題苑

薩隅日圖田帳 建久八年ノ帳

船法定

坊津飯田備前守鎌倉ニ召サレ、土佐ノ案原孫右衛門・

兵庫辻村新兵衛三人相議シ所定ノ船法三十一ヶ条▽

ナリ△、

御家人交名註文

京都將軍ニ昵近スル輩ノ名書、或交名註進トモアリ、

内裏大番觸狀

鎮西引付

將軍昵近ノ家々御番賦ト見ユ、

忠昌公御代ノ頃御次第書

凡ソ五十九ヶ条、元旦ヨリ年中御式、又ハ御祝事等

ノ頭書ト見ユ、末ニ田島駿河守・伊地知越後守・本

田因幡守・桑波田觀魚・石井施世・大寺宮音・肝付

越前(守)入道トアリ、

忠(忠)公御座牀書

○水俣御陣人数賦

天正八年 貫明公肥後ノ相良義陽ヲ伐玉フ御賦ナリ、

或肥後入次第人数帳トモ題ス、

貴久公御譜代衆

伊作ヨリ奉仕セシ人々次第不同ニ載ス、日新公召

仕ワレシ鮫島日向入道古船、慶長五年正月覚書▽ナ

リ△、

飯野衆中帳

天正十七年ノ頃真幸院ニテ 松齡公ニ奉仕セシ人々

多ク此ニ見ユ、

飯野御軍談人衆

天正八年ヨリ十五年頃迄諸外城ヨリ武事ニ練タル士

折々召サレ御談合有ケル人々也、凡五十四人見ユ、

高麗御陣御番帳

馬関田士宇都（源）右衛門家蔵スト云、

出水移衆中帳

慶長三年 松齡公朝鮮ノ功ニ高城・出水御拜領ノ後、

本田六右衛門親正（正親）以下召移サレシ人々也、

国分御番星合帳

貫明公ニ直衛セシ人々也、小番・大番格（此三式）始ル欤、

国分士平田治右衛門家蔵スト云、

加治木御案文留

松齡公ノ時、彼是御往復ノ書簡艸也トキク、

国分御代諸士高帳

国分衆中帳

慶長十九年ノ帳也、

従国分移衆中帳

慶長十六年 貫明公御逝去ノ後、鹿兒島ノ如ク召移

サレシ諸士ノ姓名田（録）也、

慶長十八年鹿兒島衆高帳

慈眼公（家久）ノ世、府下諸士ノ姓名田録、但任ニ地頭ニ在

モノハ漏レシト云、

▽
①加治木御日帳 慶長十二年より十三年・十四年・十九年等の御帳、年頭之進上物帳等十二冊なりとぞ、日記の部に入るへし△

在大坂人数賦

慶長十九年 慈眼公（徳川家康）神祖ノ徴ニ應シ、御中途迄御

出陣遊（イ）サレタル時従軍ノ衆也、

元和初年諸士高帳

同六年諸士高帳

同七年加治木高帳

御参内御供人衆

元和三年六月 大猷公御参内ノ時、慈眼公ニ京師（徳川家光）

ニ供奉セシ諸士ノ賦也、肥後平蔵家蔵▽スト云△、

寛永九年御人数賦

肥後ノ加藤清廣御改易ノ時分 慈眼公御袖判ノ仰出

アリ、八月十九日所定地頭以上騎馬御賦▽ナリ△、

同年諸士高帳

同十三年諸士屋敷帳

○同十五年島原軍衆戦賦

評定所御案文帳

村田氏島原人数帳

有馬原之城高名（究）帳

田布施二宮氏家蔵ス、

同年加治木御扶持帳

加治木衆中帳

寛永十年十月 慈眼公ヨリ兵庫忠朗へ〔^{テシ}へ〕召附ラレ

シ諸士ノ姓名且〔^又①②^唐〕持留ノ知行見ヘタリ、

同東衆中帳

寛永十一年ノ帳ナリ、亦忠朗ニ召付ラルト云フ、

御引付〔^{③④}帳〕

御支配方ニアリ、元和五年迄見、寛永以来當時迄時々

ノ御引付也、

伊勢貞昌御異見状

寛永十七年御人数賦

同二十一年諸士屋敷帳

御支配方ニアリ、其以来屋敷改毎ニ相改ラレシ屋敷

帳〔^{テシ}留〕、當時迄数十冊▽アリ△、

萬治二年諸士高帳

〔^安慶長三年以来時々御改正アリシ圖也、御支配方等ニ

在、元録ノ圖ハ御目付役所ニモ在▽ト云△、〕

代々小番帳 ▽鹿兒島屋敷古繪圖△〔^⑤ハ「ココニアリ

宝永三年代々小番ト云格式召立ラレシ時ノ姓名ナリ、

先君遺令

先君遺簡

国家古鑑

島原在陣案文留

喜入撰津守忠政書留置モノナリ、

田賦集

川島新右衛門重貯著ス、

諸士高系圖

高所ニ在リ、元録三〔^年改帳ヲ四番トシ、夫ヨリ享和

二年所改帳迄十八番數十冊アリ、繼目▽家督△御目

見▽名替△養子等〔^{ノ事此ニ見エタリ}諸家大概見ユ〕、

諸士組帳

六番十組ノ与分ヲ以テ記シ、繼目〔^御家督御目見名替

▽①死去△ノ事、

〔諸郷地頭系圖 在御支配方等中古以来ノ地頭也、上代多ク漏タリ〕

御奉公帳

国〔^分府〕諸士ノ奉公セシ事〔^{也トシ}ナリ〕、

慶安高辻帳

貞享高辻帳

米直成帳

慈眼公ノ時ヨリ年々、米價ノ貴賤ヲ記セシモノ也、
加治木物奉行⑤所ニアリ、

家例要覽

酒勾安国寺申状

酒勾次郎、後ニ▽右馬△石見入道ト称ス、
〔元久〕 恕翁公

ノ御家老致仕シテ薩州安国寺ニ住持ス、元録〔年〕中
子孫利兵衛▽ト云△入道〔ト云〕、御名代ニ上洛セシ

時御分国諸士ノ次第可申上〔等〕ノ仰ニ依テ奉ケル〔申〕
状也、是ヲ酒勾一枚紙トモ御当家ノ六卷書トモ云フ

由▽見エタリ△、

山田聖栄自記

名ハ忠尚、出羽守ト称▽ス、聖栄ハ老号ナリ△、應永

五年戊寅ノ生ニテ、文明十四年三月ヨリ八月迄八十

〔ナシ〕 〔五〕歳ノ時著、書也、一名六卷〔書〕、或七卷双紙トモ

〔ナシ〕 〔云〕、今世行ハル、者ハ五卷ナリ、別ニ文明二年三

月七十三歳ニテ著〔ス〕、自記ノ目安アリ、合テ六卷也、

今一卷未〔タ〕、詳ナラス、

應永記

文明記

一名忠昌記トモ云、文明廿五年十月ノ事ヨリ翌廿六
年七月廿四日迄記録シ、天文廿四年卯月廿六日書之

トアリ、一本末ニ慶長十一年四月長谷場越前宗純ヨ

リ川上左近将監ニ与ヘケル跋文▽アル△本アリ、

〔下條行脚僧雜錄ト異名同記故ニ消ス〕
〔文明六年三州豪族記〕

〔是八月行脚シテ間フル〔歴〕々ヲ記モノト見ユ、河野

郷右衛門知覽ノ古寺ニテ見出ト云、元禄初ノコト、
〔通朗〕

○文明中行脚僧雜錄〔ハハ〕コニアリ

御世治記

忠昌公御即位ノ事〔ヲ〕記セシモノト聞ク、
〔也〕

西牟田三河守自記

文明十四年ヨリ十八年十月迄ノ自記▽ナリ△、新納

是久及忠祐戦死墓所等ノ事ノミ詳ナリ、

〔黄套舊記〕▽黄套ハ國史館舊記數卷ヲ蔵ル書帙ノ名ナリ、
黄套舊記ト云ヘル書アルニアラズ、故ニ消ス△

○貴久記▽大永六年初秋ノ事ヨリ天文廿四年卯月二日帖佐ノ本
城・新城・山田城落去ノ事迄ノ軍乱ヲ記セシ書ナリ△

○樺山玄作自記

玄佐ハ案藝守善久也、大永中ヨリ天正四年迄ノ事迄

記ス、五年五月十八日六十歳ニテ書置ケルト也、

伊集院狐舟物語記

孤舟ハ大和守忠朗ノ老称▽ナリ△、

蓑輪伊賀自記

名ハ重澄、初舍人ト称ス、▽蓑輪記ト云△

○翰游集

慶長七八年ノ頃長谷場越前守宗純入道著ス▽所ノ△

軍記也、依テ越前自記、或薩陽軍記トモ題ス、宗純

初兵部少輔ト云(ナシ)、

○勝部兵(部)右衛門聞書

或ハ勝目甚右衛門入道荷翁(ノ)編集トモ云(ナシ)、天正

九年耳川ノ役ヨリ同十六年夏ノ事迄記ス、

天正四年舊記

壹冊加治木日野氏家藏スト聞ク、

○新納忠元弓箭(記)

▽○新納忠元勲功記家筋 天保十四卯年二
月 新納弥太右
丞エ門時升ヨリ海老原宗之
丞ヘ宛テ書出シタル書也△

○同軍勞之覺

正保二年卯月耳川日忠元ノ孫加賀守忠清紀聞シ進獻
スル書ナリ、
廿四

伊集院玄巢弓箭覺

○惟新公御軍記

惟新公御自記

慶長七年如月関ヶ原ノ始末ヲ御和談最中ニ書記玉フ

モノ也、

町田存松覺書

○帖佐宗(辰)覺書

〔或ハ宗秀ニモ作ル、彦左衛門ト称、子長右衛門宗康

ノ父ノ咄ヲ聞書スルモノ〕也、

新納慶雲覺書

樺山紹劍自記

濱田榮林覺書

新納遊甫書留

有田将監古物語

鹿屋兼長自記

初三左衛門、後ニ壹岐守ト称ス、川上忠堅戰死ノ事

トモ見ユル也、

後醍院宗重覺書

佐多民部左衛門久英覺書

明曆三年三月知覽ヨリ鹿府ニ召サレ自記セシ者也、

時年八十歳、

○[▽]湖辺領[△]右衛門覺書

或朝鮮軍記トモ題、萬治中奉 命八十^歳ニテ記述シ

史館ニ呈スル也、名ハ元直[▽]ト云△、

伊地知大膳夢物語

名ハ朝重、武功多シ、元和八年八十一歳ニテ死^去、

其子太郎兵衛琉球ノ横目トナ^リ、彼国ニ居住^シ、

老年ニ及テ^此書^ヲ贈^ルモノ△也、

池田六左衛門奉公状

名ハ貞秀、子右近将監記聞スルモノ也、

○赤塚源太左衛門覺書

自身奉公セシ御弓箭ノケ条略記ニテ正月廿七日書置、

年号^ノ不詳、

右松安右衛門覺書

朝鮮軍記

川上久国自身カラ従軍シ見聞事トモ記述スル書ナリ、

○[▽]伊東[△]玄宅覺書

出水ノ士、朝鮮ニ従軍シ寛^文四年記スル所ナリ、

友野甲斐入道申状

益山八右衛門^{ナシ}覺書

泗川御打立覺書

慶長三年十一月十五日ヨリ^ノ覺書欵、加治木福永筑

後守家ニ傳ケルトソ、

菱刈休兵衛覺書

大重平六覺書

○神戸久五郎覺書

五兵衛覺書トモ題^ス、別ニ五兵衛咄ヲ野村勘兵衛盛

豊聞書スルモノ^{アリ}也、

○押川強兵衛奉公覺

名ハ公近ト云、^子市之丞記スルモノ也、

○泗川陣鎧毛色附

川上久国應島津久通^ノ需所^ノ記贈モノ也、

○奥関^介助覺書

○井上主膳覺書

長壽院盛淳ニ從ヒ関ヶ原ニ軍行シ、明暦三年所記也、

吉田玉林坊覺書

○桐野掃部介覺書

自カラ記スル者ニ養孫軍^助書^出ヲ付ス、

○黒木左近兵衛申分 ▽関ヶ原紀事也、初稱太郎、次郎、福山士、後移出水△

○平山九郎左衛門申分

應 命呈上スル者ナリ、▽関ヶ原紀事ナリ△

○伊(應)〔東〕老岐入道申分

朝鮮ニ從軍シ、奉命記スル所也、

○晏(齊)〔齊〕覺書 ▽晏齋ハ山田民部少輔有來入道昌嚴ナリ、此書関ヶ原紀事ナリ△

山田弥左衛門奉公状

出水ノ士山田▽晏齋△〔利安〕付衆中也、

曾木弥次郎覺書

○長野勘左衛門覺書

○樺山弓内奉公覺書 横

其子但馬忠篤(記)聞スル書也、▽一本「弓内自記、関ヶ原役ノ事ナリ」△

伊丹孫兵衛覺書

○黒木播磨覺書 ▽永祿以来覺書△

阿多若狹入道自記 ▽一本ナシ△

上野隼人覺書

須木ノ士ニテ名ハ忠則、幼名彦九郎ト云、村尾笑栖(重侯)

ニ属シ、庄内ノ役等ニ從軍セシ自記▽ナリ△、

○川上久国談話

河野通古ニ就テ(記)聞スル書ナリ、

川上久国申状

築地三(左)〔衛門〕書断(龜)

長友治(部)〔左衛門〕聞書

耳川ノ役ヲ記セリ、

朝鮮覺書

帖佐白坂氏ニ傳(ナシ)ケルト聞ク、

○谷口宮内左衛門書留

元龜中肝属乱ノ事ヨリ天正・文録禄・慶長・元和元年

大坂落城迄略記▽ニテ△、承應元年壬辰五月廿四日

記▽ス書ナリ△、

坂元織部覺書

大林市兵衛自記 村

名ハ重頼、加治木ノ士也、承應元年(記)聞スルモノ

ト見ユ、年代記ニシテ古戦書付ト題ス内ニ天正中外

城地頭記アリ、

阿蘇(墨)〔齊〕玄與由緒 断(齋)

野元源左衛門戦死記

兒玉源五左衛門覺書ナリ、

島原立覺

寛永十五年▽^②三月△田代衆ノ所記也、

○伊勢貞昌奉公状

伊勢貞昌与相良氏〔書〕^②〔秘状〕

▽伊勢兵庫貞衡與貞顯^②〔書〕△^①覺

東郷重位立合書

伊勢兵庫貞顯覺書▽一本
ナシ△

重位弟子立合書

高崎四郎右衛門聞書

東郷重尚名矢記

日高三左衛門記聞スルモノ也、

伊東新〔介〕敵討

元文三年家僕六右衛門記臆セシ趣^①傍書スル者也、

時ノ名ハ權平ト云、

南刑部左衛門敵討首尾

出水之士、地頭仮屋ニアリ、

加藤清風始終覺

門人坂〔元〕廉四郎▽清東△〔記〕聞スルモノナリ、

坂本清東立合覺

琉球教條

園田成芳覺書

内田仲左衛門▽政壽△日記〔正壽〕^①〔本〕

佐土原松〔本〕黨敗之記

無人島漂流聞書 志布志人

○新納旅庵〔奉公状〕^①〔勸公記〕一本同

本田〔新〕貞奉公状▽助之丞△

本田笑閑奉公状

○山田家由緒

○中馬大藏奉公状

有馬丹後奉公状

名^①純定ト云、国分衆▽ナリ△、寛永九年十月大島

代官ニ撰ハレ勤功多^①〔本ノマ、一〕子八ヶ代五左衛門重昌元録^②

十年八月覺書ス^①一冊▽ナリ△、

○大島家由緒

山口氏由緒

○東郷氏由緒

日曆之部

犬追物手組

徳(三) 宝曆(二)年ヨリ延宝六年迄(一六)冊、

福昌寺(古日)記

年代記

櫻島ノ士池田新兵衛家蔵トキク、

○三島本覺坊日記

天文廿三年九月十二日 貴久公 義久公岩劔御出陣ノ夏ヨリ、同十月十九日迄ノ事ヲ記(ス)日記(ニ)テ

△、貴久(公)記ニ續テ讀ベシ、

山(元)氏古日記

蒲生ノ士、弘治元年二月ヨリ三年六月迄ノ(日)記(ナ)

リ△、磨滅シテ不讀処多シ、是又 貴久公記ニ繼テ

讀ムベシ、

伊地知駿河守御年男日記

天正十一年十二月廿五日ヨリ翌年正月十五日迄ノ御

式ヲ(日)記ス、按ニ此時(ハ)右京亮ト云(フ)、名(ハ)重則、御

年男ヲ勤シ(ナシ)ト見ユ、

樺山玄佐日記

元龜三年(五)月廿六日早崎御陣之夏也、

○上井覺兼日記

天正二年八月一日ヨリ十二月晦日迄、三年(ニ)正月(ハ)

元日ヨリ四月二十四日迄、十一月一日ヨリ十二月廿

七日迄、四年八月十六日ヨリ九月六日迄、十年十一

月一日ヨリ十二月晦日迄、十一年正月元日ヨリ十一

月晦日迄、十二年(ニ)正月(ハ)元日ヨリ大晦日迄、十三

年元日ヨリ十二月廿六日迄、十四年元日ヨリ十月十

五日迄ノ事ヲ記ス、御使衆ヨリ御老中ノ時也、分テ

十四冊トス、

五年ヨリ九年迄五ヶ年ノコト(ハ)本(ハ)關(ニ)タリ(ナシ)△(ハ)秘(ス)

ト云、否)、

中務家久上京日記

○耳川合戦日記

川上左近將監久辰ノ記スル処、

御年男日記

伊地知又八・本田又二郎勤ケル時、天正十年元旦ヨ

リ十(五日)月迄ノ御式(ハ)ナリ△、正本御納戸ニアリト家

争(乗カ)ニ見ユ、

本田大炊太夫御年男日記

△ 自筆ノ日記本城源七郎家ニ現存ス、
通古見之御手跡スグレテ見事ナリ、
得能彦左エ門ナリ、

(一)ハ(ニ)モアリ

日知屋陣日記

伊地知勘解由左衛門御年男日記

家村源左衛門日記

天正十五年六月 龍伯公初(義心)テ上洛供奉ノ士ナリ、
(伊賀守貞)

山口(伊賀守貞)「加賀日」日記

天正十五年 太閤西征ノ時、平佐ノ城ニ城守シテ記

スル(モノト云)「ナリ」云

新納忠増軍行日記

「矢」(◎◎)太右衛門ト称、忠元ノ子也、文録(縁)元年三月朔

日ヨリ 松齡公朝鮮御出陣ニ御供シ、其(門出)「出門」コト

ヨリ七月廿二日迄ノ日記ナリ、

堀内日限坊(題)「国」日記

大口諏訪祭日記

新納忠元(◎◎)「祭」起シ置レ、元龜年間ヨリ當時迄頭屋日

記大口ニ傳(ナリ)「ハルト」ナリ、壹町衆以上ノ人年々頭

屋ニ定(ナリ)「ケル」ト「云」、

面高俊昌軍旅日記

連長坊ト(号ス)「云」、慶長二年七月唐島ノ瀬戸ヨリ奥入御

供ノ日記ナリ、

新納忠元上洛日記

○大島忠泰軍行日記

○阿蘇玄与「上京」△日記

○新納旅庵日記

覺書ト見ユ、

松岳和尚日記

加治木吉祥寺開(山)僧ナリ、

伊地知勝左衛門日記

加治木御日記(帳)

「本ノマ」

疏(令)「人々」ノ部「三」テ詳ナリ、▽通古云、
日帳ナリ、(義弘)惟新公御隠居方御
ニ納置シテ、
ト為ル△
今國史館御格護

高麗入御日(記)

○川島新右衛門日記

町田出羽守与力ナリ、

高麗日記

帖佐有田新左衛門家蔵スト云フ、

養毛氏日記(義弘)

出羽守欵、

山田昌巖日記

▽「本」幸悅上洛△
伊集院(忠貞)日記

(一)ハ③ニモアリ

川上久国上使附日記

新納證印日記

名忠雄、仲左エ門ト称ス、御使役ニテ加治木公子ニ

給事セシ時ノ日記ナリ、

島津久通日記

中務久茂日記

阿多忠朗日記

六郎右衛門ト云、年代記ナリ、

▽「本」市△
竹内助(一)日記

(一)ハ③ニモアリ

名ハ益祐ト云、泰清公ニ近仕シ寛永^十九年ヨリ寛

文延宝年間等ノ日記ナリ、

延久公御長久記

一名 綱 (様)御若年ノ内萬覺日記トモ題セリ、

野村盛豊日記

勘兵衛ト云(フ)、

伊勢十兵衛日記

江戸御留(主)居ノ時、^赤松松甚右衛門ト記スル者ナリ、

横山長古日記

藏之丞日記トモ云、

伊地知増也日記

權左衛門(重)祖ノ日記ナリ、

大山源兵衛日記

覺書トモアリ、

平田可竹日記

木村静隠上京日記

徳田大兵衛日記

御當家由来

少将忠恒公ノ時所記御支族ノ事迄附録シ舊記ト見ユ、

寛永此方ノ書ニアラス、

御家譜三百冊

平田清右衛門純正奉

命編輯スル也、^{①編年記とも云}史館代々継

編ス、

○島津傳記大概

貞享中史館撰ス、

御高恩記

同前、

関ヶ原之儀(ナシ)御書出

同前、

家光公▽櫻田△御成之記

寛永七年伊勢貞昌所選、

島原餘燼録

在史館、

島原軍記

「寛永十四年丁丑十月卜書始シ書ナリ」

王子原犬追物御覽之記(ナシ)

弘文院(ナシ)道(ナシ)春(ナシ)著ス、

〔関ヶ原(ナシ)記〕

新撰系(ナシ)〔圖〕

寛文九年春奉 網貴公命、大田久知・河野通古所撰、

凡(三)〔四〕十四家ナリ、▽一本「此書元禄九年御城火事ニ燒失ス今亡可惜△」

○諸家大概記

河野通古撰、

○頼朝公御教書句〔註〕解

田中▽五右エ門△国明奉 命註▽解ス△、三(年)〔十〕ニシ

テ成ル、林大學頭(題)跋(七)リ、

○島津世録記

八卷、島津久通撰、林大學頭訂正、

○征韓録

六卷、島津久通撰奉、網貴公命撰、林大學頭撰序、

○三国擾乱記

宮之城▽家士△土持▽新右エ門△仙岩著、

○古城主由来記

同前、▽○御家五代由来記 同上△

御重物由緒

御代々御判鑑

日新菩薩記

▽一本ナシ△〔或日新記トモ云、日新公六十三歳ニシテ記、〕

▽一本「慶長二年常潤院住職泰圓著ス、泰圓ハ若年ヨリ諸州ヲ編歴シ永禄十年歸國セシヲ、日新公思召ラ以テ常潤院住職仰付ラル」△ (一)ハ⑧ニモアリ、⑨ハ①ニ同シ

御防戦之記

菱刈賊ヲ討給(ナシ)〔フ〕コトヲ記、

祁答院記

宮城土持仙岩著、

○御居城御戦(場)由緒(ナシ)

史館所撰、

(一)ハ⑧ニモアリ

○古城古戰場記

全前、

○廟堂要覽

全前、

○地(志)要略

上下二卷、宝曆六年九月大史館田清純・本田親方・

山田有雄所撰ナリ、公儀御目附来国ニヨリテナリ、

○関ヶ原御陣始終大概記

▽史官△町田俊(維)撰、

宝永雜録 一本萬代記ノ事歟△

御系圖

島津世家

▽史官△郡山遜志奉 命撰、

島津国史

山元正誼撰、凡三十二冊、外ニ国史編集問(答)留ア

り、

○西藩野史

得能通昭撰、▽西藩烈士千城録十一冊上原善藏尚賢著△

(松齡)妙田公御家督考(史官)▽一本史官考之△▽本藩人物誌十冊左衛門正澄著△

島津御勲功記

○薩藩名勝志

大史本田親孚編、巡三州寫其景勝所撰ナリ、凡十九

冊、

▽三國名勝圖會六十冊奉齊興公ノ命、橋口今彦兼古・五代直左エ門秀興後ノ橋口今彦兼綱撰之、本書ハ亡失、予カ蔵スルハ未ダ淨写セザル本ナリ△

○御治世要覽

清水盛富撰、▽三十冊△

御上下(帳)

▽一本寛永十五年正月十三日 光久公於江戸御城御暇御給ハリ同日ノ夜中御発駕、依島原一揆也、二月十七日晚御着城云々ヨリ宝曆四年五月十一日 重年公鹿兒島御立、七月廿二日御參府マデノコトヲ記ス△

○御家老記

上代御守護代或物奉行、又奉行・乙名・老者役・老中中杯ト見ユ、

御使役記

一名御用人記ト題ス、上古ハ申口役或申次役・御使

衆杯ト見ユ、

大目附記

▽一名△横目頭トモ云▽シナリ△、

寺社奉行記

勘定奉行記

付支配奉行・吟味役・勘定小頭、

御兵具奉行記 物頭

琉球在番系圖

高奉行系圖

物奉行系圖

御記録奉行系圖

御右筆記

中山王系圖

琉球国由緒

大島私考

三冊、本田孫九郎親孚文化二年霜月大島代官タル時

所著、

琉球征伐記

喜界島代官記

喜界島略（記）△
▽一本「志」△

長崎龍蔵方義著、
（志）

島津支流系圖

寄合以上他家系圖

薩（陽）（緒）由緒
（陽）（緒）由緒

三卷、元禄宝永ノ間猿渡要人信安御用人ニテ、御記

録奉行ヨリ諸調書取次セシ時ノ（官タル）時上疏セシ一冊ナリ、
又自分問合等（抜）

ナリ、

秩父本田調書

伊地知助右衛門重英史（官タル）ノ時上疏セシ一冊ナリ、

世ニ家争（乗カ）ノ書ト云、

諸家系圖拔書

日高六右衛門所拔書、凡四百（十）家、

東郷氏年代記

三国軍記

莊内平治記

莊内古跡記 古本壹冊、増補二冊、

○庄内軍記 「古本一冊、増補二冊」

天誅録 庄内軍記同書歟△

伊作▽由来△記

阿久根由来記 大史平山武（數）著、

植脇由来記（種）

山之口古今記録

長島由緒

栗野由来記

志布志華篋 志布志^士阿多源太夫著、

加治木故老物語

飯野物語

因分新城繩張記

晴蓑^{⑧ナシ}〔生害〕記 ∇一本「通古曰、延享二年十二月島津彦太夫久富撰
晴蓑君生害之始終、贈総持寺僧仙瑞書也」△

○南浦軍記

大島海路記 代官本田親孚著、

同要文糟粕集〔全〕十五冊、

屋久島記〔大島〕奉行馬場傳兵衛著、
^{⑧屋久島}

稻津亂記

○木崎原軍記 伊東一空撰、

木崎原軍記參考 向井達夫撰、

木崎原頸〔注〕文

御〔曆〕代 入佐朗道著、
^⑧

北原落城記 偽妄多シ、

島原怪鬪志 入佐朗道著、
^{△即}

適意集 市来源右衛門家年著、

○盛香集 清水∇次右エ門△盛香著、

通昭録 得能左平次著、

通昭雜録 全、

靜脩雜録

○称名墓志 本田親孚撰、∇四冊△

○藩翰譜島津傳辨誤 全、

名臣小傳 全、

古蹟癖 鮫島傳藏撰、

∇本藩地理拾遺集 田尻小吉
種甫著 △

三國地〔誌〕考

賤乃男手卷

白尾〔齊〕藏国柱著、一説大河平隆器著、追可正也、
^⑧

賤男手卷

国柱著ス〔書ト〕隆器著ス書ハ名同クシテ書異ルナ
^{⑧ナシ}

リ、予是ヲ隆器ノ家ニ糺セリ、

天保十一年夏六月 義方
^{⑧荒川之}

○薩陽落穂集

伊集院弥八郎兼善明和八年八十歳著〔ス〕、
^{⑧ナシ}

新古談〔語〕 新納忠〔林〕村著、
^{⑧ナシ}

三曉菴談話〔集〕

橋口善兵衛瓢隱木村探元ノ話ヲ聞書セシモノナリ、

舊傳集

一名古咄集、宮内某編輯、別ニ宮内喜兵衛覺書ト題

セシ書▽アリ△、可考、

浦乃波

静隠嫡子木村〔加〕^{▽右△}左衛門時規聞書セシ書ナリ、

類事苑

三冊、入佐即道著、俗名一三次^{⑤郎}ト称ス、

宇宙記

平田治右エ門純庸著、別ニ平田純庸自記ト題スルア

リ、同書欵、

諸拾集 有馬源兵衛著、

征韓略〔誌〕^{⑤志} 三冊、入佐即道著、

征莊略志 二冊、全^前、

○成形圖説

白尾国柱著、^{▽刊本三}

^{▽一本當△}十冊全本ハナシ△

徳田大兵衛〔答〕話物語

(一)ハ⑤ニモアリ

老圃農談

祢寝丹波博ク老農ニ問ハセ、凶年等ノ備ニナルコト

ヲ記置シモノナリ、

〔泰平寺縁記

寛正四年六月十九日住僧教源著、

〔靈山寺弥陀建立縁記

承久二年庚戌八月串木野三郎平忠道著、「串木野頂峯

院ニアリ」

〔全寄進状

全人寄進セシ状ニテ是又同寺ニアリ、

⑤ハ「」ヲ此三行寺社ノ部ニ入ヘシトアリ

寺社之部

石屋和尚行實

永享六年三月竹居和尚ノ法嗣為瑠撰スル所ナリ、

石屋禪師塔銘〔叙〕

永享六年南禅寺ノ惟者和尚撰スル処、竹居正猷建ニ

ケルトナリ、

竹居禪師塔銘

南禅寺天隱和尚撰処、長享二年九月▽九日△法^{⑤僧}増

嗣東純建之、

仲翁和尚行状略

福昌寺嶺室和尚ヨリ龍澤和尚ニ答ラレシ書▽ト見ユ

△、
福昌寺奉加帳

長享十年ト卷末ニ見ユレトモ、尚（久豊）義天公ノ御名モ

載レハ、以上ヨリ、奉加ナルコト知ヘシ、

眞俗二諦常住記

大興寺開祖頼政上人著処、頼政ハ酒匂紀伊守二男ニ

テ（始）〔如〕ハ坊津一乘院「ノ住持ト云、或ハ大岳公（忠國）時」▽

一乘院△頼政法印、筆記ト云▽是ナルヘシ△、

運督上人覚書

加治木本誓寺ノ開祖、寛永三年正月遷化、

吉祥寺四覚書

願成（就）寺千鉢佛寄進衆 在帖佐、

松岳和尚日記 加治木吉祥寺開山也、（巻）

（一八）寺社之部「末尾ニ収ム」

諏訪稻荷御神事由緒

（官）文化五年史、（館）撰（スル）処ナリ、（ナシ）

彦山由緒

清水山王社由緒

水劔由来記

寺院由緒 在寺社方、

寺社古棟札（集）、全、

大興寺由来記

大乘院過去帳 （十九卷、此寺ニ葬人ノミナラス、）

福昌寺住持系圖

長善寺戦亡帳 飯野ノ寺、

淨福寺過去帳 在加世田、

福昌寺戦亡帳 一名登蓮録、

高称寺過去帳

高城ノ寺、天文九年四月廿二日弓箭以来同十一年八

月廿日戦死人数▽ト云△、

淨光明寺古過去帳

鹿兒島寺社廻

日新寺戦亡帳

天昌寺戦亡帳

佐土原ノ寺、中書豊久ニ従軍（シ）、朝鮮・関ヶ原・（庄）

内等ニ戦（歿セシ姓名ナリ）

▽一本（始）△（一）ハ⑤ニモアリ

三（国々）初（始）神社考

青龍權現記 児玉梅菴撰、

花尾山縁記 山本正誼、寛政（元）九年十月撰処、

法花尾嶽寺縁記 天明八(年)山本正誼代住持昆山撰、

法花嶽寺古縁記

住吉杜御奉納歌(集) 末吉

神代三陵考 白尾国柱著、

神社傳記 大河平▽喜左エ門△隆棟著、

神社考 本田▽下總守△親盈撰(考)、

日隅御巡詣神社記 全、

山口地蔵(由緒)

盲徳三徳咄覺 加久藤地神家督ナリ、

御兵具所稻荷縁(記)

天海和尚自記 福昌寺住持、大中公御葬礼ノコトトモ見ユ、

福昌寺疏双紙

○佛生寺由来記

蒲生ノ祈願所ナリ、貞享元年八月廿三日赤塚源太左

衛門眞勝記セシ本ニ、正徳四年八月(大)史川上平右

衛門・肥後仁右衛門・田中五右衛門考、朱▽書ノ△

奥書在、蒲生ノ旧記トモ謂(フ)ヘキ書▽ナリ△、

雅藻之部

教誠秘訣之書亦此ニ附録、

島陰漁唱 桂菴和尚著、

島陰雜著 同上、

乱道集 果松老人著、或、果松以安詩集トモ題、桂菴同時ノ禪僧、

○南浦文集 文之玄昌著、

南浦文集遺編

○日新公以呂波歌

龍伯公御詠歌集

同公以呂波歌

黃門公難波津歌

泰清公御詠草 諏訪兼利謹評、

○泰(清)公遺事 肥後平藏盛賢撰、

大玄公修徳要術

大玄公(五)花岡▽公子△御誠書

大玄公(七)十御賀歌集

浄国公御屏風画(贊辭)

侍臣岩切治房・原田經兵請

○古能遺愛 肥後盛賢著、

命敬寫、

溪山公龜鶴問答

○溪山公以呂波〔御〕歌

如恕竹翁傳 鳩巢文集抄、

▽寺社巡見記 牧仲左エ門胤 昌ノ和歌ナリ△

如鷲文集 諏訪兼利著、

員外千〔集〕和歌〔首〕 諏訪兼利著、

中村閑居記 同上、

忍草

一名飛〔鳥〕川記トモ題〔髮〕、諏訪兼時或仲右衛門、

泰清公御遺〔躰〕高野御登山ニ御供セシ道〔記〕、世ニ

兼利ノ作ト云ハ誤ナリ、

浮草乃露

二卷アリ、上原久真〔貞〕ノ妻照惠著、鉄舟訂正、

▽梅花百詠 相良清兵衛 長英詩ナリ△

菊花百詠

菊〔池〕東匂文集

和南文集 五冊、島山義方著、

北郷久〔喜〕自記

東郷重位以呂波歌 示現流傳書、

柏原幽靜以呂波歌

醒眠集

平田可竹遺誠書

一躰集聞書 炮術傳書、和田乗助正張著、

南堂先生賀詩文 山本正誼以下〔伴〕宮儒生ノ作、

月洲先生詩集 山田喜三右エ門君豹著、

西海拾玉集 二宮甚内編撰、本藩名士ノ和歌ナリ、

児玉圖南傳 播孺儒生河口三八子探撰、

蘭皋先生詩稿 吉田用右衛門清純著、

柁城黒川記 島津▽兵庫△久徹著、

名山樓詩集 〔ナシ〕▽同人 〔全〕 島津久徹著 △

海門遺稿 赤崎▽源助△貞幹著、

獨双〔紙〕子 伊集院兼兵著、

櫻島炎上記 山本正誼奉 命撰所、

櫻島炎上記 興国寺亮洲和尚著、

全炎上記 竹迫藤四郎著、

同震〔火〕記 印東孫市著、

男山物〔記〕

諏訪兼利以妻〔女〕上邸東都著所、

琴峰（集）〔記〕

府市瀬戸山琴峰著、

〔駕〕籠篋地

今井八右衛門貞雄、誹名珍重著、

麦藁笠ワラ

山沢禪枝著、宗信公▽御遺髮△高野▽御登山ニ△

〔御〕供奉セシ時ノ道之記、

都巡（同上）〔山沢禪枝著〕

三虚藏道之記全、上

花屋帳全、上

○虎狩 高柳▽好左エ門△行文著、

狐狩

古乃風 赤崎貞幹著、

浮玉章（◎草）全、上

深惠全前

旅行記

谷山角太夫純香、〔從〕（ナシ）齊宣公自江戸帰道而作処、

劔法内侍所

天真流傳書、川上八次郎親持与門人吉井金九郎友傳

問答書、

田代翁之記 川上氏門人毛利（◎治）右衛門著、

東翁記

川上氏門人平城（木）右衛門著、

西藩四戰記

上原善藏著、▽子息善助ノ浄写シテ贈リシ本アリシヲ丁丑ノ兵乱ニ屬有トナレリ、可惜△

川上忠（實）〔實〕碑文 垂水儒臣乾冠太著、

▽長壽院△盛（淳）〔浮〕碑文 大乘院十一世覺山著、建大興寺、

鳥津久通祖先碑（銘）〔文〕

弘文学院学士林大學頭撰処、延宝六年圖書久胤ノ時、

邑ノ宗功寺ニ建、

松浦示現（流）系圖

松浦書簡集 与高弟崎元照雲書、

○鳥津久貫誠其子書

御家世譜歌 福昌寺自嚴和尚著、

▽〔明治十九年十二月寫之〕△

旧記題苑(大阪大学附属図書館)

(表紙)

舊記題苑

1 舊記題苑序

予古書を好の僻ありて、日ころ群籍を涉獵し、親しく暗及ひたるもの或は唯石渠の秘書とやらにて、外題のミ聞及へるものなど、間歳興に觸れ筆に随ひ、先後を分たす、雅俗を辨せず、漫に書つらね侍りしに、覺えず一冊子と成ぬ、されどもいまた部を分け類をわかつに暇あらず、粗淨寫して舊記題苑と名つけ、姑く他日の考正を待つ、固より浅陋なれば、猶脱せるものいか程かあらん、且今

2 舊記題苑

載する處にも題號等に間違ひ、考誤り、或は一書異名にして、重出せるものなど殊に多からんは按中也、更によく博古の君子に就き、あやまりを訂し、漏れるを補ひ、重ねて故事を訪の考援に備んとす、若し世に好尚を同ふして、一部も補闕の賜ものを吝まず、一字も魚魯の正しを快くする人あらば、聊か予か此戯れの幸益ならんと、文化丙子仲春の晦夜、城北馬背岡の潜隱舎に筆を把る、

平季彬序す

神名帳

天喜二年二月二十七日大隅国主神司調所恒範に禁庭より授られし古書となも聞およへり

御文書目録

酒匂貞阿所撰と聞及へり、

薩隅日圖田帳

皆建久八年の帳なり、薩戸は筆者沙弥光祐とあり、日向は筆者了卯秀円坊とあり、大隅は宮内社人隈本

一治左エ門文書にて、元禄中呈上せし扣なり、

石築地役賦

建治二年八月觸れにて、調所氏の舊蔵なり、

船法定

坊津の飯田備前守鎌倉に召され、土佐の篠原孫右エ門、兵庫の辻村新兵衛三人相談し所定の法三十一ヶ条也、

御家人交名注文

京都將軍に昵近せし輩の名書也、或は交名注進ともあり

藤野氏文書

内裏大番觸状

鎮西引付 將軍昵近の家々御審賦とミゆ、

古文集 田尻種甫集るものなり、

御廻狩御供人数 元亨五年後正月二十二日とあり、

忠昌公御代の頃御次第書 凡そ五十九ヶ条、元旦より年中御成、またハ御祝事等の頭書とミゆ、末に田

鳥殿河守・伊地知越後守・本田因幡守・桑波田親魚・石井旅世・大寺宮首・肝付越前入道とあり、

忠治公御座躰書

御番人数衆 大永四年五月二十五日、

加世田御人衆 永祿十二年仲

水俣御陣人数賦 天正八年、買明公肥後の相良陽を伐給ふ御賦なり、或は肥後入の次第人数帳ともあり、

貴久公御譜代衆 伊作より奉仕せし人々次第不同に載す、日新公召仕われし鯨島日向入道、

飯野衆中帳 天正十七年の比、松齡公に奉仕せし人々此に見ゆ、

財部衆中帳 天正十七年乙丑三月三日改之、北郷吉次郎殿領地衆中とぞ、財部日光神社大宮司長友休兵衛所にあると聞けり、

飯野御軍談人衆 天正八年より十五年頃まで、諸外城より武略に練たる士、折々召され御談合ありける人々なり、

よそ五十四人ミゆ、 文祿檢地御朱印

高麗御本陣御番帳 馬関田土宇都源右工門家蔵すといふ、

出水移衆中帳 慶長三年、松齡公朝鮮の功にて高城・出水御拜領の後、本田六右工門親正以下召移されし時の人衆なり、

國分御番星合帳 買明公に直衛せし人々也、小番・大番の格此より始る歟、國分士平田治右工門家蔵すといへり、

加治木御案文留 松齡公の時、彼此御往復の御状の草稿と聞けり、

琉球軍衆賦

竜伯様御代諸士高帳 伊地知越右工門家蔵すといふ、

國分衆中帳 慶長十九年の帳なり、

就御上洛一石九十三文出物請取帳 慶長十年十二月廿日、國分衆中などの帳なり、

從國分移衆中帳 慶長十六年、買明公御逝去の後、鹿兒府の如く召移されし諸士の姓名田祿なり、但し米良小右工門家蔵すといへり、

慶長十八年鹿兒島衆高帳 慈眼公の時、府下諸士の姓名田祿なり、其比地頭にて任所に在るものハ漏る、

同十九年諸地頭花押印鑑集 史局に在と聞けり、

在大坂人数賦 慶長十九年、慈眼公、神祖の徴に應じ、御中途まで御出陣ましける時の從軍の人数なり、

大坂落城注進状 慶長廿年六月一日の状なりときけり、

元和初年諸士高帳 加治木御代衆中帳、加治木・吉田・山田なり、元和元年六月十六日とあり、毎年六月一度ツ、御振廻被下候衆の帳といふ、

同五年諸士上地仰出

同年頃覽島衆中帳 相良助太夫常苗家蔵せしとぞ、

同六年諸士高帳 薩隅日三州一所衆并覽府衆中高極之帳と題し、元和六年庚申二月二十七日と左右に分書し、原本元

野造酒丞通行に在といへり、

同七年加治木高帳

御參内御供人衆 元和三年六月、慈眼公京師に供奉給ふに從行せし諸士の御賦にて、原本は肥

徳川家光

大猷公御參内の時、

後平藏旧蔵
すといふ、

寛永九年御人數 肥後の加藤忠廣御改易の時分、慈眼公御袖判の仰出ありて、八月十九日諸地頭以上騎馬の御賦なり、又七月廿日御出陣定帳ともあるあり、

同年六月十一日御袖判

同年諸士高帳 市来十郎右工門家蔵と聞けり、

同年九月八日御袖判

同年十一月 家久公賜北郷氏御袖判

同年大御支配御袖判

「同十三年諸士屋敷帳」

同十五年島原軍衆賦 岩崎口御文庫ニ御文書入箱貳拾三番の内ニ
天草軍衆賦帳五冊とあるよし、島原一揆ニ

付書付寫三通と云もあるとなん、以下朱カキ、皆二十三番ニ入トなり、

同年評定所御案文帳 御城回祿の後、其燼残を今ハ島原

島原在陣案文留 喜入忠政書留
られし帳なり、

天草有馬軍衆極 一紙目錄三通、但銀子書付巻通、

村田氏島原人數帳 島原立覺 同年三月田代
衆中所記なり、

有馬原之城城乗人數巻冊并差出巻閉

同横折巻閉

有馬原之城高名究帳 田布施二宮氏家蔵、寛永十五年二月廿八日とあり、

島原籠城之事

天草軍記 鹿籠より軍行せしもの、聞書なり、

同年加治木御扶持帳

加治木衆中帳 寛永十年十月、慈眼公より兵庫忠朗へ召附られし諸士の姓名、且また持留の知行等也、

同東衆中帳 寛永十一年の帳なり、亦た忠朗に召付られ臣従すといへり、

御引付留 御支配方に在り、元和五年の比より、

御證文留 寛永中以來當時までの御引付なり、亦御支配方に在り、御回祿の及ばざる所にて古帳多しときけり、

伊勢貞昌御異見状 寛永十六年欵、

同呈島津久慶書

寛永十七年御人數賦 玖麻の家老相良清兵衛頼兄カ權威に衆臣服せす、頼兄を江戸に召されたる留守に大童伴兵衛

衛乱を起し騒動せし頃、此御方も、球麻境に備れし御手當と見得たり、

同年大和守久章出奔ニ付内衆口柄聞書

同廿一年諸士屋敷帳 御支配方に在り、其以來屋敷改ことに、

日州論地一卷 正保三年より延宝三年十一月まで、

飢肥山境入組帳 牛乃時、寛永四年より正保四年亥十一月三日まで、

梶山境論山帳 正保二年より明暦三年まで、

寛島屋敷古繪圖 慶安三年以來時々御改正ありし圖にて、御支配方にあり、明暦頃繪圖は御納戸にもあり、元禄七年

飲の図は御目付、役所にも在なり、

明暦四年戌二月御役人衆名書

萬治二年諸士高帳 市来六右工門旧蔵すといふ、

〔同年海陸連上定帳 此年四月朔日新納右工門久
詮・島津筑前久頼の令也〕

元禄十六年年頭御座配

樋脇山田争論 宝永二年の事とらん、

代々小番帳 宝永三年代々小番といふ格式、
召立られし時の姓名なりとぞ、

先君遺令 史官川上平右工門親敷・東郷浅之丞實、
包訓二冊にて呈上するあり、此なる状、

評定所御置目条書 慶安元年等の書といへり、

先君遺簡 國家古鑑

禰寝清雄勸農略記

田賦集 川島新右工門重貯著述、

檢地自見記 猪俣庄左工門則宣著述、延宝元年十月の事也、

諸士高系圖 高所にあり、一番より三番の帳まで御回禄に焼失とらん、
聞く、焼ざるもあり、元禄三年改の帳を四番とし、夫よ

り享和二年所改の帳まで十八番、それ／＼以呂波分にして數十冊あ
り、繼目御目見養子等諸家の大概等は此に備れり、史局の系図帳も天

明六年比彼方にも寫され、組帳と併せ
採て仕立られし物とらん聞およへり、

諸士組帳 六番十組の與分けをもて記し、繼目家督御
目見名替死去の事トモ記されし物也とぞ、

諸郷地頭系圖 寛永十五年以来の本とぞ、また中古以来の地
頭ハ御支配方等にもあり、上代多く漏たり、

御奉公帳 国分諸士の奉公せ
し事なりときけり、

慶安高辻帳

薩摩国郡村高辻帳 寛文四年五月廿五日、

大隅國郡村高辻帳 右同し、

異国方條書 一冊、寛文四年、

松木左門悪意一卷 貞享元年寅四月よりといふ、

貞享高辻帳 凡四冊、貞享元差出されしと也、

日州椿并紙仕立條書 貞享元年子十月今井太郎右工門書留也、

米直成帳 黄門公の御代より年々米價の貴賤を記せ
し物とらん、加治木物奉行所に在るとぞ、

家例要覽 組所に在ともきけり、

享保御支配次第帳 十三年九月朔日其事に預り
し榎元新兵衛書おくとらん、

所務算法 東郷源五右工門著述、

御代官書出 寛政七年五月表方帖佐與共
申出られし御規模の略なり、

元久御成之記 一卷、指宿の海江田氏より出たるとなり、

元久上洛記 一卷、垂水の野口氏より出たると也、

忠久公丹後局の事書 恒吉の鎌田氏より出けるとなり、

忠久公御下向之記 大村の千鶴氏出ス、

忠久御入国一卷 伊作の伊尻氏より出ト也、

御家由来御代々書立 曾於郡の宮田氏より出けると也、

忠久公御下向騎馬衆 世に供奉日記といひ、坊の一
乗院より出ると聞あり、此款、
大村の市来氏
より出ると也、

忠久公御誕生乃事書

忠久公御供人数 一冊、忠久公御下国記 一卷、出水よ
り出けると也、

書本東鑑 一部、御家御傳來の本にて、板行本は嘉禄元年より安貞元
年まで三年の一冊無之、林道春此一冊の御傳來本に跋文書

添られ、東鑑脱漏と名付られ開板に成たるよし、忠久公の御逝去も此巻に見得けると也、然あるに元禄九年四月、府城の御回録に焼亡せしとなん、其より以前稻葉美濃守正則及び林家にも御寫遣されたる事共、同十年二月十二日田中国明の上疏にあるとなんきけり、
御系図并御家之書 一冊、多宝寺よ

酒勾安国寺申状 酒勾次郎、後に右馬入道と稱す、(元久) 恕翁公の御家老を致仕して薩の安国寺に住持す、元禄中子孫利兵衛云入道御名代に上洛せし時、御分国諸士の次第申上との仰より呈上せし申状なり、是を酒勾(用久)一牧紙とも御當家の六巻書とも云へるよしミゆ、(牧九)好久宛なれハ破人の守護代せられし時に呈せし疏なり、

忠久公至勝久公書立 清水の瀬戸口氏より出けるとなり、

矢口開之書 一冊、

御家記録 一卷、志布志より出けるとなり、

山田聖榮日記 名は忠尚、出羽守と稱す、聖榮は老号也、應永五年三月日・卯月十八日・六月日・八月日等の奥書もて八十五歳の時著す書也、一名六巻書、或は七巻雙紙ともいふ、今世に行はる、ものハ五巻也、別に文明二年三月七十三歳にて著す自記の系図目目安あり、合せて六巻也、これに矢口開の書を添へ七巻双紙歟、

本田氏親記

(元久) 本田家檢断之書 一卷、

應永記 一名往言集、十代節山公の御重物にて竜雲寺に納置れしもの也、然を元和二年丙辰十一月長谷場越前入道純齊住持に請て寫取たるものとなん、巻端に北條歴代の大略を記しおけり、常の本は抑當家者といへるより書出し、應永記と題せり、竝に三十五年に終る文安中の著述なるへし、

文明記 一名忠昌記ともあり、文明廿五年十月の事より翌廿六年七月廿四日の事まで記録し、天文廿四年卯月廿六日書之とあり、一本すへに慶長十二年四月吉日長谷場越前宗純より川上左近將監久辰に與ける跋あるもあり、又一本跋文の前に長禄二年・文明八年・同十

七年島津修理亮忠廉の諸所にて合戦せられし勝敗の大略と附録せし本もあり、去れハ豊州家の記録歟、
文明六年行脚僧雜錄 是年の八月三州を行脚し、豪族の世に聞

後、花洛の諸寺再興の爲に來て勸進せし僧の聞かきならん、河野郷左エ門知覺の西福寺より元禄五年比見出したる旧記にて、伊地知重英寫せし本もて肝付甚兵衛兼年寫せしを史館にも呈上し、山

本秋水国史編集の時に至て斯く名付られしときけり、
新納忠勝聞書 入道して栖風といふ、天文四年時久・忠臣・忠續など功勞を先相時の義聞書と題し記とミゆ、
御世始記 忠昌公御即位の事を記せしものとなん、

正八幡御社參行列記 文龜四年二月なり、

西牟田三河守自記 文明十四年より十八年十月までの自記也、新納是久及び忠祐戦死の事トモ記せり、

鹿屋周防入道自記

日向記 十二卷、日州伊東氏の記録なり、

鹿屋氏古文書

相州家御由来 慶長一年較島日向入道松岳自記して孫の与一兵衛に与ける假名文なり、(マ)

黄套舊記 御家 二冊、垂水の町田氏より出けるとなり、

川上昌久自殺之由緒

貴久記 大永六年初秋の事より天文廿四年卯月二日帖佐の本城・新城・山田城落去の夏まで記せし軍書なり、

貴久公自小野御潜行通筋覚 寛文七年行司長谷大藏覚書にて、曾祖父謙岐案内仕たるものとして父彦兵衛より申聞たる赴なり、

樺山玄佐自記

事まで記せり、五年五月十八日六拾歳にて書置ける旧記、
玄佐は安藝守善久の齋号也、大永中より天正四年の

伊集院孤舟物語 孤舟も亦大和守忠明の老号也、永祿五年房州妙本寺住持日我上人日向に下向し、平賀城主野村刑部少と妖肥宰人高橋市右衛門、

か説を聞き書せしものと云ん、

瀬戸口伊豆日記 名は秀安、小字源三郎、父源兵衛秀勝といふ、世々の戦争を記せり、豊州家に仕ふ、秀安享祿二年をもて生れ、天文中

の戦争を記せり、

義輪伊賀日記 名ハ重澄、舎人と稱す、

壹岐加賀守日記 伊東氏の旧臣にして代ノ、兵道役者を見ゆ、天正五年薩州に降参、八年以前の事を年代記に綴れる

古書

翰游集 慶長七八年の頃、長谷場越前守宗純入道著はす所の軍記なり、よて越前日記或は薩陽軍記とも題せり、宗純はしめは兵部少

輔と稱す、

勝部兵右衛門閑書 或は勝目甚右エ門入道衛翁の編集ともいふ、天正六年耳川の役より同十六年夏の事まで記せり、

善哉坊日記 天正四年舊記 加治木日野氏にあるとぞ

落合河内日記 新納氏文書

新納氏由緒書 新納忠元弓箭覚

新納忠元軍勞覚 正保二年卯月廿四日忠元の孫加賀守忠清紀聞して進呈する書也、

新納忠元勲功大概記

有村隼人奉公状 慶長十八年正月廿四日書出也、又貞享元年八月六日子有村安左エ門書出もあり、

伊集院玄巢弓箭覚 伊集院抱節文書

隆信方戦死人數衆 天正十四年三月廿四日島原合戦敵方の衆を記たる古書とも、

太閤御動座備立之御朱印 天正十五年正月朔日也といふ、

惟新公御日記 慶長七年如月関ヶ原の始末を御和談の最中に書記給ふものと云ん、伊勢員昌拜聞の次第を記せしものと云い

関ヶ原御軍記 伊地知増也 聞書一卷、

惟新公御軍記 指宿四郎次郎覚書

関原乱後御往復書 大坂落城まで凡三巻一冊、

古今戦 大島出羽守忠泰著撰といふ、神代より天正十六七年まで歟の事ミゆ、巻尾に右大島久左エ門尉忠泰於馬越編立自筆書也

大島盛大夫忠成とあり、忠成ハ正保四年亥二月の生にて忠泰の曾孫なれハ、袂装せし時に記せしならん、

帖佐宗辰覚書 或ハ宗秀とも、彦左エ門と稱す、子長右エ門宗康父の咄を聞き書せしものと云り、

町田家大概記 町田弥兵衛著はす、慶安三年寅十一月十五日とあり、

新納慶雲覚書 新納遊甫書留

樺山紹劔日記 有田将監古物語

濱田築林覚書 後醍院宗重覚書

肝付氏古文書 樺山家之次第 一冊、国分の小田より出ると也、

検見寄常陸守懐中案文

鹿屋兼長日記 初め三左衛門、后は志岐守と稱す、川上忠堅戦死、またハ伊集院忠真謀逆の事ともなり、

江平傳左衛門覚書 永祿以後父ハ兵衛諸所に従軍せし略記にて、明暦元年十月八十一歳にて書もの也、今佐多家の

臣といへり、

佐多久英覚書

淵邊元真覚書

久作、后は民部左衛門と稱す、明暦三年三月鹿府に知覽より召され、征韓の事とも覚書す、時年八十歳也、領右衛門と稱す、萬治二年八十歳にて奉命、記述して八月廿七日史館に拜呈する本を、同三年七月また

再考し跋あるもあり、或は朝鮮軍記とも題す、

伊地知大膳夢物語 名は朝重、武功多し、元和八年八十一歳にて死し事共覚書して贈るものなり、住し、老年に及て嘗て大膳語り

池田貞秀奉公状 六左衛門と稱す、子右近將監貞安、正保三年六月記聞せしものと、

赤塚真重覚書 源太左衛門と稱す、老て休意といふ、自身奉公せし御弓箭のケ条を略記せしものにて、正月廿七日とあり

れとも年紀は詳ならず、寛永十一年八月十四日九十二歳にて死す、

右松裕盛覚書 安右衛門と稱す、本は伊東衆にて天正以來藩臣と為り、其來任せし由緒を慶長廿三年三月十六日申状なり、

朝鮮軍記 川上久国ミつから従軍して見聞の事とも記述せし書なり、

玄宅覚書 名は祐昌、老岐守と稱す、入道して玄宅といふ、出水の士にて伊藤氏也、朝鮮に従軍せし事をハ寛文四年甲辰六月再

ひ細記して伊藤傳兵衛に与ふるもの也、外に命を承て記せし申分もあると、

友野甲斐入道申状 慶長廿三年三月廿七日呈する案也、大形馬越城實以來の戦功共の申状と、

益山八右衛門覚書 菱刈休兵衛覚書

大重平六覚書 吉田玉林坊覚書

泗川御打立覚書 慶長三年十一月十五日よりの覚書歟、加治木福永筑後守家に傳けると、

神戸休五郎覚書 五兵衛覚書とも題す、又別に五兵衛咄を野村勘兵衛盛豊紀聞するものあり、

押川強兵衛奉公覚 名ハ公近といふ、子孫代々の継書あり、

泗川陳鏡毛色附 川上久国應島津久通齋所記贈る也、

高麗御供谷山衆覚人数 丑後八月廿九日書出と見ゆ、按に寛文元年大史平田純正の徴により呈する者也、

奥開助覚書 或は奥林如筆録と題せし本あり、是と同じき歟、

井上主膳覚書 長壽院盛淳に従ひ関ヶ原に軍行せし事共、明暦三年所記の書也、

桐野掃部介覚書 身自から記するものなり、養孫軍助書出を附たり、

晏齋覚書 山田民部有榮の号を晏齋といひけると、萬治三年庚子三月五日御記録所より黒木・平山・伊藤三士等の朝鮮及び

関ヶ原に軍行せし次第を書記して呈上せよとの命を承け、何れも皆山田家に召聚めて戦場の形勢を互に穿議して書く所の申分也、故に其意を跋にす、

黒木左近兵衛申分 平山九郎左衛門申分

伊藤巻岐入道玄宅申分 以上三人の申分、晏齋覚書の下に見へたる通也、

山田弥左衛門奉公状 出水士にて山田理安の付衆中にて軍功あり、

曾木弥次郎覚書 長野勘左衛門覚書

横山弓内奉公覚 其子但馬忠篤記聞せしもの也、

伊丹孫兵衛覚書 黒木播広覚書

佐谷田九左衛門申分 甲斐掃部介覚書

阿多若狭入道自記 心岳君に召仕はれし諸士の事共、寛永中奉、久慶命所記の物なり、

永祿以来覚書 加治木吉祥寺四世春良和尚の覚書も此歟、

上野隼人覚書 名は忠則、幼字彦九郎といふ、須木の士に村尾笑栖に属し庄内等に従軍せし自記也、(重侯)

川上久国談話 河野通古就て紀聞せしものなり、

川上久国申状 同文書 三巻ときけり、

築地三左衛門咄覚 都城の士なり、元禄十年市來家年庄内に巡行し古戦の咄を聞書させしと、

長友治部左衛門聞書 耳川の役を古老に紀聞せしもの、高城の住人とミゆ、

朝鮮覚記 帖佐の白坂氏に旧蔵するときけり、

谷口宮内左衛門書留 元龜中肝付乱より天正・文祿・慶長・元和に至り大坂落城までの略記にして、承應元年壬辰五月廿四日と跋にかけり、

坂元織部覚書 寛永十二年七月十二日松田邸に指火せし別府主計か

大村重頼日記 市兵衛と称す、加治木土也、永祿八年の戦争を承應元年に記聞せし年代記にて、古戦書付とも題せり、内に天正中の外城、地頭記も載たり、

新納仲左衛門文書 阿蘇墨齊玄與由緒

野元源左衛門戦死記 児玉五左衛門覚書也、

伊地知李右衛門重政覚書 寛永十三年子五月書おく自分の家状一冊也、別に横折もあり、

伊勢貞昌奉公状 島原乱の蜂起を江戸よ

全與相良氏書 島原乱の蜂起を江戸よ、り聞て遺はす書なり、

有川喜左工門覚書 大河平休兵衛覚書

伊勢兵庫貞衡與兵部貞顯書 貞昌の幕府に功ある事を言ひ、黄門公御夫婦江戸御参勤の発起共見ゆ、

東郷重位立合書 重位報川上久国書

北条土佐守奉公状 重位弟子立合書

春成刑部左衛門由緒書 加世田土也、其先兵部久清・兵庫久正、助三郎久、讚岐久千、賀左衛門久加、(原方)

大膳迄の奉公せし次第を元祿五年秋申十一月廿一日の書出なり、

東郷重尚名矢記 日高三左工門、記聞する也、

猪俣為右衛門則康日記 今井市兵衛日記

高崎四郎右衛門聞書

伊東新助敵討 元祿四年の事を元文三年家僕六右衛門記藏せし、ま、語らせて記聞するもの也、時の名ハ權平といふとそ、

事ハ横山日記 高寄氏系図文書

南刑部左工門敵討 出水土なれハ地頭飯屋、の古帳にミへるとなん、

加藤清風始終覚 門人坂本藤四郎清、東記聞せしもの也、

坂本清東立合覚 園田成芳覚書

内田仲左衛門日記 政書、無人島漂流聞書 志布志人、

池山中村漂到浙江口状 安永二年沖永良部附役する時とそ、池上ハ喜三左衛門、中村ハ仲左衛門といふ、(山力)

新納旅庵奉公状 本田親貞奉公状

親貞家文書 本田笑閑奉公状

山田家由緒 山田氏古文書

中馬大蔵奉公状 大島家由緒

有馬丹後奉公状 名は純定、国分士、寛永九年十月大島代官に撰はれ往々功多し、其子ハヶ代五左工門重昌徒行して、八月覚かきするもの也、

山口氏由緒 東郷氏由緒

御家記 加世田の池田氏より一冊、同仁禮氏より一冊、同伊加倉氏より二冊、同市来氏より二冊、伊作の榊山氏より一冊、田布施の藤原氏より一冊、同谷山氏より一冊、垂水の伊集院より一冊、大崎の小野氏より一冊、萬治の比出ける也、校訂して異同を見たきもの也、

御家由来書物 松山の平田氏より、御家代々記 永吉の高寄氏より出けると也、

御家記并代々書立 大村の市来氏より、御家代々書立 水引權執印より出けると也、

犬追物手組 宝徳二年より延宝六年まで一冊、外に至徳元年、其外應永中なともあり、又正文元年十月四日より慶安元年九

月廿七日迄一冊に
せしも見およべり、

福昌寺古日記 年代記ともいへり、

年代記 田代宝光寺の一冊は神代より記し、勝久公禰占に盛行せられし事ともこれに詳なり、桜嶋池田新兵衛家にも舊蔵の本あり、

空山日記四冊 名は忠賢、撰津介と稱す、空山は道号、島津氏喜入家の三代也、永正十七八年の間一冊、享祿二年一冊、天

文六年二冊、合
せて四冊なり、

三島本覚坊日記 天文廿三年九月十二日 貴久公 義久公岩殿御出陣の事より、同十月十九日までの事を記したる日記にて 貴久公に繼

て讀へき旧記なり、

山元氏古日記 蒲生の士なり、弘治元年二月より三年六月迄の日記なり、磨滅して讀れん處多し、亦 貴久公日記に繼

て讀へき
日記なり、

喜入季久上京日記

樺山玄佐日記 元龜三年九月廿六日早崎御陣の事より、

上井覺兼日記 天正二年八月一日より十二月晦日迄、三年元日より四月廿四日迄、十一月朔日より十二月廿七日迄、四年八月十六日より九月六日迄、十年十一月朔日より十二月晦日迄、十一年正月元日より十一月晦日迄、十二月元日より大晦日迄、十三年元

旦より十二月廿六日迄、十四年元旦より十月十五日迄の事を記せり、
(年カ)

御使來より御老中の時まで也、分けて十四冊にして世に行はる、五年より九年迄五ヶ年の事は關たり、家

に秘すといふ説あれともいふかし、

上井氏日記 慶長十五年欽一年の帳也ときけり、さあれハ覺

中書家久上京日記 兼死後にして治部少輔經兼の日記にもあるべし、
梅天御一代記 永吉の高崎氏より
出ると也、又梅天

一世の記と云ハ垂
水より出ると云、

本田加賀久親日記 中書家久の家臣也、永祿以来の諸日記、過半焼失に遺ひ殘篇を拾綴るものとぞ、

耳川合戦日記 川上左近將監久辰の天正六年戊寅九月十一日山東御城の御戦に出船まし、てより十

一月廿九日御州陣迄の日記なり、

御年男日記 伊地知又八・本田又二郎勤ける時、天正十年元旦より十五日までの御式を留たり、正本は御納戸に在るよし、重

英の抜本査議
に見へたり、

本田大炊太夫御年男日記

伊地知勘解由左工門御年男日記

日知屋陣日記 佐多忠増小田原陣日記

家村源左衛門日記 天正十五年 太閤西征の後、六月十五日 竜伯公始て御上洛まし、ける供奉の日記なり、

山口加賀日記 初め又左衛門といふ、天正十五年四月廿三日豊後帰陣の次第一番二番に分けて記す、何人の日記といふ事ハ知ねとも、特に

又左衛門か勘委しけれ
ハ亦同人の作ならし、

新納忠増軍行日記 弥太右衛門と稱す、忠元の子也、文祿元年三月朔日より 松齡公朝鮮御出陣徒行し、其出門の

難情などより七月廿二日迄の日
記也、下文殘缺ありて傳はらず、

堀内日限坊廻国日記

高麗入日々記 文祿元年三月より慶長三年十二月まで、我藩の事を主として記したる軍書也、下文殘缺して讀むべからず、

高麗入御日帳 文祿三年八月廿五日より十二月卅日迄、又同四年十月朔日より晦日の事迄しるせり、連長坊か日記と

文體相
似たり、

連長坊俊昌軍旅日記 面高氏、慶長二年七月唐島の瀬戸より高麗奥入に從軍せし時の事を日々書記候、

高麗日記 帖佐の有田新左衛門家蔵すと
きけり、高麗入日と記の事歟、

大島忠泰軍行日記 新納忠元上洛日記 文祿三年、
(藤孝)

忠元三十首和歌 細川玄旨の評点あり、

阿蘇玄與日記 新納旅庵日記 覺書の類なり、

小根占橋氏日記 町乃市郎左衛門家蔵す、文祿三年十月の事より元
和三年八月廿一日まで、時の殊事を記載せしもの
ゆゑ、

鶴戸山勸進日記

加治木御日帳 慶長十二年より十三年・十四年・十九年等の
御帳にて、年頭進上物等十二冊あると云ん、

伊地知勝左衛門日記 慶長十八年の日史なり、又元和七年
もあると云、

本田源右衛門親存日記 元和の末より寛永の初ころ
に御使役せし時の日記也、

川島新右衛門日記 町田岡書頭
の与力也、

蓑毛氏日記 出羽守と云いふも、 山田昌巖日記
の、日史と云ん、

伊集院忠真日記

李田九兵衛日記 元和五年 御上洛の供奉せし時の日史にて、二
月廿一日より九月十五日まで御上下の事なり、

川上久国上使附日記 寛永十年、

伊東祐昌琉球在番日記 寛永十五年より十七年まで、

河上三河守日記 寛永十七年江戸にての日記也、十二月
十三日より十八年二月十九日までなり、

新納證印日記 名は忠雄、仲左工門と稱す、御使役に
て加治木公子に給事する時の日記なり、

岸良清右衛門物語 慶長十八年御下君の御質として、
江戸に行給ふ御供にての事と也、

島津久通日記

李田十左工門島原立日記 寛永十五年正月六
日より廿一日まで、

島津中務久茂日記

島津甲斐久馮日記

阿多忠朗日記 六郎右衛門と稱す、年代記の類なり、
(綱久)

竹内助一日記 名は益祐といふ、泰清公に近侍す、寛永十九年より
少くあり、寛文十年九月廿二日より同十一年正月十
一日迄一冊、同十三日より同七月廿六日まで一冊、又廿五日より同十
二年二月十六日迄二冊、同廿一日より十三年五月十八日迄一冊、皆文
簡な
り、

加久藤嘜案文并萬留 寛永廿年より正保・慶安・
明曆・萬治等數冊あり、

延久公御長久記 一名綱久様御若年之内、
萬寛日記とも題せり、

鎌田藏人政昭日記 萬治二年亥九月より、又一本ハ慶安二年六月よ
り日光御參詣の事ともあると云、又外に自記も
ある
也、

野村盛豊日記 勘兵衛と稱す、(吉貞) 淨因公御抱、
寺欵にて記されし、數冊あり、

池田治左衛門兼武日記 延寶年中と云、

伊勢十兵衛日記 江戸御留主居の時、赤松甚左衛門と俱に記せし
本也、一説書拳とも聞けり、貞享・元禄の間也、

肥後主膳日記

横山長古日記 慶左工門と稱す、寛永十年生れにて、元禄三年五十
八歳にて家督せり、異国座筆者也、幼年より好んで
日史を記す、懐
中記とも題す、

相良長英日記 清兵衛と云ふ、元禄十二年・
十三年・十四年などときけり、

横山蔵之丞日記 長古の二男也、元禄三四年の抜書などあり、

伊地知増也日記 名ハ重飛、權左工門と稱す、御臺所役もて御子様方御生育方の事共見えたり、

吉井友利覚書 大山源兵衛日記 覚書ともあり、

相良平四郎日記 元禄七年、和天平七日記

林道基覚書 元禄九年丙子四月廿三日、御城回祿の事共也、甚五兵衛といふ、

池田園右衛門日記 元禄七年、上町會所日記 元禄中、

平田可竹日記 木村静隠日記

徳田大兵衛日記 御當家自序之書 吉田の春成氏より出けると也、

島津家物語

御當家由来 原本は永正中の古書也、それにまた、少将忠恒公の御時までかき續けるとミゆあり、

御當家始之書 右と同本にて異名なる歟、

御家譜三百冊 平田清右衛門純正奉 命編輯し、其勲功により、百石を賞賜せられ、慶長八年まで絶筆ときけり、

かな書略御系図 御家譜編輯二付伺条書 平田純正、(歴)二年十一月八日

の事と
いへり、

年譜傳 御家代々書立 一卷、帖佐の有馬氏より出けるとぞ、

島津傳記大概 貞享中史撰ときけり、

島津御譜略 田中国明の著述にて、江戸の聖堂に納られしと成り、

献上御系図一卷帳 寛永十八年島津久慶の書留也、

御高恩記 (厚カ) 御三君 義久公、義弘、御系図事書 平松の黒田氏

より出ると也、

関箇原之儀御書出 貞享中、戦死帳四冊

軍記 一冊、加治木の竹下氏より出けるとなり、

家光公御成之記 寛永七年伊勢貞昌所撰也、外に御路地またハ御能等の事は雨田某に記させたる一卷、又御料理等の

一卷もあると
なんきけり、

島原燼餘 むかしハ明府に在りしを、延享の比と歎史館に授られしと成り、前に載おく評定所案文の事ともきけり、

島原軍記 寛永十四年丁丑十月と書出す、嶋津久元嶋原出陣の様子問答返答あると成り、此事なるへくおもへとも詳なる

をし、

王子原犬追物御覽の記 弘文院林道春著はす、

貞久公氏久公祭文寫一冊

久豊公御廟所御灰塚一卷一冊 史館にあるとぞ、肩に二、十九二ノ内とミへると也、

御代々御誕生書 国分の徳持庵より出けると也、

古今要用之記

平田純昌案文 天正五年より元和元年まで軍記也といへり、

竜伯公御官位乃調 宝永四年亥九月也、

新撰系譜 寛永九年奉 綱貴公命、大田久知・川野通古所撰、凡そ二、十四家、その中にて鎌田・本田等ハ遺れとも、多くハ元禄

九年の御回祿に備、せしとも聞およへり、

諸家大概記 河野通古撰、諸家調抄 郡山遜志著、

頼朝公御書註解 田中国明奉 命註解す、凡三年にして成れり、内、とは菊地東勾も預て助ること多しときけり、林大

字頭款、
文あり、

島津世録記 八卷、島津久通撰、林大学頭訂正すといへり、

征韓録 六卷、島津久通奉 綱久公命撰、林大学頭序、

征韓附録 御家由来書 庄内高城の上野氏より一冊、また都城の小幡氏一卷出けると也、

三國擾乱記 宮城臣土持仙岩著述、

御當家合戦聞書 一冊、馬越の川田氏より出けると也、

摩薩兵乱記

牛根軍記 一冊、垂水の堀内、家より出けると也、

日隅戰場記

古城主由来記 亦土持仙岩著述、(光久) (綱費)

御重物由緒 貞享五年八月十二日、寛陽公より大玄公に御譲進せられし以来、浄国公御隠居の比までの本と増減あるときり、

御代々御判鑑

日新菩薩記

或は日新記ともいふ、日新寺八世泰圓守見六十三歳にして慶長三年記すとん、

御防戦乃記

麩刈の賊を討給ふ事を記り、其文を按ずれハ翰游集の抜写とミゆ、

三俣院記

平田純庸編集、そか中にて、山之口郷ハ池江氏編撰なり、

祇答院記

土持仙巖著述、

寛陽公御葬禮方日帳二冊

全高野御登山一卷帳五冊

御居城御戰場由緒 史館所撰、

岩屋古城記

御家禁忌聽駒来由記 一冊、

古城古戰場記

史官撰、

御家御菩提所覚

廟堂要覽

地志要略 上下二卷、宝曆六年九月大史吉田清純・本田親方・山田有雄所撰なり、

関ヶ原始終大概記 町田俊懿奉 浄国公命、松齡公の御譜を本にして、諸従軍せしもの、覚書等に考合せ編集して、

て呈上せられし赴き、延享二年十二月二十八日の跋文にあり、

寶永雜録

(重年)

島津世家 郡山遜志奉 命撰之、得佛公より(忠久) 圓徳公迄、別に延享二年より宝曆十年まで合せ二十七卷なりとぞ、

島津國史 山本正誼奉 命撰、亦得佛公より 圓徳公まで三十二卷成とぞ、別宝曆六年以後の事も史館隨筆と名付られて書れ

しもあるとぞ、又國史編集間合留てふものもあるなも聞およへり、

西籙野史 得能通昭私撰、妙圓公御家督考

島津御勲功記 宮城にて所撰ときけり、

薩藩名勝志 大史本田親孚、徧巡三州寫其景勝所編撰也、凡十九冊、

御治世要覽 清水盛香撰集せしとぞ、

御上下帳 寛永十五年正月 光久公御暇以来の御着城御参府の年月日御供・御家老・御使衆・御禮使等見へたり、別に吉貴公帳あり、

御役元基 平田善太夫撰、

御家老記 上代は守護代、或は惣奉行、またハ奉行・乙名・老者役・老中など、ミゆ、

御家老座筆者帳

御使役記 一名御用人記と題す、上古は申口役、或ハ申次、御使衆など、ミゆ、

御談合役記 若年寄とも、正徳三年所撰と云きけり、

大目附記 横目頭とも大横目ともミへるとな、亦た正徳三年所撰ときけり、

大番頭記 寺社奉行記

勘定奉行記 付支配奉行・吟味役・勘定小頭、

御兵具奉行記 物頭と改らる、

琉球在番系図 在番奉行といふ、附役・筆者・与力なども付たり、寛政八年以後を記せり、

高奉行系図 物奉行系図

御記録奉行系図 付添役・見習、御右筆記

諸御役人小役人御賦并勤方大概

御納戸附系図 中山王系図

琉球国由緒

琉球征伐記 一名琉球傳と題す、七嶋の船頭せしもの共の閉書と見ゆ、

琉球一件公義御届等之覚

中山世譜 九卷二本、蔡温撰、○琉球教條 雍正十年十二月具志頭親方著述、此即蔡温也、

大島私考 三冊、本田孫九郎親学、文化二年霜月本島に代官たるの時所著也、

大島代官記 喜入忠續表藁 元祖以来代々の由緒、諸軍勞を申出られし家状なり、

奇界略志 長寄龍藏方義著述、喜界島代官記

島津支流系図 喜入家由緒書 萬治三年八月廿五日家臣伊集院与左エ門書出之、

家久流系譜 付 登家 木城 小林 九良加野、

寄合以上他家系図 穎娃家聞書 明暦四年戊八月十日竹内蓮光とあり、

比志島氏文書 五家、鎌田政近文書

清色龜鑑 入来院氏文書、

薩陽諸家由緒 三卷、元禄宝永の用人たるの時、史官より諸調の取次せし折く竊に拔萃し、またハ自己の間合書等なり、

秩父本田調書 伊地知助右衛門重英の史官たる時、上疏せし一冊なり、世に家争といふ是なり、(乗カ)

本田氏文書 酒勾氏由緒系図

入来本田氏書 弟子丸氏系図

市来氏系図 田代氏系図文書

權執印氏文書 猿渡氏系図 要人、

執印氏文書 延時氏文書

国分氏文書 池畑氏文書

東郷氏年代記 三国軍記

諸家系圖拔書 日高六右エ門所拔萃、凡四百十家、

江戸京大坂定府由緒 澁谷東郷氏家乘 二冊、肥後盛賢著、

莊内平治記 伊作古老物語

莊内古跡記 伊作記

庄内軍記 古本一冊、増補二冊、天誅録

阿久根由来記 大史平山武毅撰、長島由緒

樋脇由来記 山之口古今記録 邑土前田氏に在り、

栗野由来記 飯野物語

志布志華篋 邑土阿多源太夫著述、国分新城繩張記

国分神社佛由緒 元禄十年、又八同十一年十一月廿八日國分喫肥後六左工門、坂元休左工門・宮原藤兵衛・野村外記

より取しらへ、寺社方に差出たる副本なり

晴養生害記

南浦軍記

大島海路記 代官本田親孚著

大島要文糟粕集 十五冊、凡

屋久島記 奉行馬場傳兵衛著

宮乃浦番所新建記 森治右工門著

稻津亂記 倉岡にあり

木崎原軍記 伊東一空撰、

全覚書 穆佐にあり

木崎原御一戰參考 向井達夫撰

穆佐路頭話 邑上野村高輔著撰、

木崎原類注文

帖佐若宮八幡 平山武敏著、

帖佐由来記

御曆代 入佐即道著

北原落城記 偽妄多し、

島原怪闘志 入佐即道著

適意集 市来源右工門家年著

盛香集 清水次右工門著

類抄臆記 五冊、盛香者ハす、

通昭録 得能左平次著

通照雜録 同上、

静脩雜録

年中記 清水盛富著はす、元禄以来安永迄の年代記也

稱名墓志 本田親孚撰、四冊、季安訂補

名臣小傳 本田親孚著

藩翰譜島津辨誤 本田親孚著

履祥隨筆

古蹟癖 鯨島傳藏宗恒撰

不忘記 佐土原土人伊集院某所著の兵書なり

本藩地理拾遺集 田尻小吉種甫編

三國地志考

賤乃男手卷 白尾齊蔵国柱著

新古談語 新納忠村著、一説は平田以休著ともいふ

薩陽落穂集 伊集院彌八郎兼喜明和八年八十餘歳著 三曉菴談話集 橋口善兵衛飄隠木村探元の話をし者也、

濱の砂 島津久峯公子木村静隱の説話を紀聞せられしものとなり、

浦乃波 静隱嫡子木村賀右衛門時規の紀聞也、

舊傳集 一名古咄集、宮内某編輯、別に宮内喜兵衛覚書と題するもあり、是ならん、

類事苑 三冊、入佐即道著撰、宇宙記 平田治右工門純庸著す、別に純庸自記と題するもあり、

諸拾集 有馬源兵衛集、

征韓略志 三冊、入佐即道著、

征莊略志 二冊、即道撰、

徳田大兵衛答話物語

成形図説 白尾国柱著、

拾塵鈔 田尻種甫輯、

老圃農談 彌寝丹波博く老農に問はせ、凶年等の備になる事とも記させられしものとなん、

薩摩名鑑 御一門以下大身分・一所持・寄合・寄合并・無格の衆を武鑑に擬して文化の始に著はしあるを、鯨島某補訂せしとい

り、

大海集 同上、全、

袖秘集 田尻種甫繕寫、二冊

萬葉集 種甫集完、

臺明寺文書 凡七巻、享保元年十二月史館より横寫して所賜なり、清水にあり、

泰平寺縁記 寛正四年六月十九日住僧教源著す、

靈山寺彌陀建立縁記 承久二年庚戌八月申木野三郎平忠通著ハす、申木野頂峯院にあり、

全寄進状 同人寄進せし状にて同寺にあり、

石屋和尚行實 永享六年三月竹居和尚の法嗣為藩撰る所なり、

石屋禪師塔銘叙 永享六年南禪寺惟肖和尚撰る所に
して、竹居正猷建られしとなり、

竹居禪師塔銘 長享二年九月九日南禪寺天徳和尚
の撰文を法會嗣東純建之といへり、

仲翁和尚行状略 福昌寺三十一世嶺室和尚より、
龍澤和尚に答られし書と見ゆ、

仲翁和尚行業記 竜山三十九世愚海玄道元禄十丑の年書お
き、同十二年卯の夏廣壽の法雲跋あり、

仲翁和尚内集 剛和尚尚語録 (入意)

福昌寺奉加帳 永享十年と卷末にあれども、尚、義天公の御名も
冠頭にあれば、應永の末より奉加ありし帳ならん、

眞俗二諦常住記 大興寺開祖頼政上人所著なり、頼政は酒匂紀伊守
二男にて、坊津一乗院の住持にて此寺開かれたり、

(虫園)
大岳公の時、一乗院頼政法印の筆記
てふもあり、此とおなじ書なるべし、

吉祥寺春良世覺書 永禄十一年十一月廿四日馬越の城責より明暦三
年正月江戸大火の事まで抜寫せし本あり、全文
の本すもあ
るべし、

運譽上人覺書 加治木本誓寺の開祖にて、寛
永三年正月遷化の人なり、

松岳和尚日帳 加治木吉祥寺開山也、一冊、

願成就寺千鉢佛寄進人衆 帖佐にあり、

諏訪祭禮頭殿人數帳 慶長の比より貞享まで、鎌
田藤四郎藏本といへり、

彦山由緒 諏訪稻荷御神事由緒 文化五年史
官所撰なり、

清水山王社由緒 寺社縁記 格別のを一冊
に記しきけり、

水劔由来記 寺院由緒 社社方にあるとなん、

寺社古棟札集 大興寺由来記

大乘院過去帳 福昌寺住持系図

福昌寺列祖住山記 長善寺戦亡帳 飯野にあり、

浄福寺過去帳 加世田にあり、

福昌寺戦亡帳 一名登蓮録といふ、何世に始るを詳にせず、寛永中
に命ありて、官より改置れしものとなん、其後享保元年またこれを改
られしと也、七月二日・六日・十五日、九月十一日等に吊祭の法を執
行はると
いへり、

同愚海和尚退院一卷 元禄十三年
の事とぞ、

浄光明寺古過去帳 同御文書二冊

高稱寺過去帳 庄内高城の寺にて、天文九年四月廿二日弓筋
以来同十一年八月廿日戦亡の人数といへり、

日新寺戦亡帳 魔島神社廻

天昌寺戦亡帳 三国国初神社考

霧島縁起 元禄四年十二月華林寺十
五代住持亮賢奉 国命撰、

青龍權現記 尼玉梅菴撰、 花尾山縁記 寛政元年十月
山本正誼撰、

法華嶽寺縁記 天明八年山本正
誼代住持昆山撰、 法華嶽寺古縁記

能學寺由来 貞享三年丙寅閏三月九日堀、
宗勲覚書して寺に与ふと也、

浦田神社縁記 元文三年種子
島人平信友撰、

南島考 白尾国柱撰、 魔藩名勝考 白尾国柱著、

南島志 新井白石
撰、二冊、 神代三陵考 白尾国柱著、

薩隅三陵記 神社傳記 大河平隆棟著、

三州神社考 本田親盈、
撰、五冊、 社頭由緒記 田尻種甫集、

山口地藏由緒

住吉社御奉納歌集 末吉也

日隅御巡詣神社記

本田親

出水浄圓寺奉加帳

寛文五年十二月住持遠阿か時なり

盲僧三徳咄覺

加久藤地神家督也

御兵具所稻荷縁記

加紫久利由緒 出水也

福昌寺疏双紙

福昌寺住持遺事記

全紫衣成願願書

天明七年、全天海和尚自記 (實久) 大中公御葬礼の事ども見ゆるとそ

佛生寺由来記

蒲生の祈願所也、貞享元年八月廿三日赤塚源太左工門書あり、蒲生の旧記とも謂べき書なり (盛香) 後仁右工門・田中五右工門考て朱書の奥 (国明) 正徳四年八月大史川上平石工門・肥 (親次)

大乗院列祖之記

龍洞院文書 一冊

愛染院由来

寶福寺由来

烏陰漁唱

烏陰文集 桂庵和尚著、一冊、

烏陰雜著

桂庵和尚家法和點 元和板、

乱道集

全 集松老人著す、因て巢松以安詩集と題する

南浦文集

大竜寺開山文之玄、板行なり

碓愚論

全、此も板行あり、恭畏問答 全、た板行、

南浦遺編

文之著、日州平治記 全、

決勝記

慶長十六年十二月文之和尚国分の正興寺にて、伊集院玄集十五歳より一生涯の軍忠を漢文に録するなり (久春)

日新公以呂波歌

大中公御法樂連歌

永祿二年五月十八日九人と興行せられし本なりとそ、国分にあるともきけり

竜伯公御詠歌集

大中公南無八幡之御詠歌 十一首

全以呂波御歌

千句發句 伊作の篠原氏より出しけるとそ、

大中公六字御詠哥

永祿九年十月三山戦死の御追悼なり

黄門公難波津御歌

寛永五年九月十九日 公江戸を立せ給ひ、十日二日伏見に着せられ、夫より御船中遊し、此御詠もよませられ、同十五日御脱稿あり 詠もよませられ、同十五日御脱稿あり

泰清公御詠草

諏訪兼利謹んて評、点せしものとなん

御連衆座配調

泰公遺事 肥後平蔵盛賢撰、

大玄公修徳要術

同公賜華岡公子御誠書

浄国公御屏風画乃賛辞

画ハ木村探元に、詞は木村林庵に命して書せしむ、侍臣岩切治房・原田經兵より請を上げて敬寫し世に傳はるとなり

大玄公七十御賀歌集

糸柳 山口仲左工門治易著述にて、如竹傳来の心學述られし書なり、以呂波哥もあり、元祿末年也、

六論演義解釋

児玉金麟著述なり、外題ハ追て訂正すへし

古乃遺愛

肥後盛賢著述

溪山公龜鶴問答

同公以呂波御歌

同公述志篇

如竹翁傳

寺社巡見記

如纂文集 諏訪兼利著述、

員外千首和歌集

諏訪兼利著

員外千首和歌集

諏訪兼利著

員外千首和歌集

諏訪兼利著

御領国巡行詩 元禄十年市来虚白奉 命巡 行日隅所紀行詩、凡一冊、

中村閑居記 諏訪兼利著述、

忍艸 一名ハ飛鳥川記とも題す、諏訪仲右工門兼郷兼時の 泰清公の 喪を奉して高野山に從行せし時の紀行也、世に兼利の作と傳ふ

ハ誤

浮艸乃露 上原久貞妻昭恵の著述にて 鉄舟訂正すといへり、二巻、

梅花百詠 長良清兵衛 長英著述、

娘媽碑銘 深見玄位撰、 菊地東匂文集

和南文集 島山義方 著、五冊、 北郷久嘉日記

東郷重位以呂波歌 示現流の 傳書と也、 柏原幽靜以呂波 「歌名」 右工門と稱す、

矢野籠書 惟新公大坪流の心得を覚書して、寛永十二年二月元篤判も 徳千代丸殿と宛遺はしたる書と見ゆ、元篤は主膳か名な

しる、

醒眠集 柏原公英著、 平田可竹遺誠書 伊東五右工 門に所贈也、

山田填雄聞書 四郎右工門といふ、元文元年七月・五年 九月十六日五十七にて書おく、二冊あり、

一鉢集聞書 和田乗助正張著す、 西海拾玉集 二宮基内編撰、本 炮術の傳書なり、 藩名士の和哥也

尼玉圖南傳 播州備生河口三 八子深撰なり、 月洲詩集 山口君豹著、喜三 右工門といへり、

南堂先生賀詩文 山本正誼以下洋 宮儒生の作なり、 蘭阜詩稿 吉田清純著、用 右工門といへり、

柁城黒川記 島津久徹著、 名山樓詩集 上同、

海門遺稿 赤崎貞幹著、 獨双紙 伊集院兼丘著、

秋水先生文集 山本正誼著、 學問乃大意 上同、

西藩名所倭歌集 本田親享 著、未成、 櫻島炎上記 山本正誼著、

櫻島炎上記 興国寺亮洲著、 櫻島炎上記 竹道藤 四郎著、

櫻島震火記 印東孫市著、 櫻島震火記 小田醫三著、

男山物語 諏方兼利携妻裕上邸江戸既 満九年、而還國時所紀行也、

琴蜂集 府下市人瀬 戸山琴蜂著、 駕籠藁地 今井珍重著す、名ハ貞 山澤禪枝著す、 慈徳公の御遺毛を、 雄、八右工門と稱す、

麦藁笠 奉して高野山に登れる時の紀行なり、

都巡 禪枝著、 三虚藏道乃記 上同、

花屋帳 右同、 虎狩 高柳行文著す、好 左工門といへり、

狐狩 東都狂賦 寛保の頃、東の事を記 して大島に遣けるとそ、

喘息軒隨筆 川上嘉善親睦の著述也、天明六年五月十五日官 を罷られ幽棲の時より筆を起けると也、凡三冊、

古乃風 赤崎貞幹著す、寛政三年十二月今の 光越の御供せし時の紀行なり、芝山持豊卿の跋ある也、

假寝乃床 右同、 憂玉章 附悼内詩、右同、

深恵 右同、 貞幹詠艸 右同、

湯谷乃記 右同、 旅行記 谷山角太夫純香從 齊宣 公及自江戸所遺而作者也、

加藤清風碑文 市来政公撰、

劔法内侍所 天真流傳書にて、川上八次郎親持與 門人吉井金九郎友傳所答問之書なり、

田代翁記 門人毛利治 右工門著す、 移居記 上同、

烟草記 右同、 大黒記 右同、

東翁記 門人平城木 右工門著、 西藩四戰記 上原善藏著、

牟禮城碑 山本正誼著、

新納旅庵碑文 藤世庸撰、

川上忠實碑文 垂水儒臣、冠太著す

盛淳碑文 大乘院十一世覺山著、ス、大興寺にあり、

本田親商碑文 藤世齋著、

蘭叢遺稿 伊克明字子允詩集なり、江戸の関備翁また、閩人の趙登樓等の評点せしもあり、数冊、

九如集 垂城臣□木親房、五十賀詩なり

島津久通祖先碑銘 弘文学院學士林大學頭所撰にして、延宝六年、島津久胤邑の宗功寺に建られし也、

松浦示現流系図

松浦書簡集 照高弟崎元、與高弟崎元、

島津久貫誠其子書

御家世譜歌 福昌寺自、巖和尚著、

舊貫發揮 徳田某著、兵、学ノ書なり

武學口授 上同、

民信録 右同、

韜習餘論 右同、

三才掌故便覽 高雲堂末川元善、著述、五十七冊

臨書拔萃 上同、凡、十五卷、

和漢見聞式 全、三卷、

御家累代略記 全、七卷、

古語俗拾遺 全、三卷、

温故纂要 全、全、

幽栖録 全、全、

技術或問愚答 全、全、

兩夜問對 全、全、

老乃一筆 全、全、

俚言雜記 全、三卷、

高雲類題歌集 全、三卷、(堂威力)

續俚言雜記 全、三卷、

燕居和歌式 全、二卷、

續々俚言雜記 全、五卷、

藪乃ちり塚 全、全、

克己隨筆 全、全、

浪乃下草 全、二卷、

偶言筆記 全、全、

西海狂歌袋 全、二卷、

日記書拔 全、全、

東往來夢乃浮橋 全、全、

古老雜話 全、全、

伊勢詣大和巡行 全、全、

三国譜傳略記 全、二十六、未定

武藏鏡 全、全、

炮術傳來 全、全、

洛湯東西一覽 全、全、(陽)

稻留流由緒記 全、全、

難波遊覽 全、全、

炮術妄說闕疑集 全、二卷、

出會百物語 全、全、

小野物語一睡夢 全、繪入、全、

手探仕事 全、繪入、全、

温故成道 全、四卷、

天元略術開法記 全、全、

隱栖三樂 全、全、

俗見聞隨筆 全、三卷、

徑旁土筆 全、全、

孟子和解 山本正誼著、

孝經和解 山本正誼著、

童蒙須知和解 全、

經義和解 正誼以下、師員著、

駿臺雜話叙事 帖佐來、章著、

草齋論談 工門著、木藤市右、

幼學指南 竹迫藤、四郎著、

日新公以呂波歌註解 久保平、内著、

論語道園章演義 上同、

鷄窓緒言 市來敬徳、著、七冊、

文集 上同、十四冊、

東遊紀行 全、

野邊乃千種

文武苦学乃覚 全、

隣国使者口答 全、

安政五年戊午二月

名越時敏寫

3 新納家書目

関ヶ原陳始終大概

神戶休五郎覚書

大重平六覚書

新納旅庵御奉公之覚

本田助之丞右同

中島大蔵右同

曾木弥次郎覚書拔萃

黒木左近兵衛申分

横山休内御奉公覚

桐野掃部介右同

井上主膳覚書

関ヶ原御一戦之大抵
〔山田聖栄覚書とも云有〕

押川強兵衛一世記

諸家大概記

飯野由緒

川上久国雑話

泰清公御記

朝鮮入起之記

御代々御戰場御由緒之地覚

并御居城由来記

木崎原御一戦参考

忠平公御記

加久城御由緒
〔兼説之〕

三国略誌

晴寰御生害之記

御當家由来

旧傳集

貴久公御軍記
〔御當家始之書共〕

忠平公御軍記
〔惟新公御自作軍記共〕

日新公御記
〔貴久〕

泰清遺事

琉球一件御書出
〔日新普庵記トモ〕

驄毛由緒

奥関介覚書

大河平在番由緒

翰遊集

〔長谷場越前自記トモ〕

関ヶ原合戦記

旧傳集

三国擾乱記

新納忠勝聞書

嶋津大和守久章一件

惟新公御自記

酒匂安国寺申状

藩翰譜嶋津傳弁誤

朝鮮於唐嶋戦死人数記

木崎原舊記

日州耳川合戦日帳

日州耳川合戦記

盛香集

嶋津御勲功記

仁君遺名誌

〔兼説之〕 伊院肥前入道一代於御弓箭粉骨覚

決勝記

関ヶ原御合戦以後日州邊江稻津乱妨一件

伊地知助右衛門家筋之事

池田左近監貞安覚書
〔符款〕

伊作記大概記

略御譜

嶋原軍記

栗野由来記

山田聖榮自記

樺山玄佐自記

遺事筆記

宗信公一件

虎壽丸様加世田御通筋覚

古老物語

三島本覚房日記

木浦木番手八重尾氏由緒

八重尾源五左衛門覚書

中馬重方働之次第

諸家由緒

御寶物由緒

鎮西引付

伊地知駿河守日記

諸家由緒

伊作家由来

日州美々川合戦

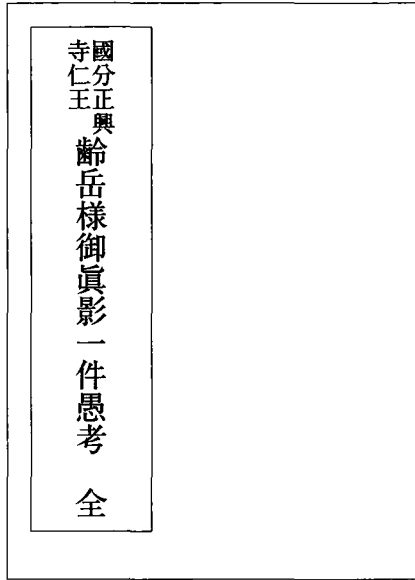
水劔由来記

旧典拔書

(一〇ハ朱書ナリ)

国
齡分
岳正
様興
御寺
真仁
影王
一
件
愚
考

(表紙)



(中表紙)

天保七年申七月廿七日起草、晦日成稿畢、

「雜」ノ十

國分正興寺仁王

齡岳様御真影一件愚考

覺

元弘建武之乱、於御國ニ者專(貞久)道鑑様御代ニ相當リ、宮方・將軍方・直冬方坏向々立別れ、争戰無止時、折柄御嫡子定山様御一人ニ而、薩隅日共(○ナシ)御讓受被遊候儀乍恐當時難被為及御手砌ニ候故、定山様御志願之趣被為在、從道鑑様薩摩國守護職を以定山様江御讓渡被遊、大隅國守護職之儀者御二男齡岳様江御讓渡、御兩手ニ而御敵退治為被遊由、其頃大隅國者兵衛佐直冬方ニ相付、帖佐者平山某、蒲生者蒲生彦太郎、加治木ハ加治木彦次郎、於國分邊者(○ナシ)姫木者、姫木郡司、上小河邊者小川郡司、小濱あたりハ小濱十郎、日當山邊者東郷藤左衛門、曾於郡邊ハ税所介一族、其外肝付兼重跡、敷根・廻(今)福山、溝邊坏、何れ茂御敵計罷在候得者、差付大隅江御入部被遊候事、何分ニ茂不被為叶、就夫覺嶋者乍薩内茂隅州堺之故、先覺島迄御入部可被遊思召ニ候処、是以郡司矢上左衛門五郎高純催馬樂城ニ楯籠、振兵威候ニ付、曆應四巳閏四月朔日、道鑑様御舍弟北郷元祖資忠等為太將被差遣、御攻伐有之、同十六日、被及御退治候得共、猶相被差遣、翌々康永二未九月十二日ニ被相攻之、同十一月七日、終ニ致落城候筋相見得候間、其後弥御入部

被遊候半、山田聖榮茂、齡岳之始ニ山門より寔嶋へ御入

貞治五禩丙午十一月

部之御祈念ニ山門之諏訪ヲ移御申候、重々も御信心ニよ

大隅國守護藤原朝臣
氏久判

り正八幡之御輿を移御申、若宮八幡是也、如此御神力を

以、郷司屋紙を御退治有て末代之御住所ニ成、御子孫繁

昌之所也と被書置、正平十一延文元年十二月十八日諏訪御寄

進状ニ茂、天下泰平我門繁昌、殊為遂弓箭素懷、所願如

件と被為書置、其外ニ茂御寄附等段々不少、左候而、貞

治二卯四月十日、從 道鑑様薩摩國守護職等を 定山

様江、大隅國守護職并薩州寔嶋地頭職等を 齡岳様江、

某々御判物ニ而御讓被進せ、其年七月三日、道鑑様御

逝去被遊、猶以大隅江御入部被遊候事、前件通難被為叶

候ニ付、同五年午十一月、齡岳様厚御誓願之歌被為在、

御真影を持國天王ニ被為擬刻候、御願文當分重留船津村

森永門百姓仲太郎と申者所持仕居候由、先年左之通写真

置申候、

1 造替 持國天王

右誠志者、擬欲嶋津修理亮藤原朝臣氏久之真影、然則董
修生々件種善因之結縁、世々志求家門昌榮之嘉運者也、

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二六号文書ト同一文書ナルベシ)

右外御判物等茂所持仕居、河野通古大概記ニ茂、氏久

公御證判數通帖佐船津村之百姓所持申候、此者姫木嫡家

坎と存候与有之、船津村其後重留江被召付候間、右仲太

郎家ニ可有之、因是清水・姫木邊ニ右 御真影之佛像御

安置之寺等可有之筈与存、一両年跡國分郷土安樂休兵衛

參候節相尋申候処、國分内村之正興寺仁王之儀、氏久

公并本田親治真影と申傳、元録年間御彩飾被召替御之古

帳ニ其通書記有之段承届、右御願文ハ其躰内ニ被記置候

御銘文之古寫ニ茂可有之哉、符合仕事候ニ付、國分ニ茂

私より寫遣置申候、拟右御安置以後、左様 御信心之功

徳共可申哉、自其十年後永和元卯八月、九州探題今川伊

豫守貞世入道了俊肥後水島ニ在陣ニ而、齡岳様并小貳少

冬資抔招會之節、冬資遲參ニ付、了俊被任催促、齡岳

様より被仰遣趣有之、冬資遂參陣候処、了俊謀計ニ而、

同廿六日、於水嶋陣屋冬資を令賊殺候而、直ニ其跡筑後

國守護職を 齡岳様ニ吹拳仕候向之判物、了俊より同廿八日差上、内心ハ冬資同様陣屋江招會仕候上、可奉討謀計欸ニ御推察被為在候ニ付、被召列候本田二郎氏親・伊地知民部季弘兩人門番共相堅メ、不通候所を関通り、奏者之席迄混与隨身奉守、且門涯迄ハ外之御供必至与相詰候故、了俊手筈茂空打過キ、誠ニ十死一生御危難之虎口、偏ニ御運強ク無難ニ御退去被遊、段々御申分共被残置、直ニ 御帰國御座候処、自其翌永和二辰五月、就氏久心替、了俊今川兵部太輔滿範を差向候趣、同廿五日伊集院大隅入道ニ為遣状ニ相見得、六月二日、滿範球麻人吉城ニ到着、相良近江守前頼等を駈催し、令催氏久對治之軍勢、其比八代・芦北より真幸・庄内・野之三谷邊迄者相良領分ニ候間、同七月、前頼真幸迄出陣有之、三ヶ國御家人等都合六拾三人令一揆、先都城城主北郷讚岐守義久を可攻圍之企有之、同十月廿七日、了俊より大塚左近將(土持榮勝)監江為遣状ニ茂、氏久對治事、御教書被成下候処、面々不奉公無勿躰抔相見得、段々軍衆駈催候間得 齡岳様被聞召上、翌三巳正月、志布志御出馬、同二月廿八日、平長谷ニ御陳被為取、同三月、度々被遂御合戰候、是世ニ

申傳候養原御合戰之事ニ御座候、其頃稅所介茂右之相良前頼ニ致内應候故、曾於郡迄相良勢馳越、(隅州)之煩ニ相成候由、然共 齡岳様御事前文通、其以前正八幡宮之御輿を鷹嶋ニ移御申、若宮八幡と被崇置、且正八幡宮之御本地所、右之正興寺ニ茂仁王等御彫刻御寄進被遊置、旁依有御崇敬、左様之結縁ニ哉、正八幡宮神官等一統 齡岳様を無他事奉信服候故、其前後之事欸、正宮上咲隈ニ三年御在陳之事茂有之候由、左候処、此永和三年本田譜為、此九月、本田氏親・同親治窺敵之隙、不圖押寄姫木城攻落、其後清水城茂攻落、則氏親・親治父子為守護代被差置、其砌より姫木十郎抔降候哉、十二月十一日從 齡岳様為被下御判物ニ、於守護代一所御忠節之段喜入候、委細者以面可申承と有之、同年之事ニ候半、其後 怨翁様御代隅州長尾城茂氏親仕落候由、聖榮・安國寺等茂被書(記)置、彼は大隅國中思召儘ニ被入御手ニ、且 御幼年之砌ニ者、於金隈ニ既ニ御戰死ニ被為究候処、伊地知彈正忠季隨為 御名代遂戰死、其後於水嶋ニ之御危難ニ者氏親・季弘彈正、抔忠節ニ而被為遁、旁幾度茂被為開御嘉運候(事共)、全躰 御信心深く、右様 御眞影抔

御安置之御功德共可奉申哉、左候得者、誠ニ於御當家格別 御祥瑞之御真影、殊ニ者第一久遠之御[○]像ニ而、又共擬刻難仕古物ニ可有御座、前件船津村百姓往古者姫木城主ニ而、本田氏親等守護代被差置時分より其所之地ニ隨身ニ而、右通及零落候故、其頃之御願文茂持傳候半、只今之寺傳と參考仕候得者旁致符合居、格別 御由緒之御真影ニ無疑被存申事御座候、但運慶作と申傳本尊釋迦、脇侍阿難・迦葉茂同作之由、然共運慶者建久中の人と承候へハ、貞治五年、右之 御真影御安置之時者百七拾餘年相後レ候間、此事ハ難信御座候、

右者、國分正興寺仁王堂當分別而及破損居候へ共、當五月、四百五十年忌、[▽]御法事[△]被為在候、

齡岳様并本田親治之真影与寺傳有之由御聞及、左様御由緒之物ニ者甚及荒破、別而御嘆息思召之由ニ而、任御尋太抵愚按如斯御座候、以上、

七月晦日

伊地知小十郎

(以上一本下同シ、尚一本ニノミ收載ノ文書ハ末尾ニ取込)

左

奉再造立二天本願檀那當山三十六世

形山勢和尚

同宿 璋藏主

閻藏主

漆師 小嶋彦七郎

作者 深賢廻重

于時永祿七甲子六月廿三日

右尊鉢旨趣不替、

六月吉日卜有、

助細工大工

太夫貞久

寶曆九^(丁卯)戊卯二月、繕彩色被仰附、

尊鉢之内ニ本文之通書附有之、

西 本田次郎親治

東 氏久公

両仁王共ニ南向キ、

右之通、正興寺仁王縁記ニ相見得候、元祿中之比

ニ而も御座候哉、采色相改候節、縁記相古ひ寫有

之、

(中表紙)

天保七年申九月廿四日草扣

國分正興寺仁王之儀

齡岳様御眞影并本田親治眞像ニ可有之与之愚按追考

伊地知季安

先日書付上置候正興寺仁王者、齡岳様御眞影ニ而可有御坐与之考ニ而、城ヶ谷本田家者親治子孫ニ候間、為念本田吉十郎殿相頼、内ニ探貫候処、嫡流九代因幡守忠親初名親治二郎与為申人之譜ニ、左之通證據書載有之由、

2

自家旧記曰、親春^(治)之代正興寺之三天御作らせ候、左のかたハ、氏久様之御形地也、右のかたハ親春之形地也、御くしの内ニ、くわんもん^(願文)ニこもり候、今にのこりてアリ、又しやうこいん^(悟院)ニ親春の石堂^(塔カ)あり、御當家代々集にくわしく見ゆ、此代之事ハしかくかきのせず、正興寺住持笑翁ヨリ到来候書付寫、山門^{持國天}二天^{多門天}、左者島津氏久公之御尊像、御廟所正統庵ニ有之、右者

本田親治之影像、廟所正悟院有之、曆應元年、

右之引書ニ而、譜茂曆應元年ニ書載、正統庵・正悟院者正興寺塔頭と有之由、然者、齡岳様御眞影計ニ茂無之、御石塔頭茂正興寺内正統庵ニ被成御座筋欵、桂庵和尚島陰雜著欵之末ニ如左見得候茂見覺能合居候、

3

氏久法名玄久、号齡岳、東福即宗庵殿也、於日州大慈寺創即心院、又創財部正壽寺、石塔在正興寺裡正統庵、嘉慶元年丁卯閏五月初四日薨、剛和尚時在東福作文祭之、薨年作明德四年誤也、予讀剛中祭文正之、嘉慶改元丁卯也、六十一歳也、

右通相見得、御逝去年月古御系圖間ニ者明德四年共、或聖榮自記杯ニ者至徳二年五月二日於伊集院御死去、御年六十三と不同書記有之候間、祭文ニ而右様被正置候半、併御年ハ六十と承事候、桂庵者正興寺三十九世ニ而、永正五年八十二才遷化候得者、其頃迄御石塔為有之者有疑問敷、然共慶長四亥九月、文之和尚為作詩之序ニ、其以

前再罹火災、般若經等及灰燼候事共相見得、當分御石塔如何候哉、笑翁年間未考、其時代迄者御廟所有之而社前文通書遣候半、廟堂要覽等ニ者不見覺様御座候、扱前文旧記之趣ニ而、重留船津村百姓致所持候御願文之趣、頓与符合仕、猶以御真影無疑證據欵与奉存候、然共右之本田譜しらへ候時分、又者笑翁住持之頃迄如左明白成御願文船津村百姓持候事共、全為存人無之候半、

右通、御願文決而笑翁等未致拜見、只寺傳迄を以年号等者推量ニ而書付為遣ニ可有御座、本田家者専夫を據ニシテ、親治譜ニ曆應元年と書載候半、甚無稽之至、齡岳様者嘉曆三年戊辰之御誕生ニ而、曆應元年者纔御拾壹被為成候御時ニ相當、如此厚思召立等可被為在御年齡ニ未被為當事、乍恐差知候処、妄僧ニ為被欺共可申欵、何れ御造立者、右之貞治五年十一月ニそ弥無紛明證ニ候半、左候得者、齡岳様其時者御三拾九被為成、旁御相應欵と乍恐奉想像候、右之御願文先按ニ者、御真影

之御躰内ニ被為記置候御銘ニ茂可有之与考置候処、前文通本田家之舊記ニ、御くしの内ニくわんもんニこもり候こと有之ニ而奉考候得者、御頭之内ニ為被籠置御願文ニ相違無御座欵、本田譜ニハ、造立ニ天像持國天、多門天、而安置隅州正興寺、左為禪脫力氏久主尊像、右為キトウ己身影像、以欲鎮護於國家、而賦願文奉納ニ天之鬘也、后追逝去、以ノチ氏久主安于正統庵、以忠親葬于正悟院也 兩院皆正興禪寺塔頭也と有之由、然共惣而頸以上髮之事を尊敬してハ今茂皆御ぐしと申呼、其上天祐様被為書候古書ニ茂、勿ハナ御櫛トと申詞有之候間、決而御真影御頭之内ニ被為籠置候御願文ニ可有御座、前文本田家之舊記者、本田新右衛門親良入道玄賀と申人為書置由、玄賀者十三代因幡守兼親掣竹田若狹守入道秀賀三男ニ而、母姓本田を為名乗もの、由、然者親治曾孫兼親之外孫ニ而、年代茂未遠、古老之槌成聞傳を為記置ニ可有之、左候而御願文之儀者右之御真影御造立方親治ニ被掛置、文言等者住僧ニ茂被為撰候欵、其砌為寫置古本、本田家清水居城之砌共ハ領内家来共代々取始末為仕来文書ニ可有御座、然處船津村百姓家筋之儀、河野六兵衛考之通、上古

姫木郡司之嫡流欵ニ而、旧記ニ茂段々相見得、觀應三年七月廿日畠山修理亮直顯より姫木十郎殿と宛書之執達狀壹通、其外 齡岳様御真影御願文之外、如左所持之由、

5 被參御方〔◎候者〕本領不可有相違之狀、如件、

正平十三年十一月九日 修理亮

御判〔氏久公欵、直顯ニ而者無之哉、難考候〕
姫木又次郎殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二四四号文書ト同一文書ナルベシ〕

6 於守護代一所御忠節之段喜入候、委細者以面可申承候、

返々〔◎通〕悦存候、恐々謹言、

十二月十一日 氏久御判

姫木十郎殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二三八二号文書ト同一文書ナルベシ〕

右御判物者、永和三年九月頃本田氏親姫木城等攻落、直ニ氏親・親治為守護代被差置候時分、姫木十郎茂降參仕、守護代一所之内ニ罷在、忠節可仕旨茂哉申上為被下 御判物欵、其後親治嫡子信濃守元親無子、五弟重恒受家督、

号信濃守、姫木・清水より横川長尾城邊迄七百町計傳領仕、誇權威、挾不忠候ニ付、文安元年、〔忠國〕大岳様御出馬

ニ而御攻伐被遊、重恒者如曾於郡立退候間、彼跡七百町悉被召上、御夫人様御舍弟新納四郎三郎忠匡を清水ニ

被召移、姫木之内三拾町者御舍弟嶋津出羽守有久ニ被下、

重恒兄小城親光嫡子因幡守國親に本田家督被仰付、皆如

鹿兒嶋被召列候処、四郎三郎無間茂清水城被差上三付、

同三年、國親江者曾小川三拾町被下候而、清水ニ被召帰、

其餘者皆御料所とシテ御一家御内ニ御配分有之、先史助

右衛門重英伊地知左右衛門先祖姫木ニ罷居、過分領地被

下置候旨被書置候茂、私先祖事ニ而、此時之拜領与被相

考、姫木家ニ瀬戸口名為被下茂同時ニ候半、瀬戸口伊豆

守秀安入道日記ニ如左、

7 豊州の御内に瀬戸口源兵衛尉大中臣秀勝と云者あり云

々、さて又秀勝か先祖を委敷尋に、かミ大すミの住人

に姫木と申何がしなり、〔守公〕しくう神をつかさとり、國下

を守るとかや、扱いにしえより今迄もこくしかたげと

申て、姫木城のはつれにそへてたけの有けるハ、其時〔鎌力〕

よりの事ぞかし、今瀬戸口と申者、忠國の御時瀬戸口
名を給りて、其より申ならハしたり、扱其後に瀬戸口
のおびへまいりし事共ハ、豊州之御先祖に忠幸と申が
飢肥へ入部の御時、御供申せし瀬戸口なり云々、

右様相見得、秀安者直ニ秀勝二男ニ而、享祿二年ニ為生
者候、しくう神と者、當分國分府中村守君神社ニ而、今
以栗野郷士姫木源左衛門家より社司勤来と欵承事候、尤
清水河原村ニ于今瀬戸口と云地名残居候由、調所氏古文
書ニ者大隅桑東郷之内ニ世戸口名十三町と有之、其時代
耆町者三千六百坪之時ニ候、只今町段より手廣ク、中田
并シ耆町三拾五石ニシテ、今之高四百五拾五石ニ相當、
惣而領知仕、家号茂瀬戸口と改候半、然處長祿二年、豊
州忠廉帖佐より隅州東郷城被攻取候、文明六年頃ハ溝邊・
横川等迄忠廉領ニ而、同十五年、曾於郡茂被襲取候、同
十六年三月、上井城茂被攻取、國親子因幡守兼親さへ五
ヶ年計者忠廉ニ為隨由候得者、瀬戸口茂決而豊州家ニ致
隨身居、同十八年、忠廉帖佐より飢肥へ被移候時分、瀬
戸口源兵衛先祖者付移候半、忠幸と書候茂可為忠廉之事

候、當分志布志郷士瀬戸口民右衛門此跡と承候、當分清
水郷士瀬戸口傳左衛門家者其後茂為残居と見得、永正十
四年三月十一日、(忠應)興岳様御家老伊地知周防介重貞・桑
波田讚岐守景元・伊地知縫殿助重周・本田因幡守兼親よ
り瀬戸口又四郎殿と為宛給坪付ニ者大隅國瀬戸口名云々、
以上七反と有之、觀應三年七月廿日、島山直顯より姫木
五郎四郎殿と宛候執達状、正文在清水瀬戸口彈兵衛と書
候物も有之、五郎四郎ハ又四郎先祖欵ニ而、今之傳左衛
門者彈兵衛子孫ニ茂候欵、又四郎後に美作守秀辰と改名
為仕ニ者無之哉、又四郎迄者昵近(昵)と見得候得共、世戸口
美作守秀辰者本田紀伊守董親ニ致隨身居、天文十五年、
美作守上洛便ニ、六月五日、董親より日野資將江被差上
候披露状ニ、抑愚領之者伊勢・高野へ巡禮參存立候条云
々相見得、同八月十五日、近衛様ニ參殿、御短冊式枚
拜領仕候由ニ而、于今子孫瀬戸口傳左衛門持居候由、船
津村百姓先祖茂瀬戸口為名乗者所見無御座候得共、右之
美作抔同様本田氏家来ニ為成居事ハ有相違間敷、夫故本
田家ニ代々可被傳古文書等、右御願文之外ニ茂段々如
左持傳居候由、

守護代吉書

- 一可興行神社佛寺事、
- 一可專勸農事、
- 一可修□事、
- 一可執行大犯三ヶ條事、
- 一可入部所々所領事、
- 一可入部所々所領事、

長祿二年正月四日

藤原國親

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」三六六号文書ト同一文書ナルベシ)

改年吉兆玆重(幸甚)、猶以不可有際限候、抑来十五日

埃飯之事、任恒例令勸仕候、肴少々預御助成候者目出

候、恐々謹言、

正月四日

藤原國親

謹上 穰所介殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」三六七号文書ト同一文書ナルベシ)

右通相見得、埃飯之儀、元日ハ伊地知、七日ハ平田ニ而

古キ御次第書ニも十五日清水埃飯之事と有之、其より天

正古日記等皆同断ニ而、久敷為恒例者無紛候、右外正月

廿日新納近江守忠勝より謹上本田因幡守殿、六月八日忠

勝家老隈江伊勢守匡久より同人名宛、卯月廿四日匡久よ

り本田參河守殿、九月七日匡久より本田刑部少輔殿扨為

宛參状共段々持傳居、前文ニ茂申置通、國親者親治二男

親光嫡子ニ而本田家督被仰付、其子因幡守兼親、其子三

河守親安二男刑部少輔親貞、此等之名宛ニ為參文書于今

船津村百姓持居候事、代々本田家右筆欵役人ニ而茂為仕

居末孫ニ有紛間敷、夫故親治代正興寺仁王御造立方掛ニ

而為被寫置 御願文茂取束、彼家ニ持傳候半、右次第二

付、本田家之舊記茂兼親外孫本田玄賀其頃之咄を書記置、

至今更而者寄合衆と百姓、誠ニ懸隔成持主ニ相成居候得

共、引合候得者頗与致符合、無疑事之様被考申候、親安

子紀伊守董親代天文十七年十月、清水落城以後、清水・

姫木・上井等者右馬頭忠将様御領ニ相成、彼方ニ茂隨身

候欵、文祿年中(義人) 龍伯様富隈ニ被為移候時分ハ、姫木又

次郎与申者御奉公仕候由、其時代御家老抱節入道(伊集院久也)の嫡子

伊集院半右衛門久元妻者右之又次郎娘ニ候由、男子姫木

權右衛門迄者於姫木出生仕、後之右馬頭殿嫡孫嶋津相模(高津以久)

久恒
殿ニ被召附、於

(別紙)

「鹿屋致病死、其子姫木新左衛門ハ相模殿ニ男大和殿江(鳥津八重)

奉公仕、後致暇國分宮内ニ罷在候処、寛永十二支年、

初而一統手札被仰付砌、國分地頭喜入吉兵衛家来ニ而

申受、自其又高崎伊豆守方へ主人相替帖佐ニ罷移、其

子姫木軍右衛門代寛文四辰八月、帖佐船津村假屋門之

百姓ニ罷成、延宝八申十二月・天和二戌三月・貞享元

子九月及再三家傳之系圖・文書等ニ、右半右衛門曾孫

伊集院半兵衛久孟前文通親類ニ而、證文等相添帖佐衆

中ニ被召成被下度趣、地頭鎌田出雲殿ニ為願出由候得(正長)

共、御月番御家老新納(久)又左衛門殿より、餘り及零落、

主人茂段ニ相替、其上百姓買入ニ迄為相成者故、願書

等者御帳留被載置、御取揚無之、同十七日、大山主馬

御取次を以 御判物・系圖等被相下ケ候趣、段ニ書留

于今所持仕居候由、其節 齡岳様御願文寫茂相添差出

候哉、其段者分明不相知、其後元禄七戌年、諸家系圖

再撰御用茂有之、同十丑年ニ者御記録奉行肥後仁右衛

門盛香筆者三宅左兵衛召列、右式為改方帖佐方へ廻勤

茂有之、左様之節ニ軍右衛門より茂差出為申筈、前文

觀應三年島山直顯より姫木十郎殿と宛候古文書肩書等、

正文在帖佐村船津村百姓軍右衛門与見得候本茂有之、

彼是古文書為差出事ハ有紛間敷、然共右之 御願文弥

差出候儀者、私式何共難探付、乍然只今

乍然只今迄空敷埋居候ニ付而者、過分之文書ニ而軍右衛

門差出洩為申筋ニ茂可有御座、現在古写山々直ニ借入見

届置度物与存候、船津村其後元文四年九月、壯(鳥津忠紀)之助殿越

前家御相續ニ而、重富一所ニ御拜領之節被召附候由、右

百姓跡段ニ古文書持傳居候事ハ、先年以来諸家大概ニ而

見覺、前文通私先祖代姫木ニ領地被下置、瀬戸口杯同例

在名松元を名乗候事共ニ付、考相成古文書等脇方より寫

置旁為考、去ル文政十三寅閏三月、從兄本田村右衛門郡

奉行ニ而帖佐江詰居候節、無據頼道、右百姓之子孫當仲

太郎方より寫取貰置、自其最早七ヶ年相成、殊更當年者

齡岳様四百五拾年御回忌被為當候折柄、貴兄湯治先より

不圖御參詣為被成由ニ而、鳥渡任御尋、先按一小冊、入

御覽置通候処、何分ニ茂世上流布之廟堂要覽等ニ不見當

說ニ而、何欵新奇之妄說等好而書立様被思召方茂有之間

敷共難申、誠以私式不似合考与跡更存付、至極恐惶仕儀
(殊力)
 二御坐候故、為念内々吉十郎殿相頼、親治子孫探實候処、
 前文之成行ニ而、私共愚按ニ者弥無疑事之様被相考申候
 間、猶又細々愚存之程書しらへ、決而淺陋誤等者乍案中、
 入御覽置申候、扱右類之事、其時代ニ者為有之与見得、
 應永八年、右之親治忠親と申時分、新納實久と於志布志
 致合戰候節、野邊薩广九郎が從兵熊田原兄弟、兄八拾九
 歳、弟八拾六歳ニ而遂戰死候、形像左右ニ彫刻仕、宝満
 寺仁王ニ致安置候事、聖榮自記等ニ有之、且仁王杯像中
 ニ志願之趣書籠置例茂、庄内梅北西生寺之仁王木像ニ而
 先年朽崩候節、鉢内より五寸方計之小板出、仁安(ママ)三丁亥
 三月二日庚子ニ伴朝臣兼高造立為仕置趣之願文有之候由、
 當年迄六百七拾年相成候事露顯為仕例茂有之候、且又始
 良八幡之神体古鏡ニ而、裏之凹処ニ圓板押込有之、近頃
 見為申人之咄承候処、長久四年平判官と書、花押迄御座
 候由、是ハ嶋津御庄開發為仕平大監季基弟平判官良宗、
 始良御開發領主と古系圖ニ有之人之事ニ致符合、當年迄
 七百九拾三年相成板ニ候得共、明白ニ相知居候由、又阿
 多新山村大日像及破損、享保十二未七月修覆之節、右像

之頭中ニ、永祿十卯三月、日新公(忠忠) 伯園公(實心) 杯御造立為
 被遊趣之書記御坐候由、其外如此類ハ多々有之事候間、
 旁以左様之御願文写ニ茂可有御座与恐察被仕候次第ニ御
 坐候、如御存私實父者本田孫九郎親之弟ニ而、當分伊地
 知之元祖者 嶺岳様御身代り戰死為仕伊地知彈正忠孫ニ
 而、今川了俊と御會陣之節、本田氏親と同様、必死ニ相
 勤候伊地知民部少三男ニ御座候処、御遠忌之當年、親
 治末裔之輩と如此不似合事迄、鳥渡打立探考候事共、乍
 恐自然之 御舊縁共可奉申哉、誠ニ憚至極乍奉存、旁以
 感動不淺次第御座候、如此不入因念咄迄及長久、當時ハ
 此中と違御隙茂無之筈候得共、御閑寂之節、又是茂篤与
 御笑覽可被下候、以上、

申

九月廿六日

和田秋実雅兄

伊地知(季安) 小十郎

天保八年丁酉二月吉日

正興寺二天

齡岳様御真影御回録(録)一件私考

去秋、正興寺二天 齡岳様御真影ニ可有御坐与之考

書、前後式冊書綴懸御目候処、御糺方ニ迄被為及

候由、誠以恐入次第、然者右之御真影者最早被為

逢火難、當分御真影者永録(録)中御再建之二天ニ而、

正統庵・正悟院者當分寺地之跡さへ何方共不相知、

夫故御石塔被為在候場所等不被為知哉ニ風聞傳承、

弥其通欵も雲之上難計、私式重疊乍恐別而遺憾ニ奉

存、猶又其後諸舊記借入方手當仕置候処、本田玄賀

書置檢断之注文与申古書近頃一覽仕、則貴久公御

軍記・樺山玄佐自記・新納忠勝等願文・南浦文集等

ニ考合せ、右火難之次第并脇寺等太抵之方角、地理

地名茂廳(取力)与不存候而、甚不束成考ニ御座候得共、左

ニ申上候、

一勝久公大乱之砌、宮内社家ニ者留守氏・桑幡氏・最勝

寺氏・崎田氏・調所氏抔社領知行ニ而振威勢罷在、清

水ニ者本田因幡守兼親、其子三河守親安并其孫紀伊守

董親居城仕、姫木へ者兼親ニ男刑部少輔親貞入道一恕

等取構、社領と争兵威、終及義絶候処、本田方江者志

布志城主新納近江守忠勝・真幸城主北原民部少輔久兼

等連和仕候ニ付、社徒者惣而人民迄茂正宮之寶前ニ号

御壇楯籠居候を、本田・新納之軍勢度々攻寄候砌、大

永七年丁亥霜月廿八日、壇処之民家より火起、魔風吹

立、社頭ハ不及申、神社等不殘忽一時ニ焼失仕、社家

留守氏等皆逃去、桑幡氏者豊州忠朝領櫛間之様、最勝

寺氏と調所氏者勝久公御城下麁鳴之様、崎田氏者伊

東義祐領如山東逐落候而、留守氏跡之社役ハ本田領清

水より、調所跡之神役者姫木之本田一恕より相勤、宮

内一圓本田領ニ相成、咲隈城ニ者財部淡路守抔地頭と

シテ差置、式拾餘年者留守氏抔宮内ニ足踏茂不得仕事

御座候由、右兵火之次第を本田玄賀書置候者、兼親之

代こたんと清水きせつ之時、社等ニ天火出来りて焼く

つれ候、其之火のほのめくかとおもへハ、正興寺・高

寺にもとひうつり、又たななにもうつり、一時にや
 きくつれ候と有之、其後右馬頭忠將様御領相成、永祿
 三年十月十五日、清水衆加世田織部助与申者、用原某
 盜仕候をつれきたし、下寺之二天のまへにて相計候云
 々之件茂有之、勿論去秋本田譜より寫載置候、自家旧
 記曰、親春之代正興寺之二天御作らせ候、左のかたハ
 氏久様之御形地也、右のかたハ親春の形地なり、御く
 し之内(願文)にくハんもん(悟院)にこもり候、今にのこりてアリ、
 又しやうこいん(塔カ)に親春の石堂アリと御座候事茂、此度
 正本見届候へハ、即此玄賀書置本田家之檢断注文一軸
 之内ニ而、口之方ニ相見得居、彼是考合せ申候得者、
 下寺之二天と御坐候茂即正興寺之二天之事ニ相當り、堺
 内餘程廣大ニ被相考、脇寺等者段々地形高ミ之方ニ有
 之、俗ニ高寺と相唱、正興寺二天之邊を下之寺と唱來
 候筋共ニ者無御座哉、夫故兵火之節正興寺・高寺ニ茂
 飛移と書置、或ハ下寺之二天共書置有之歟、左候而、
 其高寺之内ニ者上之坊神之・尾崎坊・岩井坊・東善坊・
 満豊坊など多く坊主共罷居候向ニ、別事之件ニ散見仕
 居、且正統庵茂忠將様御領之時分より、鑑司抔為罷在

事茂相見得、慶長年間、文之和尚正興寺住持之頃迄ハ
 寺々大形残居候歟、寫本之南浦文集、慶長十三申二月
 中旬、行至高寺(到カ)門外見花賦詩と申題之詩ニ、尾崎門外
 花飛日 高寺云々、或ハ行至上坊坊主招、或ハ尾崎坊
 主始相逢など、景色宜躰ニ相見得、同十五戌四月諫筭
 藏主書ニ、正興古刹正統禪庵之側ニ有玄筭上人者云々
 有之、則此高寺之尾崎坊・上之坊抔申内之坊主共ニ者
 無之哉、弥其向ニ茂御座候ハ、正統庵茂高寺之内ニ
 為建居筋ニ者無御座哉、同十三申三月十七日、於下之
 寺賦杜鵑花と申詩茂有之、左候而、正悟院者村中ニ有
 之歟、同廿年、大龍寺より宮内ニ被參候頃之詩ニ、在
 正悟村庵賦即興と云題ニ而、古寺歸來莫一求 野蔬手
 自摘新柔 我無高客訪矮屋 唯見農夫日飲牛と被作候
 趣、旁農夫村近之庵と被相察候間、去秋本田譜之注ニ
 而申上置正統庵・正悟院者正興寺塔頭と御座候事、太
 抵石様之方角ニ為有之共ニ者無御座哉、別而無覺東考
 ニ者御座候得共、萬々一右位之事ニ而茂、 御石塔在
 所御探索之御手掛等可被為成事茂難計、先日一寸御瞻
 も候儘、先如此御坐候、

一慶長四亥九月、正興寺雲叔和尚大般若經六百卷被為寄

附候事を文之和尚被書置候者、先是不幸而再罹火災、

般若亦灰燼矣と相見得、而度火難之今一度者追而可考、

齡岳様二天御真影之儀者、貞治五年午霜月被為建置候

而より百六拾貳年目、親治曾孫本田兼親代右之兵乱ニ、

大永七年丁亥霜月廿八日御燒失為被遊事、大形の證欵、

其より貳拾貳年目ニ、兼親孫紀伊守董親代天文十七年

九月九日、清水落城ニ而如庄内落去、則 日新様より

社家共者某々如本被召返、社領等御返進為被遊事、玄

佐自記等ニ相見得、新納忠勝・北原久兼等茂皆無程被

及衰微候、何れ茂驕奢之欲念ニくらミ、天子之御廟

を茂為相攻神罪計ニ茂無之、第一 御當家御敵對之不

忠、次ニ董親等も曾祖親治之忠節ニ不似合所行、旁不

忠不孝之募、難遁天罪共可申欵、存外之兵火故被為及

御燒失候事、今更茂遺憾至極ニ奉存事御座候、以上、

二月

伊地知小十郎

※「右之通、粗和田秋實ニ咄候処、必書付遺候やう度ニ承

候間書綴遺草稿ニ而候、即最前年寄之書役衆へ為被遣

由也、何分ニ茂正興寺より地形高キ邊ニ寺跡等之山共

有之ニハ無之哉、其方ニ 御石塔埋居候筋も難計、下

之寺ニハ無覺束、高寺之方可成相探見度事と存事候、

尤所中ニも寺社方ニも、右之寺何方ニ為有之茂跡さへ

不知よし承及、如此也、

季安

※(行間)

「大永七亥霜月廿八日 御燒失ニ而、于後永祿七子六月廿三日

御再造之棟札跡之物ニ、右尊跡旨趣不替と御坐候由、然者大

永ニ御燒被遊候得共、初發貞治五年午十一月御造替之尊跡ニ

茂旨趣茂不替と申事候哉、此処糺度事也」

「此一冊者不遺扣置なり」

11「樺山玄佐自記抄」

○新納殿、本田・北原以同前、正宮社家被成御弓筋、

生別府・加治木境をも不成ニ不通、新納殿本田へ内心

を通之刻、大永六年霜月廿八日、宮内御社頭天火にや

不殘燒失す、從ニ其砌ニ數外、新納殿・本田・北原、肝

付越前守以同前、加治木江儀絶す、

12 「貴久公御軍記ノ抄」

○此紀伊守者、去大永七年丁亥背先君命、清水楯籠作ナシ

御敵、于時八幡宮衆徒・所司・神官等、各構御寶前、

号御檀コトノ、國中之人民同籠居、親安・董親忠勝本田・新納江州衆引卒

攻來事及度々、佛在灵山時、第六天魔王引無數之

夜叉・羅刹來作佛敵、至三和光垂跡今更如此也、

有時從ツ小家火起、魔風忽吹、神社一時燒失、其後本

田宮中一分領、徒勞人民造作己私宅畢、於正宮

中曾不レ動興隆、似嘉祐之破寺、偶有一字、覺之夢落霧

燒不斷香、扉破月挑常住燈、當太守竊聞此由給

命勸進沙門、被修補神前四足堂云々、

13 「新納近江守忠勝願文ノ抄」

▽◎「字欠欵」慎敬白△

正八幡宮依炎上、藤原朝臣忠勝奉寄進鵝眼一萬疋

其願文曰、

夫以神者依人之敬增威云々、去大永三年癸未、不圖兵

革懿起、然則守護方當方既速義絶、然處敵方卒猛兵、

此家欲為對治於愚領梶野之条、家來之士卒少々懸合、

相當之禦矢射処仁、守護方運命聊傾乎、打死虜數百人、

得忽軍利之勇於戰場、播既名譽之勢於萬方、從來來諸

篇任心、衆人開悅眉事、是併冥見加被之瑞、家運倍增

之瑞、然處迄于大永七年丁亥十一月廿八日、正八幡宮

之炎上觸傳聞處、即驚愕仰天、嗚呼言語道断以外之火

災矣、所詮社家籌策之先札、弓箭長支者、足輕以下亂

入壇所、神殿出火欵、然者至其時者、為社家非被崩賣

殿乎、文章揭焉也、退情思之、神職神官之身而、義兵

為宗、鉾楯為業、計知、是背神慮欵云々、然處被官群

兵等社家亂入、終日鬪戰之時、聲震大地、兵火之煙雲

覆半天、雖然社頭堅固無橫災之条、萬吉云々幸甚云々

而已、掛處經數日、從壇処之民屋起猛火、鋒焰遷玉殿

利那破滅之成灰燼、言表意外之災彙、以凡慮難測、以

愚言難述云々、

大永七年丁亥十二月二日 藤原朝臣忠勝判

(本文書ハ旧記雜錄前編二二二一〇・二二二一號文書ト同一文書ナルベシ)

※(頭注)

「氏久公御眞影モ此時ノ御燒失ナラン、左アレハ、貞治五年御造替ト云ヨリ百六十二年目、モト御建候月ノ霜月ニ、親治力

會孫兼親代ニ社家ヲ攻ル時御燒失ト見ユ、神罪ノミナラス、君ニモ先祖ニモ罪アレハ、其ヨリ二十二年目ニハ清水落城也」

14

去大永七年丁亥、依隅州亂劇、本田方為與力於社家遂合戦、御神敵罷成、依其咎、新納之家風如此候云々、分限罷成候ハ、應田數御供米可致進獻也、仍願文如件、

天文十一年壬寅十二月十五日 藤原安千代丸

(新納忠光)

15

「本田家檢断注文玄賀書之トアル一軸ノ抄」

「本田因幡守」御壇「兼親居城」頭「頭」

一兼親之代「こたんと清水きぜつ之時、社等ニ天火出来りて焼くつれ候ハハ、留守殿ハ逃失候て、廿五六ねん

「貴久公記ニ号御壇國人籠居トアル、是也」

「玄佐記ニ本田宮中ヲ一分ニ領トアル、是也」退轉「天

も宮内ニあしを入なく候、勝久様の御たいてんの以

後、あまりくわび候間、ミやうゆうの内をほんく

分五町五反被進直し被申候、此度本田殿落城の弓矢に、

日名「檢校カ」「講免カ」「房」社家領

ミやう十二町、けこうのかうめ十町、木のふさ八三町、

如前々在々所々被成御返進ト玄佐自記ニアリ、此也」

曾於郡之内にて候へ共、こ、もかしこも關所仕候て、

「汲」水をくませ候する人そくなく候、弓矢道行候ハ、返

田ニ申由被仰候へ共、今まで覚悟候ハし、さ候に火の

「燧」ほのめくかとおもへハ、正興寺・高寺にもとひうつり、

又たななどにもうつり、一時にやきくつれ候、桑幡の

政所殿ハくしまのごとく、最勝寺殿ハかこしまのごと

く、崎田殿ハ山東のごとく被逃候、種々わひ事にて被

直候、

「大永六年、大翁公伊作ヨリ伊集院ニ至リ玉ヘル時、十一月

四日、御頼人之事有之ニ付、此因幡守兼親へ曾於郡被下、其

子三河守親安と父子無二之御奉公有之候事、玄佐自記ト文書

も合也、左アリテ、同七日、公鹿尾島ニ御帰候也、兼親寛

正三年生レニテ、大永六年ハ六十五ニテ、此社家トノ戦ハ大

一留守殿「退轉」たいてんの時ハ、社役等ハ清水「本田董親方ヨリト云フ」よりさせられ候、

（本箇条迄ハ旧記雜録前編二三二二号文書ト同文ナリ）

右之事ニ付考相成事共此一巻之口へ見得候内より、

左之通書拔置、

一兼親之代、高寺之「満豊坊カ」満太坊之内に椎原又七といふ者、下

かりやに中嶋帯刀と云者、兩人にて野上坂のうへにて

やまたち仕候を、満豊坊のきやくてんのつまに罷居候

をはからひ、檢断つかまつり候、

※1 一「右馬頭忠將」典厩之御代、正統庵の代々の買地を、窪の町の正春と

云僧のよこさまにかくこ被申、其内に内山田とて水田

二反有、是をにしとの本文書ハうせ候間、社家の法に

て候間、中分にうけ可申由堅被申候へ共、ぼう書をと

りいたし、伊集院大炊助をうしろミにてさま／＼被申

候間、ぼう書かまことになりて、たう錢三十三貫に被

請候、於以後も本文書ハうせたりといふとも、典厩之

御代、正春僧伊集院大炊助の申なしにて、ぼう書か用

に立候、彼正春ハ一説は正東庵之かんすもち候物にて

候、

※1（行間）

「天文十七年九月九日、本田董親没落以後、日新公清水ニ被

成御座、伊集院大和守忠朗地頭ニテ姫木ヲ下サレ、程ナク大

和守ハ鹿兒府ニ歸リ、其子掃部（ママ） 姫木ニ居レハ、清水ハ

右馬頭殿ニ賜ヒテ申木野ヨリ御移トアレハ、其ヨリ永祿四年

七月十二日、廻ノ馬立陣ニテ御戦死迄十余年ノ間ヨリ典厩ノ御

代ト申スナラン、併二代右馬頭以久迄モ清水・上井・下井・

新城・姫木・福山ヲモ領知ナレハ、久シキコトナラン、

一典厩之御代、濱市の金瀧院より児を宮内之高寺にしや

うよう候て返し候處を、神之坊ノ同宿、尾崎坊の同宿

應カ「招」兩人らちの場々にて行合候て、かミをミしかくきり候、

其時はまよりをしのほり、高寺にしやうようせられし

かたに談合候、同宿ハいつれも迹失候間、尾崎の坊主

に生涯させ候、神カミの坊にもおしよせ候へ共、番衆多々

御座候間無何事候、岩井坊さしいて候て口わるせられ

候を、高寺衆・濱衆寄合候て生涯させ申候、岩井坊も

尾崎の坊も役人をくたし、此方より知行仕候、のちの

坊主も此方より定申候、

※2（頭注）

「此高寺ノ内ニテ上之坊・尾崎坊・岩井坊・東善坊・満豊坊な
ど云ヘル坊アリシト想ハル、慶長十三年ノ比文之詩ニモア

り

「忠將」「永禄三年ナルヘシ」
一典厩之御代十月十五日に、清水衆加世田織部助と云人

西時はかり用原名字の物盜仕候をつれくたし、「高寺ヨリナラン」「正興寺ノ下寺之」
コトナラン「文之詞」

※3

二天之二てんのまへにて相計候、社家衆被聞付候て、
其日の神事を相留「御供もうつめ申候すると被申候て、」
下之寺トアルモ此乎「御力」「鎌力」「鎌力」

社家より被申候様にくわ・かま・かぎなどいたし候て

うつめさせられ候、をかしき事に□御きよめの事ハ、

織部助殿まへにも候するや、御供をうつめ候する事ハ、

澤殿御供所の神人のまへにこそ候すれ、是よりかす「一數」

くつかハし候てうつめさせられ候ハくせ事に候、い

かほとも政留候事ハ度とおほく候へ共、うつめ候事ハ

めつらしく候、かやうに此方をてうふくせられ候ゆへ「調伏」

か、次の年、典厩様も町田殿も、其外めくりうたれ給「水禄四年七月十二日」「加賀守軍四郎」

ぬ澤殿も、舍弟・こじうと・内かたあまたはてられ候、
為後日書置候、「忠將君」

為後日書置候、

※3

一親春之代、正興寺之二天御作らせ候、左のかたハ 氏久様

之御形地也、右のかたハ親春の形地なり、御くし之内にく

はんもんにこもり候今にのこりてアリ、又しやうこいんに

「此二天ト考合せ、且正興寺・高寺迄モ火飛移ト云ニテ有レハ、下ノ寺ハ即正
親春の石堂アリ、
興寺ナラン、左アレハ正統庵ハ高寺ノ中カ」

「忠將」
一典厩之御代、高寺之東善坊人之女を内々ぬすミ候があ

らハれ候て、われハちくくてん候、女ハとり上候、
「逐電」

16 南浦文集寫本

諫突藏主書

正興古刹、正統禅庵之側有「何レノ房ニモ居ル坊主ニヤ」
入「是ニテミレハ、此頃迄ハ正統庵モ在タトミユ」我正興古刹庫司、食「食ニ諸僧之餘」以與「小僕」争

其席云々、突兄若銘之於肝改之可也、慶長十五

年庚戌四月、既望雲興散人滌於筆正興方丈、
「此前三戊申正月ノ詩アレハ、慶長十三年ナルヘシ」

二月中旬、行至高寺門外見花賦詩、

驢背驅「春不着鞭」賦「詩到處即留連」

尾崎門外花飛日「高ノ字落カ」賦「詩到處即留連」

浮世任「任モテラハシ」從塵事忙 枯藜緩歩樂洋々

眼前何處不「詩景」 景勝二大津櫻馬場「※」

行到二上坊二坊主招 映筵色々酒肴調

元呼二悪客亦無念 強効老坡揚二蕉

二月中旬偶伴二第 尾崎坊主始相逢

雜談格古興無盡 閑坐聽之到日春

※(行間)

「又別ニ遊大津橋邊、見花ノ題ニテ、白櫻樹下雪霏々、吟岸島中心欲飛、一醉任從日之夕、橋邊歩、月詠而帰ナトアレハ、時ノ絶勝ニヤ」

在正悟村庵賦即興、

古寺歸來莫一求 野蔬手自摘新菜

后 我無高客訪矮屋 唯見農夫日飲牛
ト云ニテミレハ、高キ寺トハ思ハレス
「村庵ト云ヒ、日ニ飲レ牛ニ

偶過宮内見居民鮮少漫綴一絶、

憶昔千家富且榮 祇今纔有數塵埃

「此詩ニテ、本田氏ノ社家ヲ滅サル以前ハ繁華ナリシト見ユ」

前 不唯村落無文点 至曉未聞雞犬聲

「右二首ノ上下ニ慶長乙卯五月ト七月アレハ、元和元年ナルヘシ」

「再罹火災トアレハ、大水七年霜月廿八日計ニモ無之ト見ユ」

夫大般若波羅蜜經者云々、隅州有寺、名正興、其位属簷下之列刹、山名靈鷲云々、先是、不幸而再罹火災、般若亦灰燼矣、是可忍也、是歲慶長己亥之秋九月、住山雲叔禪師喜捨資財、以求六百卷之聖教寄附于靈山云々、

賦正悟院紅桃、

寺前景自雨晴加 一簇桃開紅似霞

「上下ノ作己酉ノコトナレハ、慶長十四年ナルヘシ」

王母三千豈無恨 徒食結子不言花

想像正興寺前佳勝以裁、

「戊午三月十日鹿府ニテノ作也、元和四年ナルヘシ」

遐邇幾人來解鞍 迎門喜色上眉端

山櫻吹雪春將暮 老壯眼寒肌不寒

「戊申ノ作前ニアレハ慶長十三年ナラン」

詩杖相撐釋梵中 杜鵑花發一叢濃

吟來欲向東風問 誰深重英与作嫩紅

(一)本表紙

三番箱 伊進上

國分正興寺仁王
齡岳様御真影一件愚考

(一 本中表紙)

藤野休右衛門殿文書之内難被讀付の有之、承趣御座候而
如此書写、愚按朱書して遣申候、御一覽御吟味被為濟候
上、御返可被下候、以上、

(伊集院)
兼誼先生

(伊地知)
季安

永和元年八月今川了俊肥後國菊地水島江 氏久公 伊
久公杯御參會之節、從 師久公 伊久公江被進候御教
訓之御狀一通、口欠

伊地知季安按

(二 本中表紙裏書、朱書カ)

「七月四日、肥後守武光ヨリ謹上嶋津判官入道殿トアル

状、

八月十日、了俊判ニ嶋津越後守殿ヘト云状、

やく人いてたちのちうもん

右三通も永和元年之ものと愚按アリ、此月日の通

御まき被置候て可然欵、乍 此 書付申候、

以上、

17 「口ナシ」
「宰府越前殿御方へ音信あるべく候、使者ハ久富たるべ
明徳四年六月十一日元久公ヨリ志和氏ニ遣サレシ御状ニ酒匂新左エ門入
道令進トアリ、此人ナルヘシ」

一兵衛佐對面事、種玄申ハルカに「つ」けらるべく候哉、是にて
も中務入とに談合候て可被計候、

「肥後守武光ナラン」並掛ナトナラン」

「菊地若犬追物其外の弓矢の事物射候様なんど尋申候ハ、

親ニテ候 「師久公ヲ指玉ナラン」 伊久ヲ云ナラ
おやにて候者ハすこし物をも仕候へども、我ら事等口ハ、

不断 断 古無為仕事度候
ふたん合戦候間、けいこ仕たる事もなく候、お太「う」

方 不為候由
かた存知せず候よし仰らるべし、かやうに被仰候者、

奥 床敷
おくゆかしく候べし候、物の一も申おさしニて候、

又 不被知候而者
また尋候時、別事どもしられ候「す」候ては、はぢたる

べく候哉、

一今ハ御へし者在之存とも、若犬追物被射候へなんど申

候ハ、かたくしたい候へく候、手負候て後ハ、更

く能弓をよくも引立す候よし可被仰候、

「氏久公ヲ云玉ナラン、伊久ノ御叔父也」

一越後殿と若寄合候ハ、さか月の事、始度ハつよくし

宜退 此方取
きたい候ハ候、其後ハ酒月こなたにとらるべし、

式 淋

代とす少しも替り目を候、常ノ人三益ノテ云ヘルナラン、
 太方ハこしもますくて候、
強ク禮ヲ被為候、
 へハ、つよくれいをせられ候する事しやうきたるべく
也、
「東郷氏九代薩守重明幼字欣」
被醉事及候ハ、

一若菊地と寄合候時、車内八郎殿よハる、事も候ハ、

床敷に候とも、ニ候共太方のしきたいハ候へし、是にてのご
云ヘルナラン、
強クとくつよくハ候ましく候、やとに人も候ハで寄合れて

候時ハ、これにかハリめ候ましく候、太方にてハ心得
候、
「御国ニテ」

一被上候ずる路にてあハひよく候とも、按排追出犬いられ候
共、
近ましく候、まして人の家ちかく候所にて、犬などい
「」れ候ましく候、

肥後水島ナラン、
「筑前」博多、
「家来ノコト」、
「御国ヲ云」、
此等ニテ、
如ク、

殿原とうへしたもなくうたひ「」めき、くるハる、
被狂、
「又カ」被忍候間敷候間、
御酒へ

事候ましく候、かへこられ候ましく候あいた、御酒へ
不断、
被思候テ、
身ヲ直ク可被為候也、
 ふたん人も見候とおもハれ候て、身を直せらるへく候

候、
「漢谷五家ノ一世」
 一高城小太郎、若對面し候ハんと申候ハ、於國おやに
不快ノ事ニテ候間、
 て候者と御ふくわいの事にて候間、入見參候事、所存
ニ懸り候由、
 に御か、り候よし可被仰候、
「是モ高城氏ヨリノ使來ル時ノコトナラン」
「使カ」定メテソレ、
 一御つかい定可來候、其時者もてなされ候て、よくく
能、
「領カ」
 あいしら（ハ）れ候て、御本預入部候時者。承候、雖不
候、
 甲斐候可合力申候、若御下も候ハ、同道可仕候、於國
 子細候ましく候よし、よくく物語候へし、
「伊久ノ御宿ナラン」
 一若菊地宿へも來候ハ、庭ニ出合れ候べし、立候する
ナラン、
「吐カ、剣ノコトカ」
 時も庭まで可被出候、下ハ咄候へども、小桜のよらい
「引出物ノコト也」
被引候、
ニテ候ハス、
共、
後ニ被贈候
 被かれ候べし、當座にて候ハすとも、後にをくられ候
座、
ニテ、
「山田カ、総」
 へし、若さしきにて出され候（ハ）は、久富と弥二郎に
州家此姓名アリ、応永記ニ出タリ」
 か、せらるへし、上手久富たるべし、よらいハうしろ
被昇セ、
「早候カ」ヲハテニテ候、
鑑進ラセ、
 をかき候か上手にて候、よらいをまいらせ候時ハ、
側ニハ不置候、
鑑ヲ早テハニ
 そハにハおかす候、前にをき候、よらいをかきて前に
置候、
近ツキをき候時ハ下手かきて候、物引候人の前にちかつき候、
餘リハ近ク不寄候、
少シ遠ク候テ、
 あまりハちかくよらす候、すこしとをくおき候て、

御へ直り候テ
そハへなをり候て主の前へをしよせ候也、赤星おりて
候ハ、被引候「御供ノ人ナラン」
候ハ、馬ひかれ候べし、上野ニ引せられ候べし、若
引出物ニ也

とんせい物候ハ、小袖一とらせられ候へし、それハ
通世可被為取候、其レハ
後ニ可被遺候也、水島御陣中ノ間ヲ云カ「石塚大
後ニやられ候へし」也、諸事あれにてのこじつハ種玄
和人道カ」
に申合られ候べく候哉、恐々謹言、
可被為申合候哉 故實ハ

「蓋當永和元年乙卯」
八月廿七日
六代師久道貞（花押）
御法号

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」三〇八の一号文書ト同一文書ナルベシ、尚行問書ハ朱書カ〕

（以下朱書カ）
右御書季安按ニ、永和元年秋、九州探題今川了俊ヨリ
氏久公ナトヲ肥後菊池水島ノ陣屋ニ招キ上ケタルコト聖
榮自記ニアリ、但シ年月ハ記シナケレト、室町記ニ永和
元年八月二十六日午尅、今川了俊少小貳冬資ヲ肥後ノ陣中
ニ殺ストアレバ、其時ニ當レリ、聖榮ハ應永五年ニ生レ
シ人ニテ、傳聞ヲ記セシ誤ニヤ、博多ニテノコトノ様ニ
カキ、又 伊久公モ參陣シ玉フコトヲ載セ置レズ、（然カ）ト
毛国分豊後守久成カ永和元年七月軍忠ヲ申状ニ、今川了

俊承了ト花押セシニモ、守護人嶋津上総介伊久度々令注
進云々、同七月十二日、菊池水島御陣被召之時、抽忠勤
ニ候、又應永記伊久公ヨリ大友親世ニ答ラル御書ニモ、
冬資事於水島被討申候云々、同年八月廿八日、了俊ヨリ
島津越後守殿ニ宛タル筑前国守護職ニ吹拵セシ状ナトヲ
以テ参考スレハ、伊久公モ此水島陣ニ出會シ玉ヘルニ
ヤ、此時 伊久公モ御年二十九歳、イマタ御若輩ト被思
召上、御親父ノ 師久公ヨリ別テ御世話ニテ、如此条書
ヲ跡カラ遣ハサレテ、段々御教誡アリシト愚按シヌレハ、
斯クハ朱註シテ、又

先日より取出餘り、延々相成候ゆへ、早々書写、
尚誤も不少ハ案中に乍存任御望可申上候、又御返被
置可被下向ニ、宜被仰達被下候、

伊地知季安

御打立ア時

御打立ア時

御打立ア時

伊地知季安

五指量愛染明王由來記

(表紙)

五指量愛染明王由來記 全

(中表紙)

安政三年丙辰霜月

五指量愛染明王由來記

草稿

季安撰

五指量愛染明王由來記

嗟峨帝之為太子也、勅弘法大師、空、令下斫谷渡

藤以彫刻五指量愛染座像、既成獻

帝、真諸持佛堂、而未幾、帝即位、寔其靈驗云、

後二十六年、承和二年乙卯三月廿一日、大師入定於

金剛峯寺、年六十二、其後八年、承和九年壬戌七月十

五日

帝崩、年五十七、大師之傳法於弟眞雅也、諸所秘

寶、佛像等、皆無以不傳、此像亦即其一云、後四十

五年、元慶三年己亥正月三日、眞雅卒、年七十九、

在原業平少於眞雅二十二年、崇信密法、就眞雅

學、眞雅以是授之業平、業平後師僅二年、薨于元

慶四年五月二十八日、年五十六、其後不知傳誰、

自業平歿、至文中鎌倉右幕府執兵權之時、二百

四五十年、其間、莫詳轉傳于幾人、右幕府竟獲

此像、益加敬信、自文治前五十餘年崇德帝時、大治二年丁

未三月十二日壬寅、法皇、上皇幸法勝寺、

慶愛染像百餘軀、七寶塔及小塔一萬基、五年庚戌十月四日癸酉、上

皇幸法勝寺、慶愛染像一百軀、見中右記、又鶴岡八幡有五指量

愛染像一軀、長四五寸、弘法所造、極妙作云、事見鎌倉志、又承

安四年六月廿八日癸未、依為日曜鬼宿、為姬君、令以一日奉

造五指量愛染明王、即供養了、亦見玉海、時愛染像有二百餘軀、

又文治後可十九年、元久元年六月一日壬辰幕府告禱、命以此日

時、公以三州守護、兼島津莊惣地頭、凡諸郡院司、

辨濟使等之隸御莊者、無不統轄、薩之滿家院、則

業平為二院司、見建久八年圖田帳、前此祀熊野權現於厚

智山、曰三厚智山權現、按稅所氏系圖、兵衛祐滿為滿家院郡

建保元年、與討和田義盛、夢創死之云、今實東鑑、戰死列、載

筑紫稅所次郎、蓋當于此、實皆與公並時、而子孫世襲座主職、不可

獨言公創此社、據此、權現蓋所固詞、而公則至下

新建之、附以三座亦未可知也、姑註疾考、

公奉此像來領本院、與僧永金議、又附三座、稱

華尾權現、亦山之別名也、扨寺於其麓、真才之此像、

號平等王院、且設僧坊三十六區、為密教之道場、

圓融院、普賢院、安上院、中道院、神坊、西坊、金藏坊、菩提院、

華藏院、宗智坊、曼羅坊、堅義坊以上十二号見于古坪付、他無所考、

於是建保六年戊寅九月、公以三國之守護所、兼惣地

頭若御莊預所、故借永金及本院地頭、辨濟使等、鑄

鏡七面、為厚智山權現神體、內以祈皇家、外以禱

幕府、次各祈任所平穩、鑄事于陰、藏之內殿、到于

十一面存、記其事者、唯五面耳、永金皆載、於其二面、

一下載小野氏、一永金次載大中臣眞久、永亦作榮、繫大藏氏、

按建久圖田帳、日置庄北郷下司、有小野太郎家綱、又向島萩原、

氏藏本、有書正長二年己酉二月五日主小野氏千代王丸平等王院、下

(頭注)自下文至其詳九字分註也文殘闕者、莫知其詳、又按南都西大寺愛染緣記、

夫興正菩薩、諱思圓、悟顯密法、為律宗祖、被龍

不戒師、至康元中、夜夢伊勢大神宮授愛染像、翌朝、老叟來授其像、不異所夢、崇信鍊行、積廿餘年、迨弘安四年蒙古入寇筑紫、後宇多帝使藤原光泰勅宣思圓祈賊船退散、閏七月朔日、納一切經于伊勢宮、眞愛染像於男山八幡、(禮)續經禳賊、至七日期、尊像發鐫、西飛弦音如雷、時大風起、賊艦悉摧于博多、我師乘此、討殲賊兵、生還者僅三人、實賴其威力、事見阿一所著異國襲來記云、其後至慶長中、(德川家康)神祖亦特尊信之、詳出于元祿十三年西大寺金剛院尊秀所撰愛染緣記、由是

※公室所世崇敬也、(久患)其後降乎應永中、義天公既嗣、及久世成、久世陣于宮園、市來、有與所謀、公陣平等寺、久世不、公怒其負盟、乃引兵還、見應永記、未詳其寺在於何地、蓋平等王院之寺號也、而至文明四年

※(頭注)「季安再考、平等寺在伊集院(妻力)養生田村、然則其後云以下至寺號也之六十七字刪去可也」

(忠昌)

圓室公時、郡山地頭村田經安以公執政、領本院、特信一宮、欲新神廟、雖以經營、院屬他氏、歷六七年、復知院務、至延德三年、竟成其功、三月、僧桂庵為上梁文、曰、不畜一院仰此感應、寔三州之所崇信也、見鳥陰雜著、鳥陰乃桂庵別號、字曰玄樹、本周防人、入明學儒、

圓室公時、厚聘于藩、勅桂樹院、實以寵信、歿于永正三年、篇什雖多、他未觀言華尾社平等王院等事、然一宮、相傳祀

得佛公云、然應永中、坊津一乘院第四世賴俊學有海於仁和寺、又學快憲於根來寺、十五年皈自根來、以傳賴憲、二十九年壬寅十月廿二日、賴俊滅、五世

賴憲生于應永五年戊寅、傳法於弟子賴政、又莊嚴寺開山良範受法於一吽、一吽僧都薩州人、遊學于上野大聖寺、受法於圓喜律師、遂董其席、居二十年、寺崇弘法所刻不動像及阿彌陀像、自嵯峨帝所世尊奉、而至後冷泉帝、移二像於信州善光寺、後又移之於大聖寺、既而一吽嗣法圓喜、迫其意、奉二像及書籍、皈以授良範、至應永十五年創莊嚴寺、皆與于此、還創莊嚴於伊

集院、以弟子精範為第二世、亦賴憲弟也、而兄弟俱登高野山、精範以疾滅於根來寺、其將死也、遺

托賴憲掌莊嚴寺、賴憲以是傳之覺盛、大乗院開山年、スルヤ、俊盛師

七十二、滅于文明元年己丑十二月十八日、六世賴政生于永享六年甲寅、八世賴忠生于延德元年己酉、迨永正七年

蘭窓公創大興寺於鹿兒島、徵賴政為開山、於是十月廿九日、會盟一乘院・莊嚴寺於大興寺、賴政乃定三寺法脉之約束、以聞于公、手書花押、還賜三寺、是時亦未一言及他眞言寺院事、十二年乙亥六月七日、公賜券帖、八月廿五日

公以疾薨、年二十七、時賴政年八十二、至此時、有密教徒曰快瑜法印者、與巢松道人等、往來唱和、見乱道集、巢松洛陽人、名光建、字以安、來于覽府、為公見寵、乃其所著也、問歲、勝心大翁公特

寵快瑜、蓋當是時、建平等王院於覺府清水、移安此像、使快瑜領其祀事、蓋厚地僧寺廢圮故也、今探可証乎快瑜事者、各載其年、備攷如左、

○大永元年辛巳正月、次、桂樹主盟於平等王院、新歲之詩韵、時曰主盟、乃桂轉正興寺、

新歲尋君花柳房、門前車馬路何荒

詩名若續乃翁得 不異東坡陣履常（當之） 已陣無

二月廿一日、大興寺開山賴政滅、年八十八、

○二年壬午秋八月、快瑜猶在平等王院、

志布志大聖教院主翁傳海法印、此春二月、以故詣

床下、女談終日矣、何幸似之、今也得信、述小

伽陀、以呈之云、[6]

〔以下分註也〕
代平等王院、大永二壬午歲秋八月日、

大覺如空々一瀟 湛然寂靜是清流

相逢語尽本性 芦荻花開野水秋

○三年癸未正月、快瑜猶董席、七月猶然、

癸未歲新正、奉平等王院、

祇今聖代止兵車 舜日堯風屬國家

想見主人安樂處 簷前春色雨添花

七月十六日、於平等王院意進居所、松本与三乞詩

扇面、面有兩三家、山中自有海澹之景、

山下千里景 一葉泛扁舟 飄見蕭湘暮 初和落雁秋

扇面、大永三癸未七月日、平等

枕上涼風莫驚夢 莊周化蝶々莊周

此花未識有名不 色雜紅葉齊入秋

○四年甲申無所見、

○五年乙酉、平等王院世稱談議所、

元月第四、呈談儀所主翁、

法界華嚴富貴春 無邊教海甚深津

看他千億梅花佛 一鉢分身屬主人

○是歲、一乘院十世典瑜生、

○大永六年丙戌、快瑜猶董席、

丙戌新正、隨例述愚作、奉呈平等王院行法室

下、

覺天心月教中輪 法性摩尼藏裏珍

枝上黃鶯向人說 花開混沌未分春

元正隨例、綴春詩、上平等王院云、

梅花爭春霞似旌 東風一陣拂心兵

鶯歌曲緩太平象 盡善如聞韶樂聲

○初島津實久納姉於府城、為公夫人、已亦欲倚為

其世子、未幾 公去夫人、於是七月、實久乃畔、

公畏其將寇、囑

梅岳君、令執兵權以備之變、而其子

虎壽君、立為世子、乃十一月入鹿府城、冠名貴

久、是為二

大中公、

○七年丁亥四月 大中公立、大翁公遜于伊作、群臣

咸盟、事于

大中公、五月、實久又欺、老公還于府城、十月快

瑜董席、

奉謝平等王院惠炭頭一籠、十月

吾師人謂智而仁 孔子周公并一身

寒夜炉邊見其德 炭頭紅處變麒麟 岐詩云、紅麒麟炭ノ紅火ヲ云也

○享祿元年戊子正月、快瑜猶董席、

戊子春王正月、隨例呈平等王院主盟云、

尊老胸中水鏡清 光含萬象影明々

東君亦似呈祥瑞 早使黃鶯唱太平

○二年己丑、快瑜猶董席、

呈平等王院、正月二日

靄々春光滿梵家 東風吹雪暖猶加

從今二月花時節 可院門留長者車 享祿

己丑新正、平等王院庭前梅樹題之、

一樹梅開春寺中 太真美色淡粧濃

詩人早告主人好 鈴索掛應護風

○是年六月十六日、一乘院七世賴全滅、薩州泊産也、撰

津介忠譽等朝于薨府、二十八日、及豐後守忠朝等

齋會于談議所、十二月十三日談議所火、十五日、忠

譽遣使唁之、

○三年庚寅九月、快瑜奉此像、避亂出奔、

平等王院送行、九月七日

三十年間真我師 明々心地月無虧

秋來何夏俄分袂 正是楓林霜染時

○四年辛卯二月、公憂快瑜未還、將益加恩以令

還住、十九日、寄捨築山春日廟在覺島神領、使快瑜掌

其祀事、乃賜證書、三月八日、又以本院東保大平木

場、為平等王院寺領、如故、曰、快瑜還住舊院、永

無以違、且厚地界四至、如

得佛公所定時、皆宜領之、亦賜證書一通、

1 「正文在坊津一乘院」

鳥津時久
(花押)

薩摩國鹿兒嶋郡於築山、被崇給春日大明神、奉寄進之

地、平等王院快瑜法印可有執務之狀如件、

享祿四年貳月十九日 勝久

進上平等王院侍司

(本文書ハ旧記雜錄前編二二一七五号文書ト同一文書ナルベシ)
(本文書ハ花尾社伝記二二二七号文書ト同文ナリ)

2 「正文在坊津一乘院」

(島津勝久
花押)

滿家院東俣大平木場之事、如前之平等王院江令寄附者

也、早任先例、可有沙汰之狀如件、

享祿四年三月八日 勝久

進上 平等王院快瑜法印侍司

上包 快瑜法印

(本文書ハ旧記雜錄前編二二二七六号文書ト同一文書ナルベシ)
(本文書ハ花尾社伝記二二二七五号文書ト同文ナリ)

3 「正文在坊津一乘院」

(島津勝久
花押)

滿家院東俣大平木場之事、如前之急平等王院江令寄附

早、然者就快瑜法印成婦寺、於永之後代不可有聊尔相

違、其外厚地四至方至之堺、曩祖忠久如寄進能く被合
首尾、悉以平等王院快瑜法印可有執務者也、仍為後日
之狀如件、

享祿四年三月八日 勝久

進上平等王院快瑜法印侍司

上包

快瑜法印

(本文書ハ旧記雜錄前編二二二七七号文書ト同一文書ナルベシ)
(本文書ハ花尾社伝記二二二四号文書ト同文ナリ)

○天文元年壬辰快瑜未還、

○二年癸巳猶未還府、

似雲尊師曾住鹿島平等王院之日、新年必製愚詩、

奉稅夏正矣、今也隔山水、猶以昔遊之好作

是詩獻之云、【分註也】天文二曆正月ノ次ニアリ、

三十年來客此郷、飯心正是忘咸陽

與君兩地碧雲合、計識逢春舉酒觴【自天文二年言三十年、則當永

正元年、可
以知也】

○三年甲午正月、快瑜猶寓於穎娃、蓋依邑主左馬頭兼

洪一也、

天文甲午新年、呈顯娃似雲院快瑜法印、

隱退名高顯水濱 賢人洗耳意清新

暗香疎影梅花月 遙憶江南第一春

○是年、快瑜又寓於給黎、蓋依邑主撰津介忠譽也、

四月辭還覺府、公招之也、

奉呈給黎似雲院快瑜法印還鄉、

導師此去風塵 花月無情萬歲春

聞說歸鄉甚相近 先歡我亦卜芳隣 卯月四日、

十月、

公如禰寢避亂也、

○四年乙未正月、快瑜奉此像、在覺島平等王院、凡自

去院至是六年也、四月、公還自禰寢、

新年春、呈似雲院主翁快瑜法印云、天文四年乙未

人傑地靈隣海山 梵家日々與雲閑

春來香座誦經 (題脫力) 楊柳展眉梅破顏

○此秋、快瑜復奉此像、去覺府奔于海南、十月、實

久燒夷覺島、兵煙蔽空、凡七日、老公走于帖佐、

○五年丙申、快瑜應實久招、飯于舊院、

先平等王院快瑜法印、去年新正、於旧院相共愛

春、其秋飄然遊于海南、又今以實久公之命、飯

乎故鄉焉、今也又偶丙申之春、予亦思去歲之春

遊、而述小詩曰、

最喜回轅駟馬輪 相逢一咲故鄉人

去年今日共君見 細雨梅花旧院春

折紅藥一枝奉獻快瑜法印、

庭前芍藥弄新粧 雨後惜春吟味忙

勝似牡丹君可識 自今須是作花王

六月炎天、折庭前仙翁而獻平等王院、副以詩、

炎天莫似此花紅 愛見新粧色更濃

不歷蓬萊三萬里 人間遭遇老仙翁

○六年丁酉正月、快瑜猶在舊院、二十二日、撰州忠譽

使東條丹波守來賀新年、談議所、福昌寺云、

新年、呈平等王院、

東風楊柳似隋塘 吹面不寒春日長

喜見主翁顏未老 再修舊院帶年光

此年、快瑜復奉此像、避兵亂奔于申良、扁稱戶

院、弟子典瑜亦從、

○七年戊辰猶在申良、

○八年己亥六月猶居「芦院」

奉_レ呈_レ申良平等王院_一并引、快瑜法印大和尚、於_レ子
四十年之尊師友也、爰_レ寔島喪乱以來、不_レ遂_二拜謁_一

者凡三年矣、當_二是歲林鐘初吉_一、而奉_レ詣_二於尊院_一、
則道体堅固、珍重萬福、伏承、扁_二尊居_一而称_二芦院_一

焉、故人詩云、罷_レ釣帰来不_レ繫_レ船 江村月落正堪_レ
眠 縱然一夜風吹去 只在_二芦花淺水邊_一 蓋此詩之

意者、應無所住、而生其心之義也、先德儘被_レ評_レ之
者也、故師亦是以名_レ之耶、可_レ以_二嘉尚_一耳、謹題_二

小詩_一、奉_レ呈_二香床下_一云尔、

心存_二無住_一住_二人間_一 滿月青山勝_二舊山_一

芦荻洲幽庭院裏 孤舟不_レ繫與_レ鷗閑

以上抄_二于亂道集_一、據_レ此、足以証_レ當時快瑜_{号似曇}或_{芦院}之

董_二乙平等王院於寔島清水_一焉、後十餘年迨_二天文二十四

年乙卯

大中公淺靖_二国亂_一、別卜_二勝地_一、九月四日、命地頭伊忠

朗祀_二華尾社於寔島上山城之西麓_一、曰_二久富貴宮_一、以權

大僧都俊盛為_二大官司_一、又弘治二年、「_一說作_二天文十九年_一」移_二莊嚴

寺七世俊盛_{覺盛弟子}、於寔島小城權現之麓、曰_二大乘院_一、

施_二之厚地_一、兼_二掌平等王院事_一、由_レ是俊盛為_二開山僧_一、

以_二弟子頼岳為_二第二世_一、前_レ此快瑜之奔_二申良也_一、奉_二

公室所世宝傳此尊像及大小寶刀・書画、以傳_二其弟子

寂充房典瑜、高山城主肝付良兼特寵_二典瑜_一、招為_二高崇

寺住職、亦一乘院空快所_二開建_一也、

一御脇差一 左文字

一御成敗式目

右兩種_二御書相添_一、

一三幅一對之掛絵 但牧溪和尚之筆

右、平等王院肝付高山之高崇寺へ御住之刻、被成御所

持候、何も御重代之御物にて候由承及、宗琢懇望候而

相求之早、

一青江作之御腰物一

但二尺三寸、これも同御物也、

右、宗榮手前より

御屋形様へ進上之候、

由是、典瑜尊奉此像、雲遊學於根來寺、時逢賴忠、
有所盟約焉、以故俊盛及賴岳時、以大乘院雖兼
領平等王院、此像則未還焉、永祿五年壬戌、一乘
院賴忠生于延徳元年己酉、年已七十矣、將招典瑜
授之密法、十月十六日致良兼書、令以告旨、良
兼乃告典瑜、於是典瑜趨一乘院、十一月三日、親
謁賴忠受傳法印可、有所約也、

5 「正文在高山高崇寺」

雖未^{⑩甲}通候^{⑩用}一書候、就中其方御帰依之高崇寺、於根
來寺住山之砌、法流之儀令約諾候、然者愚僧老躰之条、
急度御越、法流可有御相承様、御吳見所仰候、恐惶謹
言、

(永祿五年)

神無月十六日

賴忠

肝付三郎殿

御宿所

(本文書ハ「旧記雜録後編」三七八号文書、同附録二三四八号文書下同) 文書ナル
ベシ) (本文書ハ「花尾社伝記」一八号文書、同文ナリ)

永祿五年壬戌十月十六日之御状也、同十一月三日、於

一乘院傳法印可也、高崇典瑜代、

○九年丙寅三月十一日、大乘開山俊盛歿、賴岳董^ス席、

○十年丁卯、先是

大中公

(義久) 貫明公就學賴忠於一乘院、至是賴忠既傳法於弟子

忠瑜及典瑜等、年亦老矣、以故四月十五日、

貫明公如坊津、臨訪賴忠、國老川上左近將監從公

之飯自坊也、

日新公亦飯自泊、會于鹿籠、尚^思

久恭迎、閱馬于牧、十月、賴忠之將死也、託後事、

是十日、

欲招典瑜董一乘席傳之器什、乃以聞官、於

貫明公特賜證書、以命典瑜、如其所請、既而晦

日、八世賴忠滅、年七十五、

6 「正文在高山高崇寺」

龍巖寺一乘院賴忠法印為御遺言、後住可為舜^{⑩覺}充房典瑜

之事并門徒真俗道具等、守代之掟之旨、不可有相違之

状如件、

永祿十年丁卯拾月十日

▽④進上一乗院頼忠法印

修理④大太夫義久御判

御同宿中 △

(本文書ハ旧記雜錄後編一三三七号文書ト同一文書ナルベシ)
(本文書ハ花尾社伝記一九号文書ト同文ナリ)

○先レ是忠瑜董席、為九世住持、元龜二年辛未四月十

八日、

大中公如泊津、公子歳久・国老三原遠江(重秋)從、留滯

六日、一日 公訪忠瑜、次日臨地頭上原長門館(尚常)、歸

閱馬於鹿籠、邑主尚久享宴、大野駿河(忠亮)・喜入摂州等(季久)

多騎從之、天正五年丁丑閏七月十一日、忠瑜滅、

○十世典瑜生于大永五年乙酉、永祿五年、受法於

頼忠、十年移自高山、董一乗院、時

貫明公聞典瑜尊奉此像、乃大歡喜、令還獻之、

於是典瑜還納尊像於公室、自初快瑜奔于申良、

至是三十有一年矣、當是之時、俊盛弟子久譽法印董

大乘院為第三世、乃国老川上意鈞称上野介忠克之五男也、

時移寺於精川西アズキ、為今地開山云、自家

貫明公乃命久譽、每歲之六月一日、必遷此像於城

内、修三洛刃法、十座、永為三例式、昔永正中、国老石井旅世(義忠)・大寺官音等所撰年中行事有載六月一日事者、蓋此法行也、

7 在坊津一乗院

尚々今度之氣分一向無驗候、乍御辛勞能々御祈念

頼存候、

急度令啓達候、仍昨日十八日從巳之刻、米菊丸氣分惡

候、早晚之咳氣等ニ相替、不見分躰ニ候之条、早々不

移時刻致注進候、當病之間、偏御懇祈可預御入魂之旨

頼存候、諸慶倍重而可得貴意候、恐惶謹言、

(天正五年)
三月十九日

(鳥津義弘)
忠平御花押

一乗院法印御房

御同宿御中

(本文書ハ旧記雜錄後編一九一八・一九四号文書ト同一文書ナルベシ)
(本文書ハ花尾社伝記三三号文書ト同文ナリ)

8 全 尚々性圓房へ次之刻可預御心得候、

今年之御祝言雖申旧候、尚以不可有際限候、幸甚々々、

抑真俗可為御満足候、此方御同前候、仍米菊丸重年益

9 [全]

堅固之段、御懇祈之故ニ候、畏悦々々、弥以繁榮^④御
祈念雖不及申候、重疊御入魂可得貴意候、猶諸吉永春
可申加候、恐惶謹言、

〔天正十年カ〕
正月八日

〔島津義弘〕
忠平御花押

一乘院法印御房
人々御中

典瑜法印様

まいる御同宿御中

忠平

兵庫頭

〔本文書ハ旧記雜録後編一〕九〇三・一二六一号文書ト同一文書ナルベシ
〔本文書ハ花尾社伝記二〕二号文書ト同文ナリ

猶々愚息弥息災堅固候之条、満足定而可為御同宿^④
候、就祈念之儀、遠方迄人被差遣候、不知所謝候、
乍重言、米菊丸可被勵懇祈事頼入候外無別儀候、

就米菊丸祈念之儀、不動護摩供并藥師法被成修行、御
配軼護送預候、則令頂戴候、誠畏悦此事候、弥御精誠
所仰候、萬賀猶重疊可得貴意候、恐惶謹言、

〔天正十年カ〕
五月十日

〔島津義弘〕
忠平御花押

10 [全]

一乘院法印
貴報御同宿中

〔上包〕

典瑜法印様

尊報御同宿中

忠平

〔本文書ハ旧記雜録後編一〕九二二・一二七三号文書ト同一文書ナルベシ
〔本文書ハ花尾社伝記二〕三号文書ト同文ナリ

▽^④尚々性圓房へ其後無音之由、次之刻可被御心得候△

任遠遠、境之御無音心外候、仍米菊丸祈念之儀、旦夕
無怠慢預御禱尔之由、節々示給候、祝着不過之候、連
々如申入候、彼息男可危之由、諸人申候儘、内々心遣
御察前候、雖尔法印様奉頼御惱祈上者、弥以可為勇健
事、聊無疑存候、倍御入魂之段可得尊意候、恐惶謹言、

〔天正十年カ〕
九月六日
一乘院法印御房
御同宿御中

〔本文書ハ旧記雜録後編一〕九三〇・一二九〇号文書ト同一文書ナルベシ
〔本文書ハ花尾社伝記二〕四号文書ト同文ナリ

天正十一年癸未十月十二日、久譽寂滅、盛久董^レ席、

是為四世、其後有探盛久所嘗語、以述此像由來上者、如左、

11 ○ 五指量愛染明王出處事

古昔嵯峨帝皇、依有勅宣、弘法大師以谷渡藤為御素木、刻彫彼愛染明王、安置持佛堂、令成就種々御願、給、其上依愛染威德、速疾有御即位、成日域有主給、故

帝皇與弘法大師諸共、雖為御秘藏、無餘儀弘法大師舍弟真雅僧正、密法源底、秘佛尊像等無殘令附屬畢、其内一物也、業平童形之時、真雅之俗弟子也、依其券契、彼愛染業平被遣、雖為方々展轉、彼愛染明王者日本無其紛尊貌也、故

賴朝公以賢慮才覺、即求得之、雖為無比珍寶、愛子

忠久公被成讓、自尔以來、御代々相傳御本尊明白也、以其由來覺鳴清水設勝地、建寺家、即号平等王院、奉安置愛染明王、其時住持称快瑜法印、然間勝久一乱時節、彼快瑜肝付高山持參被申、其弟子典

瑜法印此愛染有隨身、尋諸寺諸山、學顯密二教、依其因德奇特、坊津一乘院住持職成給、及久住其間、龍伯樣被及聞召、是非共所望之由被成宣言、亦復令還着御當家、即以龍伯公尊意、久譽法印被仰愛染護遂修行、並六月朔日、三洛又令興行、答其善因、国家増榮、九劔士卒屬幕下畢、彌彼愛染可被成信敬、然者御子孫繁榮、恒受快樂、上和下睦、衆望亦足耳、右旨趣、盛久法印連々物語被申、粗如此、追可決云々、

包帯ニ 五指量愛染王由来 大乘院

(本記事ハ「花尾社伝記」三五号ト同文ナリ)

12 「正文在大興寺」

奉修 光明真言法一千座 二萬一千遍
奉念 佛眼真言 各十萬遍

大日兩部明 各十萬遍
光明真言 五十萬遍
不動慈救呪 二万一千遍

八字文殊呪

二万一千遍

13

乍恐令啓上候、仍

一字金輪呪

十万遍

右意趣者、奉為大覺寺殿義昭大僧正座離生死、頓證菩

提、自利々他、果德圓滿、奉修所也、凡光明真言功能、

誦之者、滅除重罪於刹那、行之者、成就悉地於速疾、

然則答此善業、彼尊靈怨念妄執忽消滅、无邊果德速證

得、若爾者信心大施主藤原義久、息災安穩而身心堅固、

壽命長遠而恒受快樂、仍抽丹祈之旨如斯、

天正十三年乙酉卯月吉日

權大僧都典瑜敬白

(本文書ハ「花尾社伝記」二六号文書ト同文ナリ)

○天正十九年辛卯二月、典瑜之董クニ一乘也、

貫明公如坊津、臨訪典瑜、国老伊集院幸侃等ヲ從、時

稅所越前守地頭于坊、本田新介地頭于泊、皆迎謁、

還過入志狩于野間、文祿三年甲午十一月十七日、

典瑜滅、年七十、快忠代レ之董席、是為十一世、生

于天文七年戊戌、文祿中

(家人)慈眼公之在朝鮮也、快忠呈翰候起居、

忠恒様其表累年雖御在陣候、遠國海路之故、又者此方

公儀取亂候之条、于今無音罷過候之處、愚僧病氣之由

達 貴聞候欵、御直書被成下候、即令頂戴、忽得快安

之心候、此御芳情送生ニ世ニ雜奉報謝之事候、就中為

御守弘法大師御筆之百牀不動奉進献之候、能御信仰

專一候、此等之趣、宜預御披露候、恐惶謹言、

一乘院

六月十三日

快忠(花押)

肥後少兵衛尉殿

まいる人々御中

年六十二、滅于慶長四年己亥十一月八日、

右云大乘院、莫詳為誰、按盛久寂、盛秀董席、

是為五世、以慶長十九年滅、六世頼眞寂于寛永五

年、據是考之、聞盛久而其記之者、應是盛秀、

否必頼眞、姑竝後訂、其後

貫明公以此像傳之

慈眼公、

慈眼公安置之城北護摩所、敬信久矣、寛永十四年丁

丑頃 公寢疾、而

黃門様

寬陽公時以^{〔光公〕}世子在江戶、於是 公使平田清右衛門純正齋此像及他寶器如江戶、以傳^{〔中〕}之

〔本文書ハ旧記雜録後編五二〇〇六・一〇〇七号文書ノ抄ナルベシ〕
〔本文書ハ花尾社伝記二二八号文書ト同文ナリ〕

寬陽公、於是二月拜受之、二十九日、使純正齋書

後三十八年延寶二年、公告禱寄捐華尾社廩米四斛、

回奉謝之、時大乘院九世快代也、

資祭料也、而迨貞享四年

以上

寬陽公告老、

平田盛右衛門尉被差遣、御氣色之様子細被 仰聞

大玄公襲封、疾明年八月 公始就國、乃十二日、

安堵仕候、

老公使佐多豊前久達陣此像及他寶器於對面所、以傳^{〔中〕}之

一 愛染明王之御本尊并摩利支尊天今度被下候、是ハ谷渡

之愛染与申候て、御當家代々相傳候弘法之御作、名

大玄公、安置于護摩所、如故、而至元禄十五年壬

譽之尊像にて御座候由、別而忝頂戴仕候、永々可致秘

午、自大師滅踰八百年、此像手臂敗壞、時大乘院

藏候、誠御病中ニ如斯御心付、不淺奉存候事、

十八世覺雲、以聞于公、公乃命佛匠田中孫右衛

一 以糸書委敷申上儀共御座候間、盛右衛門尉被召奇、直

門、繕所損以安置如故、於是四月十四日、覺雲記

二 被聞召上、其御心得肝要ニ奉存候、尚奉期後音候、

誠惶誠恐敬白、

15 ○ 五指量愛染王

松平薩摩守

弘法大師以谷渡之藤木彫刻之、是故号谷渡愛染、

〔寛永十四年〕
二月廿九日

光久御判

初大師奉進于嵯峨帝皇、其後展轉、傳于頼朝

進上

卿也、此本尊者雖為征夷將軍頼朝卿之御持尊、

忠久公當國御下向之時、從有御讓已來、御當家代々

御讓與所_レ有之靈佛也、依_レ之、信敬異他也、是以每

歲六月朔日、於_二城内御對面所_一延_二屈於_二三十五口之僧

侶、為_二國家安泰武運長久_一、令_レ修_二於_二十座_三三洛刃之法、

從_二古昔在_二至于今_一、未_レ曾有_二怠慢_一也、雖_レ然久經星

霜_二臂手損壞_一、故言_二上

中將綱貴公、即命_二于佛工田中孫右衛門_一令_レ繕_二修之者

也、

元祿十五龍集壬午卯月十四日

大乘院十八世法印覺雲誌

(本文書ハ「花尾社伝記」三二号文書ト同文ナリ)

○寶永三年丙戌、前_レ此

大玄公薨、

淨國公襲_レ封、至_レ此三月廿二日、臨_二于對面所_一、觀_二此

像及諸寶器、豫命_二大乘院十九世騰雲及祈禱司時任慶

右衛門・佐竹納右衛門、相俱奉護遷_二之正面_一、迨_二竣而

撤、騰雲等復奉護、眞_二于護摩所_一如_レ故、騰雲乃記_二事、

如_レ左、

16 ○太守左少將吉貴公依去々歲御家督、而茲歲寶永第三丙

戌春三月廿又二日、御讓物品有御照覽、依之谷渡愛染

五指量一軀為其隨一也、此御本尊來由者、夫弘法大師

之御彫刻、而所_レ獻_二于

嵯峨天皇之護持尊之愛染王_二也、爾來展轉、而_レ賴朝

公持尊、是以為御當家靈宝也、故預令承知、愚院并御

祈禱司時任慶右衛門・佐竹納右衛門刻其日限、即日早

旦、會于城北護摩所、而開封印焉、漸望已之上刻、渴

仰隨身、而奉安置於御本殿對面所大床中位、而退居虎

間矣、今般_(盤カ)盪午之下刻事既畢也、即又奉隨身守衛歸于

護摩所、封閉而納焉、

大乘院十九葉住騰雲法印

于時寶永第三丙戌三月廿二日

御祈禱司時任慶右衛門

佐竹納右衛門

(本文書ハ「花尾社伝記」三三号文書ト同文ナリ)

○五年戊子、初

大玄公時、命_二有司_一復建_二平等王院及圓融院_一・多聞院・

本地院・普賢院、施之寺領各二十斛、而未幾、至

是

淨国公先建平等王院、寄捐二十石、前此別有愛染

座像一軀、亦大師所造、長二寸七分、自頭、自

貫明公、歷

(義也)松齡公

慈眼公、至

寬陽公、所三世崇信也、

寬陽公嘗賜之佐多久達、今也久達、以是還獻之

公、故眞此像及右幕府・丹後局・永金等神主於平等

王院、使大乘院兼領祀事、而谷渡愛染安置于護摩

所如故、此年三月、命大史田中国明等記其事焉、

而至七年庚寅八月、圓融・多聞・本地・普賢之四院

亦悉落成、而寄拾寺領各二十斛、實如先公命、皆

係大乘院二十世快存之時、於是閏月五日、寺社司川

上久東等與快存書、永令以禱國家之寧謐矣、九日、

国老名越恒渡承旨、命快存每公親謁令必開帳、

為永例矣、

17 「正文在大乘院」

○薩州滿家院郡山厚地村花尾權現宮者、建保六年之秋、

御元祖忠久公御草創、御神躰中尊右大將賴朝公、左右

永金阿闍梨・丹後御局御三躰之木像、御安置候而、花

尾權現与御崇メ、寺院三十六坊御建立、本寺者平等王

院と号、御本尊者從

賴朝公 忠久公江御附屬之 御家御相傳谷渡五指量愛

染明王 御安置候、弘法大師 作なり、雖然十四代 ④太守 ①

勝久公御代、寺院悉及廢壞、依之十五代太守

貴久公御治世天文年間大乘院御建立被成、花尾之御神

廟執務兼帶被仰付、平等王院江御寄進之采地厚地村、

全大乘院へ御寄附候、御相傳之愛染明王尊躰者鹿兒島

護摩所江 御安置被成、每年於御城開帳御祈禱被仰付

候、然処故

太守中將 綱貴公花尾山江平等王院・圓融院・多聞院・

本地院・普賢院此五院御中興被成、每院采地式拾石宛

御寄捨可被成由、平等王院江者薩州鹿兒嶋郡吉田佐多浦之内權現

領門 圓融院江者同村之内宮之原屋敷、多門院江

者 ④同日置郡山山村之内久保田門、本地院江者 ①被仰出置候、

同村之内小原門、普賢院江者同村之内福富門、

④置 依之

太守少將 吉貴公平等王院以下之寺院御建立被成、薩

州吉田佐多浦村之内權現領門高式拾斛、平等王院江御

寄附有之、大乘院兼帶ニ被仰付候、且又御本尊之儀者

三位法印龍伯公十六代之主

宰相惟新公十七代之主

中納言家久公十八代之主

中将光久公十九代之主 御四代御尊敬之愛染明王一鉢

弘法大師作、御長 運靈迄二寸七分、從

光久公佐多豊前久達江拜領被仰付置候を被差上二候、

右愛染明王一鉢平等王院江御安置被成候、依之從豊前

久達宝永五年子三月十七日被差出候尊像之由緒書写卷

通、御家老新納市正久弥宝永五年三月廿六日之證書一狀

通、為後證渡置候間、寺孫永久令傳續、專國泰安民之

御祈禱、無怠慢可被抽丹誠候、依狀如件、

宝永七年寅閏八月五日

寺社奉行

川上久馬

久東判

伊集院十右衛門

忠覚判

大乘院

快存法印

(本文書ハ旧記雜錄追録三二九七七号文書ト同一文書ナルベシ)
(本文書ハ花尾社伝記三三六号文書ト同文ナリ)

18 [正文在大乘院]

○厚智村之事、被對

花尾權現神靈百姓共村役等之儀、此節より谷山之内宇

宿村同然被仰付候、至後年可被存其趣者也、仍如件、

正徳二年辰九月十八日

肝付主殿判(兼柄)

種子嶋彈正判(久五)

嶋津帶刀判(神休)

嶋津將監判(久当)

大乘院

(本文書ハ旧記雜錄追録三二八八号文書ト同一文書ナルベシ)
(本文書ハ花尾社伝記三三八号文書ト同文ナリ)

○近至

(重要) 大信公時、請于神祇道管領從二位下部良俱卿、以宗

源官旨一贈大權現尊号、於是命神官井上右内藤原祐

甫后殿、為神主職、令掌祀事、又使社人園田将曹

藤原舍眞・有屋田藏人藤原俊采屬祐甫シム助社務上焉、

事証

〔新編鎌倉志卷一鶴岡八幡宮ノ中〕

五指量愛染明王像壹軀 弘法作、四五寸許ノ丸木ヲ、

蓋ト身引分、身ノ方愛染ヲ作付タリ、臺座トモニ一木

ニテ作ル、極メテ妙作也、

〔玉海〕

承安四年六月廿八日癸未、依為日曜鬼宿、為姫君、令

奉造一日之五指量之愛染王、即供養了、

右供養ハ仁和寺ト見タリ、

〔一兩頭愛染像御掛物一幅 古筆

御代々之御本尊ニ而、

龍伯様 惟新様御信仰方々之御出陳御仕合能御本尊ニ而候

由、

光久公節々御意被遊御信仰之由、御祈念方申傳御座候、御

記録所江不相知候、

右御祈念方

一愛染明王像一鉢 厨子入

惟新公御本尊ニ而、御代々被遊御信仰候由、御記録所江不

相知候、

右御側御看經方預り

一高野山蓮金院ヨリ五指量愛染ノ卯板朱摺ニシテ、諸人

ニ施與ス、曰フ、此尊像ハ靈佛ノ画ニテ、薩州ノ御宝
物はナリトテ、今ニ住僧其縁起ヲ説クト云ヘリ、

20 〔新板大日本史四十七〕

崇徳天皇、大治二年丁未三月十二日壬寅、

法皇・上皇幸法勝寺、慶愛染像百餘軀・七寶塔及小

塔一萬基、中右記、五年庚戌十月四日癸酉、上皇幸法勝

寺、慶愛染像一百軀、中右記、

四條院、天福元年六月廿七日庚子申刻雲層忽起、雨脚

快降、入夜雷鳴、親嚴僧正愛染王法今日及六ヶ日、

施靈驗、貴賤感云云、仁和寺宮同被修此法云云、

〔道深〕

21 愚也淺陋、叨列史職、粗涉古編、偶獲老眼觸此來

由、質諸廟堂要覽、猶如有所未精覈、因欲補闕

以質博識、而未暇起艸、本月十八日、老德患痲、

不能造館、招醫服藥、消日於宅、故每病間、輯

記如右、至廿六日、粗成斯稿、既而屈指、僅垂一

句、豈足以示識者、姑備遺忘、以俟他日訂正云爾、

安政三年丙辰十一月穀旦 時年七十五歳

伊地知季安跋

享祿二年己丑、坊津竜巖寺七代頼全滅、

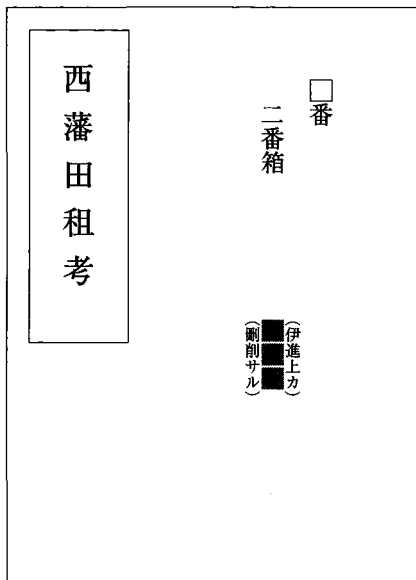
慶長四年己亥十一月八日、住持快忠滅、年六十二、

天正五年丁丑閏七月十一日、忠瑜滅、

(「及ビ頭注ハ伊地知季安自筆ナリ)

西藩田租考

(表紙)



1 元禄十一年寅十月九日、鳥津^(久年)主計殿より御領國繪圖調方被仰渡候覺書ニ

一間繩之事

一 此度之間繩、卷間六尺三寸宛式拾間繩ニ為相調候、濡候時者繩縮、干候時者延候由候間、一日ニ二三

度^(竿力)茂間繩^(繩脱力)を當可相改事、

一繪図之表道程之事

一 壹里を壹尺式寸ニ可被記事、

一針本之事

一 針者其所之麓御制札被立置候所より可有立方候、^(本脱力)

勿論針本ニ成候所者、御制札之躰繪図ニ可被記事、

一境引之事

一 國境者墨を以可為壹分半筋事、

一 郡境者墨を以可為壹分筋事、

一 外城境者淡色之可為八りん筋事、

一道之事

一 大道者朱を以八りん筋、脇道者朱ニ而分中筋、邊

土道朱ニ而糸筋より少ふとく可有筋引事、

一 壹里塚は墨を以左右に星を可被記事、

〔三拾六丁〕

西藩田租考上

目次

- 井田第一 授田第二 班田第三 租税第四
- 蠶織第五 調庸第六 丁役第七 馬牧第八
- 國郡第九 官員第十 正公第十一 僧尼第十二
- 倉院第十三^(庫カ) 羈制第十四 貫高第十五 永高第十六

京制第十七 村高第十八 今制第十九 三役第二十
 度考第廿一 斛高第廿二 代官第廿三 復封第廿四

西藩田租考卷上

覺府 平季安私撰

井田第一

夫理國者、先務其本、高以下為基、民以食為天、
 書云、民惟邦本、本固邦寧、程子云、其固本在於安
 民、故班史亦理民之道、地箸為本、（考）安土建步立
 畝、必正其經界云、何謂經界、治地分田、溝塗
 封植、經畫其界、若不脩之、田無定分、豪強兼併、
 賦無定法、貪暴多取、是故古者農師監之、田峻董
 之、都無游民、室無縣糶、夫必親耕、婦必親績、黎
 民時雍降福、孔偕致民殷富、若又反之、一人不耕、
 則天下有受其飢者矣、一女不績、則天下有受其
 寒者矣、民事豈其可不重乎、孟子反本說、亦
 惟言仁政自經界始、而叮嚀反覆、皆莫不是意矣
 也、抑田畝制、隨世異制、古者三代六尺為步、商

以五尺為步、即魯般尺、尺當此方曲尺、周制八尺為步、
當魯般尺伍尺參寸參分參毫強云、至秦始皇二六尺為步、亦魯般尺五尺、司馬法
 亦六尺為步、步百為畝、王制以周尺六尺四寸為
 步、疏云、步百為畝、長一百步闊一百步、註云、古
 者八寸為尺、以周尺八尺為步、則有六尺四寸、
 今以周尺六尺四寸為步、則一步有五尺二寸云、
 若夫路程、則六尺為步、三百步為里、又方一里、
 計十二萬九千六百步也、或曰、三百六十步為一里、
 可以知其不同也、夏之民一夫耕五十畝、每夫
 計其五畝之入、上送於官、謂之貢法、然有遊豫、
 視其豐凶、以補助之、亦傳夏謬、商人始為井田之
 制、以六百三十畝之地畫為九區、區七十畝中為公
 田、外面八家、各受二區耕七十畝、以合其力助
 耕公田、於其七十畝取十四畝為廬舍、則一夫所
 助各當七畝、而不復稅其私田、一說、井田始於黃
 帝、經界如井字、後世因號為井田云、周時方里而
 井、井九百畝、一夫一婦受私田百畝、以公田十畝
 徹十外之一、是為八百八十畝、餘二十畝以為廬舍、
 八家分之、各受二畝半、皆在田廬、而受邑宅一亦

如_レ之、通為_二五畝之宅、春夏居廬、秋冬居宅、其耕也通_レ力収也、計畝必遺_二司稼、巡野觀稼_一、疑當、以_二年上下_一定_二之斂法、而其貢輕_レ於_レ什一矣、孟子所謂夏后氏五十而貢、殷人七十而助、周人百畝而徹、其實皆什一云、雖_レ法少異、言_レ其所_レ通率_レ不_レ離_レ什一也、其三代授_レ田不_レ同、則以下_レ禹平_二水土、沿_レ歷商周、而田_一、侵關故也、一說、歷_レ世民漸稀、故受_レ田隨多、或云、文稍勝_レ質、政亦急煩、遂至_二盡稅、此等說皆應_レ有_レ據焉、但其易_レ代疆理更制、先儒既疑、煩擾動_レ衆、況如_二我藩_一山林陵麓尖斜折方、縱令_二禹來制_二之井田、安得_レ能用_二溝洫法_一齊整分畫_上乎、惟潤_二澤之_一、則莫_レ如_レ師_二其意_一而逐_レ地勢、絕_レ長補_レ短計_レ約數畝、以正_レ其分授_レ、貢助兼行合_二於人情_一得_レ簡易之活法_上而已矣、蓋孟子時、井田之法既廢矣、暴君去籍、然猶未_レ敢易_二其名_一也、至_二秦商鞅、鑿_レ開阡陌、始蕩然盡泯_二其迹_一、而任_レ民所_レ耕、不_レ計_二多少、隨_レ所_レ估田_一以制_レ之賦、然而六國之時、有_レ關_二阡陌_一者、則或以_二六尺四寸_一為_レ步、或以_二六尺_一為_レ步、或依_レ舊八尺為_レ步、各國異_レ制、秦孝公當_二周顯王_一三十時、自革_二田制_一、以_二二百四十步_一為_レ畝、

後漢趙氏說於_二是乎至_二始皇并_二天下_一、乃遂_一一概以_二六尺_一為_レ步、漢魏晉皆因_レ之、故漢志六尺為_レ步、百步為_レ畝、或作畝、百畝為_レ夫云之類是也、夫即頃、而因_二一夫一婦佃田_一得_二其名_一云、至_二唐變_レ制、則六典曰、凡天下之田五尺為_レ步、金謂之營造尺、二百有四十步、即其長也、關一為_レ畝、百畝為_レ頃、金清因之、但清方一弓為_レ步、當_レ此方曲尺伍尺伍寸、故今清壹畝當_レ此方伍畝柒分貳釐柒毫、而畝步名猶因_二古制_一、故其地實異_レ廣狹、則宋程頤曰、古者百畝止當_二今之四十畝_一、今之百畝當_二古之二百五十畝_一、趙氏曰、古以_二百步_一為_レ畝、今以_二二百四十步_一為_レ畝、古百畝當_二今之四十一畝_一、金仁山亦云、古所謂畝、即今田疇、闊一步長百步、以_レ尺計則其廣六尺長六百尺、以_二今大步_一計之、則古百畝當_二今四十一畝_一、而古者二畝半當_二今一畝十步_一云、據_レ此、程說猶似_レ未_レ駁、唐後田制宋及金清亦世因_レ之、如_レ我本邦、則因_二唐尺_一、別始_二田制_一、語在_二班田篇_一、而今曲尺即唐大尺者云、而所謂周尺八校_二之唐尺_一、當_二柒寸貳分弱_一、而壹畝當_二今伍畝拾陸步有奇_一、一頃當_二今伍町伍段伍畝拾陸步_一、如其校考、詳見_二度量考_一、可_レ併觀_レ焉、

授田第二

周制授田、凡上田夫百畝、中田夫二百畝、下田夫三百畝、班史從之、土有肥磽高低之善惡、歲耕種者為不易上田、不易謂一歲一墾、休一歲者為二易中田、一易謂二歲一墾、休二歲者為三再易下田、再易謂三歲一墾、肥磽不得獨樂、磽墾不得獨苦、三歲更耕之、換易其處、而其農民、則上地家八人、中地家六人、下地家五人、孟子所謂、上農夫食九人、其次食八人、其次食七人、則其言民務農之勤怠云、戶口受田、雖均百畝、然其家子第之衆、或食不足、而力有餘、是為餘夫、其餘夫亦以口受田、各二十五畝、其家既受田百畝、而又予百畝、則彼力有所不逮矣、故其田四分農夫之一云、上地夫一廛田百畝、菜五十畝、禮言上地田百畝、菜半之、同此、中地夫一廛田百畝、菜百畝、禮言中地二十五畝、亦言菜亦二十五畝、下地夫一廛田百畝、菜三百畝、亦言二十五畝、竝餘夫受之亦如此、不但餘夫、土工商家受田五口、乃當農夫一人、此謂平土、可以為法者也、若山林・藪澤・原陸・淳鹵不生五穀之地、各以肥磽多少為差、或近城市田地膏腴、重於郊外、而各損益有賦有稅、稅謂公田什一及工・商・衡虞

之入也、賦謂計口發財或財賦也、工有技巧之作、商有行販之利、衡虞取山澤之財產、則小墾殖亦取其稅也、而有君子焉、有野人焉、無君子莫治野人、無野人莫養君子、分田以給野人、制祿以待君子、故其賦供車馬兵甲士徒之役、充實府庫賜予之用、稅給郊社宗廟百神之祀、天子奉養、百官之祿食、庶事之費、民年二十受田、六十歸田、七十以上上所養也、十歲以下上所長也、十一以上所強也、強謂勸之令習事也、得時種穀、以雜五種、種即五穀、以備災害、中不得有樹以妨五穀、五穀朱註謂稻・黍・稷・麥・菽、吳氏程曰、是本趙說、或云、黍・稷・麻・麥・豆、金仁山曰、朱註五穀用周禮九穀之數、而五之也、舊說黍・稷・稻・粱・秫、夫四穀、皆有秫、安得獨出一條、然古人重黍、次亦重粱、梁今粟也、當曰黍・稷・稻・粱・麥、又事類云、以三穀言為稻・粱・菽、以五穀言為麻・黍・稷・麥、豆、以六穀言為稻・黍・稷・粱・麥、瓜、以九穀言為稷・秫・黍・稻・麻・大小豆・大小麥、以百穀言包舉三穀各二十種為六十、蔬果之實助種曰稼、斂曰穡、力耕數耘、收穫如寇盜之至、環廬樹桑、菜茹有畦、瓜瓠・果蓏殖於疆場、雞豚・狗彘毋失其時、女修蠶織、則五十可以衣帛、七十可以食肉、三年耕則餘二年之蓄、農事勤怠三年可觀、故三載考績、九年耕餘三年之

食、進業曰登、故三考黜陟再登曰平、餘三六年食、三登曰大平、二十七載餘九年食、故以三十年之通量入以為出、雖有旱乾水溢民無菜色、至德流洽、在野曰廬、在邑曰宅、五家為隣、或比五隣為閭、或里四閭為族、五族為黨、五黨為州、五州為鄉、鄉萬二千五百戶也、於里有序、於鄉有庠、而夏曰校、殷曰序、周曰庠、雖各異名皆為鄉學、使致仕大夫有德行者教明倫於其農隙、而國學則三代共之、其所以明人倫者上下皆同、然後所謂人倫明於上、小民親於下、禮樂之化、於是乎可觀成焉、苟從政者、不可不講究而為法則焉矣、

班田第三

原夫我本邦田畝制亦多沿革矣、推古帝十六年、聖德太子既通于學、遣高向漢人玄理或作高向博士、黑麻呂亦此人、新漢人僧旻等八人、往學于隨、附時隨亡唐興、旻等在唐二十餘年、暨

舒明帝遣三田相等使於唐、唐太宗遣高表仁送歸之上、旻等還自唐學、玄理等猶留三十餘年、而歸于帝

之十二年、皆以博物聞、暨孝德帝立、乃以旻與玄理為國博士、大化元年八月、帝拜東國國司、仍詔之曰、方今始將修萬國、汝等之任、皆作戶籍、及校田畝、九月丙寅、遣使諸國治兵、又錄民口員、仍詔曰、諸國造等恣佔山野、兼併數萬頃田、殆掠盡水陸、進調賦亦先自收斂、害民傷財莫大焉、爾後禁之、百姓大悅、二年正月甲子朔、詔罷諸屯倉公穀正、及諸臣田莊、始脩京師置畿內國司、郡司等、郡以四十里為大郡、三十里以下四里以上為中郡、三里為小郡、而選於衆、各置之大領、小領、主政、主帳、始作戶籍、計帳、班田收授之法、凡五十戶為里、每里置長一人、掌按檢戶口課殖農桑、禁察非違、ウナツカハル催驅賦役、凡田長三十步廣十二步為段、十段為町云云、又是年詔募域法曰、王以上墓、其內長九尺闊五尺、按此等尺應必大尺也、蓋帝之制田也、皆當時僧旻及玄理等據還自唐學而居博士、則彼等應必建白所學唐制、以效別定段町云者也、藤原不比焉、而其度地、五尺為步、三百步為里、見淡海公等令、大寶元年勅撰、又大方六尺為步見三代格、拾芥抄又和銅

六年制二月壬子、始制度量、調庸、義倉等類五條事、語具別格云是也。及延喜式等竝六尺為步、唐所謂大尺與格所謂壹尺皆當今曲尺、而令所謂尺當今曲尺壹尺貳寸、見白尾氏說、稽之和爾雅、其曲尺李唐尺、而今匠家所用以鐵制之故曰金尺云、據此、大尺所以其云大蓋應對周尺小寸以言之也、其令所謂尺當今曲尺壹尺貳寸云、今日吳服尺者應必此也、又今有海鱈尺以海鱈鱗作之、故得名云。更增五分、以是觀之、唐為大尺亦今知不大、又式所謂度量權衡者、官私用大云、亦蓋此大尺、而即今曲尺也、度制略考所謂格六尺步、似廣一尺、由每尺蹙各以三寸、於其地則雖五尺步、未初有所損益云、其說得之、又稽制度通則曰、今謂其步尺六曰田舍間、量石垣等必因之、又六尺三寸為步、今謂之京間、而量田畝多因之、又六尺五寸為步、里程、宅地皆因之、步亦有異、我藩所謂壹里定參拾陸町、而置之塚（德川家光）始自寬永十年、其年六月、大猷廟遣小出對馬守（吉親）野瀬小十郎（能勢賴盛）、城織部（信茂）來巡封內、故定里程、事見大口士人二宮伊豫筆錄、但量遠近、皆揣自府城樓門橋口云、後五十三年塚

木多朽、於是貞享二年九月（綱貫）大玄公命禰寢清雄、復修樹之、時量遠近、始自札辻（在下）町見清雄記、因言里程聊書于此、又曰、周尺當今曲尺六寸八分一絲、而八尺為步、求之吾坪、六尺、當今伍尺肆寸捌釐、度考當今五尺柒寸伍分強云、佗可準知、而拾步當玖坪肆合捌勺、而百步為畝、畝當今參町肆段捌畝、而壹頃當今伍町柒段貳畝強、其所量、步皆依六尺三寸云、稽之源順著和名抄、當今陸町陸段貳百拾肆步云、其去今據順卒於永觀元年、則於其步應以六尺言之也、古者頃字、則仁德紀訓曰志呂（シロ）、後易代字、所謂一代當柒坪壹尺貳寸、推至（トシロ）十代為二畝、至五十代為一段、則三宿六拾坪、本居氏曰、代為物實、見崇神紀、今所謂定代昉于此云、今季安按建久八年日向圖田町、載寺領田代二百三十八町、杜領田代二千百六町、或國富莊田代、或島津莊田代云云、如此田代似泛指田畝言之、蓋其云代、即易義而本出於計、中下田有一易再易之入、故未悉言物實、泛為計田詞亦可概知也、又按田賦集註（後）、武用辨略等、

聖武帝時、行基奉_レ勅、定_二田畝尺六尺為_レ步、三十六

步為_レ畝、十步為_レ段、段即三百六十步、而縱六十間橫

六間、十段為_レ町、町則三千六百步、方六十間云、所_レ

謂段云蓋應_レ本_レ於路程所_レ謂三百六十步為_二一里_一之數_上

也、又荒政要覽所_レ謂一町_{作畝}恐誤、分為_二四角_一、每_レ角六十

步云、應_レ亦是_二也、稽_レ之續紀、前於

帝之即位二十有二年、

元明帝和銅六年四月戊申、頒_二下新格並權衡度量於天下

諸國云、而其年當_二行基四十四歲時_一、其云_レ奉_レ勅者

應_レ必誤_二是事_一也、而其六尺步、制度通所_レ謂石垣尺、

而今曰_二田舍間者此也_一、故_二本邦之田畝、不_レ隨_レ世考、

必有_二不_レ揣_レ本之誤_一也、談_二古田者不_レ可_レ不_レ察焉、

租稅第四

本邦上古之租什一而稅見_二

桓武紀、然未_レ觀_レ據、蓋引_二孟子述_レ夏殷周之法_一而已、

非_レ謂_二本邦亦即有_レ其制_一如_レ彼三代也、按、本邦租

則

孝德帝大化二年_{正月}朔日、詔始_二班田收授之法_一、凡田長三十

步廣十二步為_レ段、十段為_レ町、段租稻二束二把、町租

稻二十二束、後歷_二八年_{正月}白雉三年_{己未}班田已訖、段租_二

稻一束半、_{得米七升五合}、町租_二稻十五束_{五升云}、按_二義解等_一、

凡一手三握為_二一把_一、十二把為_二一束_一、而束稻則今概一

斗也、春得_二五升_一、其米即糙非_レ精白云、_{本田親孚所著大}

計稻猶曰_二幾束幾把_一、大抵壹畝得_二稻三束_一、所謂束凡所_レ獲稻、偏手

三握為_レ把、合_二其把三_一以為_二一把_一、訓_二之_一多婆利_二混_レ其八把_一為_二

一束、而一束稻重_二二十五斤_一、百六十把得_二米四升_一、或值_二豐年_一得_二六七升_一、

其訓_レ束曰_二都加_一、訓_レ把曰_二多婆利_一、則與_二孝德記_一到_二于今_一尚同_二其訓_一

云、季安謂_二上古南島嶽_一、_{大宰府_實赤木等_{見_レ延喜式_一}、而續紀所謂}

庵美、即大島云、其_二實_一、_{見_レ文武紀等_一}、本名_二天見_一、其書_二庵美_一

應_レ語轉也、據_二此_一、其云_二多婆利_一、則我邦古訓而蓋_二手量_一、約納言也、

所以_レ其云_レ爾、不_レ以_二升量_一、而以_二手量_一、故有_二此訓_一、可_レ以知焉、

今本藩民俗尚量_二田畝_一、多曰_二幾束_一、亦以_二所_レ獲稻_一出_二凡段地_一、上

田獲_レ稻五十束、町獲_二五百束_一、其春米二十五石、而二

十二束所_レ獲米二石一斗也、蓋當時倣_二唐_一、新立_二租法_一、

民猶以為_レ重、不_レ堪_レ輸_レ之、故未_二二十年_一又輕_二其斂_一、

定_二段租_一二一束半_一、町租_二稻十五束_一、勢亦可_レ觀焉、其十

五束所_レ獲米七斗五升、則輕_二於三十三分之二_一矣、謂_二

之令前租法_一、三代格所_レ謂、田五十代租_二稻一束五把_一

得_レ米三升、此大升云、亦與_二此同_一、_{白尾氏云_一、大升受_二三}

五合、其三升、後五十年為_二大寶元年_一、_{升_一減_二大升受_二二升}

文武帝乃勅淡海公藤原氏不比等新制田令、蓋當是時也、公

等念民漸嚮化、欲復修大化之制、乃定段租稻

二束二把町租稻二十二束、得米壹石壹斗、而二年二月、始頒

于天下、

孝德帝所徵唐制大化三年、而益白雉制段柴升伍合、町柴斗伍升、者應

參斗五升也、後歷五年慶雲三年丙辰九月、

文武帝遂遣使七道、始定田租法、町十五束及點役丁

云、按新令蓋不行、故應復白雉舊也、而猶因年

民或苦輸、天平勝寶五年十二月己卯西國稼損、特免田租、

延曆二十五年十二月乙未日向・大隅・薩摩等水旱・疾疫

頻年相仍、百姓凋亡、田園荒廢、特免一年田租、弘

仁三年六月辛卯薩摩國蝗、免逋負稻五千束、四年六月甲甲大

隅・薩摩蝗、免未納稅、六年五月甲甲薩摩國蝗、免租

稅、十年十一月丁丑薩摩國蝗、免田租、十二月、弘仁格卷十

式卷四十成、其所定租、則段別地子、上田十束、得米五斗、

中田八束、得米四斗、下田六束、得米三斗、下下田三束、得米一斗、而

其上田租十束五斗校之白雉租七升、則六倍強矣、承和

三年閏五月戊寅薩摩國飢、特賑給之、五年九月己巳定西國地

子交易法、綿一屯直稻八束、得米四斗、十年九月甲寅薩摩國等飢、

賑給之、十四年七月丁卯、減省日向國俘囚祿料稻十萬七

千六百束、以浮囚多死也、爾後無考、凡八十年至

延長五年十二月廿六日延喜式成卷五十、則其主稅曰、凡公田一

町所穫稻、上田五百束、得米一十五石、中田四百束、得米一十石、下

田三百束、得米一十石、下下田百五十束、得米七石五斗、而其地子各依田

品、令輸五分之二、若惣計國內所輸不滿十分

之九者、勘出令填、但不堪佃田聽除十分之二、

而其租則段別租穀一斗五升、町別一石五斗、皆令營

人輸之、按、五分一於上田二十五斛、則知其租石

輸貳斗通為伍斛、而莫亦有與弘仁租所增減

也、故校之白雉租町別七斗五升、則亦知強於六倍矣、如

不堪佃田、蓋今分下田之類也、今聞縣官法曰、段

別上田稻五十束、為粳伍石、春米貳石伍斗、中田稻

四十束、米而貳斛、於其中地頭收一民取三云、亦

蓋莫不レ法焉、但上方上田段別收柴斗伍升、則當白

雉町租柴斗伍升、其稍強者至三十倍矣、他詳後篇、可

併觀焉已、

按二書紀及姓氏錄等二曰、

應神帝十四年、百濟貢二縫衣女真毛津等、是歲、秦始皇

後曰二物智王・弓月王紀載弓月君、而無物智王者、亦自二百濟一來、

而有レ上レ請曰、臣欲二率己國人百廿七縣狍姓者紀無七及狍

字二歸中化 本邦、既上レ道為二新羅所レ拒、而留二韓國、

帝乃遣二葛城襲津彦、迎召二其徒、亦往留久矣、十六年

八月、復遣二平郡木菟等二將二水兵、往伐二新羅、為披二其

道、蓋弓月亦屬還、紀無此事、見姓氏錄既而新羅愕二服其罪、乃

木菟・襲津等以二弓月之徒二還二自二新羅、於レ是弓月等

皆歸二化 本邦、獻二金銀玉帛諸寶物等、 帝嘉レ之、

令二皆安置二焉、三十七年二月戊午、 帝遣二使主等二如レ吳

求二縫工女、吳王乃遣二四工女、曰兄媛、曰弟媛、曰吳

織、曰穴織、四十一年二月三日、

帝崩二于大隅宮、是月、使主等自二吳還二筑紫、乃留二兄媛、

奉二胸形神於筑紫、率二他三女二及二至二津國、 帝既崩、

乃獻二之

仁德帝、 帝十七年、新羅不レ貢、遣二使問之、乃謝二罪

貢二調絹一千四百六十疋、先二是弓月君生二男四人、曰

眞徳王、曰普洞王、古記作浦東王、曰雲師王、曰武良王、蓋

眞徳・普洞等以二其徒及吳工女二修二蠶織業、於レ是乎

帝嘉二其功、賜二眞徳・普洞等各姓、皆曰二波陞、則奉

字之訓也、且使二普洞等為二秦造二委二任其事、而普洞王

男曰二秦公酒、終二 帝之世迄二

雄略帝時、其間歷二載殆五六十、秦造所レ率諸秦氏、既多

為二臣連等二被二驅使而分二散諸州不レ隸二秦造者、由

是酒公深以為レ憂、仕レ帝承レ寵、亦襲二父職、因曰二

秦造酒、故酒奏レ帝、請二奉レ勅巡檢集レ之、 帝

乃遣二小子部雷、率二大隅・阿多隼人等二搜括鳩集焉、

遂得二秦氏九十二部一萬八千六百七人、悉賜二酒公、率二

其秦族二以二養レ蠶織二絹為二產業、既而迨二

帝之十五年、酒公乃率二百八十種勝部、收二其庸調絹織、

盛レ匪詣レ闕以貢二進之、庭實充積如レ丘如レ山、 帝

褒二顯之、特賜二寵號紀云賜姓、曰二禹都萬佐、紀一云禹豆母

之、是則盈積有二利益之義、而亦大秦之訓也、乃役二諸

秦氏、構二八丈大藏於其宮側、納二其貢物、故名二其地

曰二長谷朝倉宮、時始置二官員、令二以掌レ之、所謂大

藏宮省、自二斯時一始、秦氏皆出自一祖、至其子孫、或異居

所謂數腹、言二其族類繁二衍乎諸州也、今鬼界等人謂二其親族二曰我

併觀也。既而十六年七月、帝詔宜桑國縣、令益殖

桑、因分遷秦氏、使獻庸調、事見書紀、則延喜式

所載大隅國桑原郡、及和名鈔載肝屬郡桑原鄉等、亦

蓋和銅建國後、為就當時秦氏等所殖桑養蠶之地、

所以建郡鄉者、可併証焉、且其祠

應神帝於桑原郡、尊崇其廟曰八幡宮、亦秦氏等本有

恩乎其歸化于帝時、遂以開機業於天下焉、則彼

等感恩、祠號八幡、秦幡同訓、皆曰波陁、八若干

意、且呼其地、曰大隅宮內書記云崩于大隅宮之類、皆似

有謂、而其子孫則天平廿年、賜居京畿者姓秦忌寸、

而秦忌寸養守為日向守、大隅秦忌寸三行為隼人正、

竝見續紀、後踰三百年、尚有曰大秦元平者、康

和二年、以貢節功奉

應緣秦弓月所教以傳言之也、既而終

雄略帝之世、迄

孝德帝詔殖農桑之年、大抵百七十年、諸國調庸莫詳

其制、蓋其濫觴、起乎酒與雷率大隅、阿多隼人等

搜集秦族、以開蠶織業於我桑原等上可概知焉、據

此、上古蠶織之道專廣於西藩、後稍廢絕、故慶長始

中村常和久寓於京、新在家學業織絹以鬻公服、諺有

之燭下却暗之意也、絲是閑原亂後薩敗散士多匿織

屋者、迨伊勢貞昌如京、召其子作左衛門、來建

織屋於藩府、給之廩米貳拾柒斛、為十五口糧、令以

織絹、別賜伍拾石賞常和忠、寬永十六年、徧收

廣二尺半、別收三戸別之調、一戸則布一丈二尺、凡調

副物鹽贄亦隨地所出、而官長則中馬百戸輪一疋、

細馬二百戸輪一疋、前此仕丁三十戸出一人、至是

五十戸出一人、以充諸司、與辨其糧、一戸庸布一

丈二尺、庸米五斗、又郡少領以上、則貢其女若姊妹

有姿容者為采女、隨之一丁二女、亦以百戸與

辨采女一人糧、文武帝元年九月、令日向國獻朱

沙、大寶二年四月、令筑紫七國簡點采女、兵衛貢之、

和銅三年正月、日向國貢采女、薩摩國貢舍人、

六年、二月壬子、或作七年、恐誤、制絹繩六丈為疋、調布四丈二尺為

端、庸布二丈八尺為端、商布二丈五尺為端、見白尾氏著書、

又七年二月庚寅、令以商布二丈六尺為段、不得用常、

辛卯制、諸國輸調者調庸以外宜、每人儲絲一斤、綿

二斤、布六端、以資產業、教足衣食也、辛卯制、

年十五以上六十五以下者令輪調焉、養老二年六月丁卯、

令大宰管國、輪庸如諸國、先是減庸、至是復

舊、七年五月辛巳、大隅・薩摩隼人等朝貢、天平元年六月庚辰

薩摩隼人等貢調物、七年七月己卯、大隅・薩摩隼人入朝

貢調物、十八年十月癸丑日向風雨、養蠶損傷、特免調庸、

天平勝寶元八月壬午、大隅・薩摩隼人貢御調、天平神護

二年六月丁亥、日向・大隅・薩摩大風、桑麻損盡、詔免

柵戸調庸、寶龜六年十一月丁酉、日向・薩摩風雨、桑麻損

盡、免三年調庸、弘仁六年五月甲申薩摩國蝗、免調庸稅

租、十一年弘仁格式成、後剩百載、延喜式成、於其

諸國輸調、則中絲國絹繩而面以下、各長六丈廣一尺九

寸、絹長四丈五尺六寸廣二尺五寸、竝四丁成疋、長

絹長七尺五寸廣壹尺九寸、長幡部絕長六丈廣一尺九寸、

竝五丁成疋、綿紬三丁成疋、長四丈五寸廣一尺九寸、

但西國長三丈九尺、質布長四丈廣二尺、望陞質布長八

丈廣一尺八寸、竝四丁成端、細質布長六丈五尺廣一

尺九寸、小堅質布長八丈廣二尺、薄質布長八丈廣一尺

九寸、望陞布長四丈二尺廣二尺八寸、廣布竝三丁成

端、細布二丁成端、倭文調布竝三丁成端、各長四丈

二尺廣二尺四寸、大隅・薩摩兩國調布四丁成端、又

輪庸則薩摩國二丁席三枚、一丁紙七十五張、自餘雜

物準此、輪二分調之一云、按、大化二年制、所謂絹四町

四畝者明矣、此所謂四丁成疋之丁、據賦役令檢其損益、調丁有

益而庸丁有損者調丁一人以補庸丁二人、則似言調丁四人成

而日向國則去_レ府行程上十一日下六日、調絲十八絢自餘輸_二綿布・薄鯨・堅魚、庸輸_二綿布・薄鯨、中男作物斐紙・麻・熟麻_二・茜・胡麻子、大隅國則行程上十二日下六日、調綿布、庸中男作物紙、薩摩國則行程上十一日下六日、調鹽三斛三斗自餘輸_二綿布、庸綿紙席中男作物紙、凡中男一人輸作物紙四十張、斐紙・麻三斤、熟尾_二・茜各二斤、薄鯨一斤、堅魚西國_二二斤餘國一斤、又其價法、則太宰管國絹一疋、直稻八十束、春米四石、絲一絢十束、春米五斗、綿一屯六束、春米三斗、調布一端四十束、春米五斗、庸布一段卅束_{米一石}、商布一段五束_{二斗}、自_三庸布一石、五斗上為_二位祿價、如其交易_二準_三當時估_二云、又其運漕功則一駄率絹七十疋、綿五十疋、絲三百絢、綿三百屯、調布卅端、庸布卅端、商布五十段、陸路駄別稻十五束_{七斗}、海路自_二博多津_二漕_二難波津、船賃米石別五束_{五斗}、挾抄六十束石、水手四十束石、自_二與_三等津_二運_レ京、車賃石別米五升、但挾抄一人・水手二人漕米五十石云、又隼人調布則除_二府家三年料、所餘宜_三附_三貢綿使_二進_レ之、又別貢_二雜物、則日向紫草八百斤、大隅一千八百斤、青砥二百顆、南島亦進_二赤木、其數隨_レ得、其運送

係夫各給_二路糧、又進_二典藥寮、則木蘭皮百五十斤、土瓜石膏各十斤、龍骨六十斤、阜莢四十斤、代赫禹餘糧各一斗、鬼白四升、狸骨二具、檳榔子人參廿斤、石斛十斤、附_二別貢使_二送_レ之、見_二太宰府、又交_二易雜物、則絹四千疋、履料牛皮廿四張、狸皮十張、銀三百兩、金漆五缶、朱沙一千兩、茜二千斤、紫草五千六百斤、猪膏二石、雜油卅石、檳榔馬糞六十領、同螻糞廿領、蘭帖筭百卅蓋、黑漆鞍十具、鐵鎧廿隻、交易正稅_二進_レ之、其運功食竝用_二正稅、亦見_二太宰府、皆無_二國名、然據_二三州時隸_レ之、應_レ或_レ所_レ出也、姑載_レ焉、凡三國田租調庸及別貢副物、諸所_二課進_レ者、多如此類也、而太宰管國、皆其國郡司竝領_二送_レ之太宰府、其運腳功食、均出_二其戶、而其出納帳、於_レ府雜掌勘_レ之、附_二正稅帳使_二申_二民部省、如其調絲、府只收_二五百絢_二以充_二儲料、餘皆每年限_二七月晦、附_二貢綿使_二進_二大藏省、其他送輸則起_二於八月、限_二十二月、若遭_二風雨_二桑麻損盡不_レ堪_レ輸_レ調者、特免_二其調、若桑漆帳有_レ闕者、令_二率_二戶數_二殖填_レ之、是古調庸之大略也、

丁役第七

天平十九年戊寅制、凡封戸每二戸以正丁五六人・中男一人為率、而郷別計口二百八十中男五十為定數、其田租每二戸以四十束為限、見續紀、又按延喜式、凡正丁歲役十日、其不役者一日為布二尺六寸、十日收二丈六尺、謂之庸、不但限布、隨郷土所出、又正丁外須留役者滿三十日、租調俱免役日不滿、混合租調ヘキナシ作三十分、以其一分計免役日、通之正役不得過四十日、次丁歲役五日、其庸收布一丈三寸、若留役者滿十五日、租調俱免如正丁例、凡人生五男成三正丁、免父課役、詳見令式、後三百年為鎌倉代、弘長三年月六、賦役則段別百文、五町別官駄壹疋・夫二人、如畑則以三町為準田一町、後移足利世、建武元年月十、莊園郷保地頭以下領田十町出仕丁一人、歲役二日云、今藩丁役詳見下篇、

馬牧第八

日向馬見於書紀、薩摩馬出于姓氏錄、曰、允恭帝

時、遣湯坐連来于薩摩、平治隼人、其復奏也、獻

馬一疋、額毛如町、帝喜、乃賜姓額田部云、大

隅馬出于三代實錄、曰、貞觀二年十月八日甲申、廢大隅國

吉多・野神（衍九）二牧、緣馬多蕃息害百姓作業也、又

按延喜式、日向則置馬牛牧、所謂野波野馬牧・提

野馬牧・都濃野馬牧・野波野牛牧・長野牛牧・三原野

牛牧、而馬五六歲、牛四五歲、各備梳刷剉、送太宰

府、帳進馬寮、凡大祓馬以正稅買、不得價過日向

國以牧馬充之、後降文治、我得佛公之受封也、

遣本田靜觀、先来觀國、靜觀乃建馬牧於瀨崎野、

在山而於其堺、瀨浦・賀志浦・黒多尾・脇本・宇波

崎・鹽屋○尾島等、雖地名異皆屬牧內、而至

道鑑公、世狩于黒多尾、事見公書、十二月十八日、又貞

治七年三月二日、定山公賜執印友雄書、令領寄田牧、

四月六日、（氏久）齡岳公亦賜友雄書、言其事、公嘗乘

馬於瀨崎同、及佐野・高原並庄內・魔島吉野大瀨・顯娃小

牧嶽・市来大峯等、見聖榮記、蓋皆馬牧也、寛正六

年、大岳公以弓馬法悉授川上道安、使（立久）之屢莅閩

馬於市来、文明初年、節山公賜道安高江寄田等、

※2

※1

馬牧亦應係焉、永正中伊集院有春山野、天文中加世

※3

田有三野間野、又天正八年、四月十四日卯尅放、始置廻野牧、十四年八月十日、創牧神、歷三狼害也、又曾於郡有春山野、清水有平野、鹿屋有高牧野、至幸侃時移之

廻云、又伊作有伊作野、皆古之馬牧、見慶長前云、今上使對條、則吉野、比志島野、東郷笠山野、顯娃野

及唐松野、加世田野間野、下飯野、上飯市山野、出水瀨崎野、長島野、高江寄田野、市來野、伊作野、是為

薩牧、蒲生青色野、曾於郡春山野、福山野、鹿屋高牧

野、末吉野、佐多野、是為隅牧、皆馬牧、而無牛牧

〔七月、貞昌、久元承旨、令於國移福山獸放于顯娃野〕

焉、寛永十二年二月、令於封内一點檢牛馬始給之札、

※1 頭注

〔慶長四年、(島津)忠長、忠兄承、義弘公旨、致桂忠詮、上井里兼書

訪、督馬牧、三月十四日忠詮報曰、瀨崎野馬三十四匹、其餘出水、

阿久根、網津、長崎等牧亦皆少息、召三階堂傳右衛門、野添

善兵衛令以檢之

※2 頭注

〔天正四年丙子四月、近衛前久公之客于覺府也、(義久)貫明公閱

馬備觀、所謂馬追也

※3 頭注

〔慶長十二年閏四月、唐津侯正成(寺澤志)、五島侯玄雅(五島)來聘

于鹿兒島、脩朝鮮云舊好、(見史說及新納忠元青等、而不言地應吉野也、時五島來隨蹤為觀、士爾此云)公

為閩馬引、兩侯往而觀焉、元和四月十一日、閩福山馬凡駒百

八十七疋、而美大優於例年、此年春山駒二十三

〔旧記雜錄後編四〕一五八六号文書二関連スルカ

〔此篇者上井日記等見合可再考也〕

10

國郡第九

古者薩摩・大隅・日向皆係熊襲國、

景行帝還自討熊襲、十七年三月辛子湯縣、望三日之

出於東方、乃命其國始日向、時薩摩・大隅等尚

多隸之、或仍舊屬熊襲亦應在焉、

成務帝五年(秋)九、始令諸國各分國縣、循其山河一定

邑里、隨其阡陌、於是置造長於國郡、稻置於縣邑、

按、薩摩・大隅等分於郡縣應在此時、然猶未必

定其名也、

應神帝時、以豐國別命之孫老男為日向國造、初

景行帝在高屋宮、納襲人女為妃、曰御刀媛、生男、

即豐國別皇子、而老男其三世孫云、舊事記、則豐國別

命為日向諸縣君祖云、

孝德帝大化二年^{八月}、發遣國司等巡檢諸國疆各獻

圖狀、為定國縣名也、我藩之名諸郡亦應在此

時焉、凡大郡四十里、中郡三十里以下四里以上、小

郡三里云、見畿内例、

文武帝大寶二年始頒田令、給諸國司鑰、先是別置

稅司主鑰、至是罷之、始給國司、是歲、薩摩・多

鞆逆命、八月發兵討之、遂校戶置吏、按、吏即

國司也、十月、國司建白築柵要嶮以守之、乃許

焉、自時七年、薩摩・多鞆既有國司見于和銅二年、

則割日向國、始置薩摩等、應必在前置吏時也、

元明帝和銅六年^{四月}、割日向國肝圻・贈於大隅・始

羅四郡、始置大隅國、後建桑原郡、語在蠶織篇、

孝謙帝天平勝寶七年^{五月}、建菱刈郡於大隅國、前此為

村、所浪浮者九百三十人、請別建郡家、許之、

淳和帝天長元年^{十月}、停多鞆島隸大隅國、初建一島

管四郡、給多鞆島印^{和銅}、置之島司、年所給準

稻三萬六千餘束、其貢調惟鹿皮一百餘張耳、計其課

口不足一鄉、僻在海中、無憂寇至、故以能滿郡

併馭謨郡、以益救郡併熊毛郡、省為二郡、以隸大隅國、其管八郡、蓋應此時也、

醍醐帝延長五年延喜式成、則載之曰、日向國管白杵・

兒湯・那珂・宮崎・諸縣五郡、大隅國管菱刈・桑原・

贈於大隅・始羅・肝屬・馭謨・熊毛八郡、薩摩國管

出水・高城・薩摩・甌島・日置・伊作・河邊・穎娃・

揖宿・給黎・谿山・鹿島十二郡、竝為中國、列西海

道之遠國、凡郡限千戶、若餘五十戶分隸比郡、地勢

難分滿百戶者應立別郡、但郡里等名竝用二字、

必取嘉名云、而和名鈔載甌島、弘安七年古鐘^{淨光}亦

書甌島竝為二字、據此、鹿島甌之誤、而今書鹿

兒島以作三字亦乖式法、似近世誤、西藩國郡、

延喜以後、具於建久八年圖田帳・建治二年石築賦等、

然既別著、故不贅焉、

11 官員第十

天平十一年^{五月}、令省諸國郡司改定、大郡大領・小領・

主政各一人、主帳二人、中郡大領・小領・主帳各二人、

小郡大領・主政・主帳各一人、多置官員、徒損百姓云、

天平寶字四年^{二月}甲子、大隅・薩摩等司身居邊要、出舉乏

稻、私物難運、故特割太宰管國地子各給、守一萬束

米^五、據七千五百束^{米三百五}、目五千束^{二百五}、史生二千

五百束^{百二十}、資遠^七戊也、^(宝龜)七年正月^申、多大養為檢稅

使於西國、判官・主典各一人、大同二年^{壬申}、國司交

替六歲為限、弘治三年^{戊戌}、禁國司恣改造館舍、先是

儻有一人病死、諱惡不敢居之、輒擅移造、故依天平十

年^{五月}二格有此禁、皆如國圖所載也、靈龜元年^{十月}詔曰、

國家隆泰要在富民、富民之本務從貨食、故男耕耘、女

脩紵織、家有衣食之饒、人生廉恥之心、刑措之化爰興

太平之風致、凡厥吏民豈不勗歟、今諸國百姓未盡產術、

唯趣水澤之種、不知陸田之利、或遭澇旱、更無餘穀、

秋稼若罷、多致饑饉、此乃非唯百姓懈、固由國司不存

教導、宜令百姓兼種麥・禾男夫一人二段、凡粟之為物

支久不敗、於諸穀中最是精好、宜以此狀通告天下、盡

力耕種莫失時候、自餘雜穀任力課之、若有百姓輸粟轉

稻者聽之、必給木綿柴^{若無木綿端}、^{給一匁分五厘}、按、式所

謂織綾料給、織手日米二升・鹽二勺云、當時國司處分

公廩、中國無介、則長官五分、判官三分、主典二分、

史生一分、如員外司各準當員、博士・醫師準史生云、

而郡司不得一郡併任同姓、他姓無人、聽異門任、但大

隅・馭謨・熊毛等不在制限之郡、領民不得任主政・主

帳、其國司・郡司之拜除也、必具狀進大政官奏聞之、

且其四度使雜掌及入京郡司、皆季冬下旬^{大廿八日}、惣

集諸司、預令習禮、而聽朝拜為例、凡太宰及國司巡行

部內、則師^(師力)儻仗十人、貳六人、監以下史生一人、國介

以上三人、據以下二人、史生如前、其食料則官人日米

二升・鹽二勺・酒一升、番上日米二升・鹽二勺・酒八

合、儻從日米一升五合・鹽一勺五撮、如諸使食法、又

日隅薩等學生・醫生、皆集宰府分業教習、太宰試才、

補任博士・醫師、副勘籍狀申省、遷替六年為限、非業

博醫五年為限、受業非業、每年三月朔、移民部省又國

司公廩、以其所餘交易、輕貨送太政官廚、或進主計寮、

調庸亦若或未進準未進、數沒國司・史生等公廩、混合

正稅、則延^(歷)歷九年制設公廩、為填闕員云、此類也、

正公第十一

天平十七年^{十一月}庚寅、諸國公廩^{大國四十萬束、中國二十萬}

東、就中大隅・薩摩各四萬束、日向如制、既見上註、而下國則萬束、
延歷二年十一月庚子禁、諸國司等不得公廩田外更營水田又
不得私貪墾關侵百姓農桑地、恤民凋弊也、九年十一月乙丑

勅設公廩、本為填闕員、爾後中國有未納一萬束以上者、
宜年徵填之、其出舉則曰、日向國正稅公廩各十五萬束、
得米伍仟貳佰伍拾石、國分寺料壹萬束米伍仟、文殊會料壹仟
通計壹萬伍佰石

束米伍仟、修理池溝料貳萬束米仟、救急料肆萬壹仟束米伍
拾石、浮囚料壹仟壹佰壹束伍拾伍石、大隅國正稅捌萬陸仟肆
拾束肆仟參石、公廩捌萬伍仟束肆仟貳佰、國分寺料貳萬束

石、文殊會料壹仟束伍拾石、修理池溝料貳萬束仟、救急
料參萬束仟伍石、薩摩國正稅公廩各捌萬伍仟束肆仟貳佰伍
拾石、國分寺料貳萬束仟、同寺十一面觀世音菩薩燈分

料壹仟伍佰束柒拾伍石、文殊會料壹仟束伍拾石、修理官舍料貳
萬束伍拾石、皆限二月卅日進正稅帳於太宰府、府加覆勘、

限五月卅日申之官、浮囚料置三年儲所餘稻、皆混正稅
云、總計日向國稻參拾柒萬參仟壹束、大隅國稻貳拾
肆萬貳仟肆拾束、薩摩國稻貳拾肆萬貳仟肆拾束、薩摩

國稻貳拾肆萬貳仟伍佰束、而束稻則米伍升也、中田一
町稻見上、則貳拾石也、入其伍分一則四石租也、今推其

租求之今高、則日向國玖萬參仟貳佰柒拾伍石貳斗伍升、
大隅國高六萬伍佰拾石、薩摩國陸萬陸佰貳拾伍石、通
計貳拾壹萬肆仟肆佰拾石貳斗伍升、但其壹斛即米壹斛、
而猶文祿高非加今以糶玖斗、準斛也、其減於文祿、則
田有輪租、有不輪租、口亦有見不輪、見輪、半輪、全
輪之異、所謂神田、寺田、布薩戒本田、放生田、勅旨
田、公廩田、御巫田、采女田、射田、健尼田、學校田、
諸衛射田、左右馬寮田、飼戶田、調急田、勸學田、典
藥寮田、節婦田、易田、職寫戶田、膺力婦女田、惇獨、
田脫力
船瀬功徳田、造船瀬料田並為不輪租田、其位田、職田、
國造田、采女田、膺力婦女田、賜田等未授之間、返遙
授國司、公廩田、沒官田、出家得度田、逃亡除帳口分
田、乘田竝為輪地子田、自餘皆為輪租田、而通計國內、
舉於十分之七為定、若不堪佃者、聽除十分之二、如過
此限申官聽裁、其口分田則給男一人田二段、女減三分
之一、食貨志所謂以口受田、此云、古者割田如此、其
多則三國稅額莫得而考焉、所謂正稅、今以我藩言之、
應必準御倉入、而公廩猶給地、又糟物氏說云、古之民
耕公田者、謂之良家、即今武士也、正稅一町、入一石

一斗、別有徭役、給男一人田各二段、謂之口分田、其得米伍斛、則入一斗一升、而如奴婢耕其私田、不徵之租、則令所謂女減三分之一、是也、而其得米壹石陸柒斗、今百姓、此奴婢類云、又算肥後國稻求之今高、古之田則多於今者大抵三倍云、今季安試就其說以言之、其石別則入肆升肆合、而百斛則入肆石肆斗云、以乘日向米觀其高、則為肆佰貳拾參萬玖仟柒佰捌拾肆石零、大隅高則為貳佰柒拾伍萬肆佰伍拾肆石伍斗零、薩摩高則為貳佰柒拾伍萬陸拾捌斛壹斗零、校之今高、實似倍蓰、然季安按、物子所謂一町為廿五石、則言上田米、而其云納一石一斗、則言正說耳、蓋嘗時租、不但正說、各依田品、輸五分之一式法也、而率上下於中、則凡一町田獲二十石、據其租五分一云、則知石別入貳斗、當肆石租、而薩摩・大隅・日向並列中國、故以中田率、姑算如前、然依物說、以算于此、亦備異聞爾、但古之耕者、多於今矣、則量夫食公廩者、與今食給地者之多少、可以觀焉也、食公廩者詳前篇、

天平十六年^{甲申}七月、詔^三七道諸國、割^三國別正稅四萬束^一米^四、入^三僧尼兩寺各二萬束、每年出舉以^三其息利^一永支^三造^レ寺用^一、天平勝寶八年^{乙酉}遣^三使七道^一、催^三檢諸國所^レ造國分寺丈六佛像、延曆二年^{庚戌}十月、定^三中下國各任^一國師一人、前^レ此增^三師員^一、故有^三此制^一、三年^{辛未}五月、國師遷替六年為^レ限、承和十一年^{壬辰}四月、勅置^三大隅・薩摩等國講讀師^一、如^三博士・醫師例^一、令^レ祈^レ鎮護^也、又國分二寺、各起^三正月八日迄^三二十四日^一轉^三讀最勝王經^一、其布施則三寶絲卅斤、僧尼各繩一疋・綿一屯・布二端、定座沙彌尼各二端、如^三供養^一用^三寺物^一、國廳亦請^三講部內諸寺僧^一、自^三八日迄^三二十四日^一正^レ行^三吉祥悔過法^一、惣計七僧布施則繩七疋・綿七屯・調布十四端、法服繩廿疋・綿十四屯、混合準^レ價、平等布施、其布施供養並用^三正說^一、又金光明寺安居、則三寶布施絲卅斤、講讀師法服各繩五疋、布繩講師繩十疋・綿廿斤・布廿端、讀師繩五疋・綿十斤・布一端、呪願散花唄等僧各繩二疋・綿四斤・布四端、聽衆僧尼各繩一疋・布一端、定座沙彌綿二斤・布二端、講讀師・從沙彌各布二端、其供養講讀師日米各六升四合、^{飯料二升、饘粥四合、雜餅四升}大豆・小豆

各五合、油二合、醬酢・味噌各一合、海藻・滑海藻・
 於期各三兩、大凝菜^{ウレドク}・芥子各一兩、紫菜二合、鹽一合
 二勺、定座沙彌・講讀師・從沙彌各日米一升五合^{飯料}、
 餘物減半並用正說、又春秋仲月各一七日、請部內
 衆僧於金光明寺、轉讀金剛般若經、其布施則三寶綿十
 屯、僧各布一端、如供養用本寺物、若無國分寺及部內
 無物寺者並用正
 說、凡講師年中供養、則日米二升四合、^{四合體粥}、鹽六
 勺、醬酢各六勺、味噌一合、海藻三兩、大凝菜・芥子
 各一兩、從沙彌一口日米一升五合、餘物減半、童子
 一人米一升・鹽一勺、其料用國分寺物、若不足者用
 部內寺物、讀師亦同、又國分僧等自京來、則路次充
 馬、其食僧日米二升・鹽二勺、童子一人日米一升五
 合・鹽一勺五撮、僧尼定數、待玄蕃寮移行布施等、
 亦其隨之、

倉廩第十三

周禮、倉人掌粟人之藏、辨九穀之物、以待邦用、
 若穀不足則止餘法、用有餘則藏之、以待凶而頒
 之、凡國之大事、供道路之穀、積食飲之具、廩人掌

九穀之數、以待國之匪、頒賜稍食、以歲之上下一
 數邦用、以知足否、以詔穀用、以治年之凶豐、凡
 萬民之食食者、人四鬴上也、人三鬴中也、人二鬴下也、
 若食不能人二鬴、則令邦移民就穀、詔王殺邦
 用、凡邦有會同師役之事、則治其糧與其食、大祭
 祀則供其接盛、注云、儲米曰倉、藏米曰廩、而
 有虞氏藏黍盛之米於學宮、故其云庠即米廩、教孝之
 義云、金仁山曰、有穀曰粟、無穀曰米、粟即穀也、
 古人米與穀兼積、米切用而易腐、穀氣全而可久、
 緩急兼儲、後世軍儲獨以米、故久即不可食、本邦
 和銅七年^{壬午}、令儲國造倉率為三等、大受肆仟
 斛、中參仟斛、小貳仟斛、延曆十年^{二月}、令諸國倉
 庫勿置接近、一倉失火合院盡燒、自後倉庫宜去
 十丈^{隨處寬狹以造之}、十四年^{閏七月}、先是諸國
 建郡、本置一處、民居距郡、多棲僻遠、跋涉山
 川、受徵納責、且倉堯隣接、有失火憂、至是革制、
 宜每鄉分置一院、以濟百姓兼避火難、而今年租
 皆納新院、但置倉法、依三十年符、相去十丈、量便
 置之、既而追尋每鄉建正倉院頗乖穩便、九月^{辛亥}

更下_レ令、須_レ彼此所_レ接近郷置_二一院於其中央、如_二遙阻絕處_一、宜_レ量_二地便_一、每_レ郷置_レ之、按、我西藩自_レ古有_レ地名_二某院_一者、如_二伊集院_一・入來院・祇答院之類、今尚稱呼、皆此倉院之遺名、而為_二古倉地_一、猶_二今日_一伊集院組・祇答院組也、別著_二郡郷院說_一、既詳言之、故今不_レ贅焉、

霸制第十四

古之租法、隨_二世_一變降、皆為_レ不足、而重_レ稅斂、競誇_二奢侈_一、田荒民少、列國愈痛矣、保元亂後、迨_レ

鎌府擅執_二霸政_一、令_レ段別皆不_レ論_二莊公_一、輸_二米五升_一以充_二兵糧_一、弘長三年_{六月}、令_レ百姓段別皆出_二錢佰文_一、五町別出_二官駄一疋_一、夫二人、而於_二其畑_一以_二三町_一準_二田一町_一、或_二三分_一年穀、特免_二其二_一之類、雖_レ見_二東鑑_一、不_レ亦常制、如_二其常制_一、無_レ得而考、其後楠氏什分而收_二其二_一、民大悅服、或云、楠公收_二四分_一、民舍_二六分_一、未_レ知_二孰是_一、足利氏則什分而收_二其四_一、令_二蒼生取_二其二_一、且令_レ諸

守護算_二其領土_一之各輸_二軍賦五千分之一_一、後至_二高經之聞_一

霸政、更令_二增徵_二二十分之一_一、由_レ是失_二望於群牧_一云、按_二建武元年_{十月}、諸國莊園郷保地頭以下所領等年貢、則_二二十分正稅以下諸雜物等所_レ出以輸_二其一於御倉_一、如_二貢金及馬_一等、亦隨_二先例_一、皆因_二遠近_一各有_二其期_一、_レ通關後_レ期、宜_レ倍進_レ之、猶後三月、沒給_二佗人_一云、應_レ言之也、於_二我藩_一則自_レ文治中_一得佛公享_二封於薩隅日_一、世襲_二爵守護_一焉、按_二建久八年_{六月}、圖田帳、則日向國總田捌仟陸拾肆町、而所_レ謂_二島津御莊參仟捌佰參拾柒町_一、於_二其中_一貳仟貳拾町為_二一圓莊_一、自餘捌佰拾柒町為_二寄郡_一、薩摩國總田肆仟拾町柒段、而島津莊貳仟伍佰玖拾壹町陸段、於_二其中_一陸佰參拾伍町為_二一圓御領_一、自餘仟玖佰伍拾陸町陸段為_二寄郡_一、大隅國總田參仟拾柒町伍段壹文、於_二其中_一柒佰陸拾町為_二新立莊_一、自餘柒佰拾伍町捌段三丈為_二寄郡_一、三州總計壹萬伍仟玖拾貳町貳段壹文、今率_二延喜式中田_一、以求_二之高_一、為_二參拾萬仟捌佰肆拾石零_一、又乘_二之式租法_一、_二分一而二十_一石則四石、則其租入_二拾貳萬柒佰參拾柒石陸斗零_一、可_レ概知_二焉_一、而公為_レ總_二地頭於島津御莊_一、其總計田則柒仟玖佰肆町肆段參文、於_二其中_一參仟肆佰拾伍町為_二本莊_一、

自餘肆仟肆佰捌拾玖町肆段參丈為寄郡、而日向本庄分肆拾町、薩摩本莊分參拾町、大隅本莊分參拾町、通計百町為地頭用作田、其租則段別壹石貳斗、自餘本庄段別壹斗、又寄郡租段別五升、當時謂之五升米、見弘安九年教達狀三州總計地頭所收租、大抵陸仟柒伍拾玖斛柒斗壹升伍合、別著書篇、詳言御莊來歷事、故不贅焉、

貫高第十五

自北條季迄天正初、有以貫言、曰貫高、曰永高、其貫高則凡田壹坪即壹畝也、植秧一把、凡撒牙秧一畝一升、其所生秧供栽三天工開物、段別上田栽七升苗、下田八升云、其秧一科、或四五本、因土異宜、插之每科疏間可二尺、整直如碁秤、而步栽百科、段栽三萬、因肥磽異云、而其穫之、得粳壹升、推此量之、拾坪拾把得粳壹斗、百坪百把得粳壹石、謂之百文、作目、恐非而仟坪仟把、則得粳拾斛、謂之壹貫、而當時高即以粳計、則當高拾斛、雖田品異、大抵拾貫當高佰斛、佰貫仟斛、仟貫萬斛、他可推知、其云貫高、不固租法、起乎賦坪出兵、故至六仟坪、必出一騎云、今季安按、古者因井田而制軍賦、稅以足食、賦以足兵、有乘馬之法、蓋本乎斯、而當時畝為三十六步、

則六仟坪當壹町壹段壹畝肆步、而其所得粳六拾石、則古之一騎、出於六拾斛、亦可以知也、而今上方斛高、變於貫高、專主厘附、故謂之上方厘取、其云厘附、則段別上田收柒斗伍升、中田收陸斗、下田收伍斗伍升、每品穀斗、謂之五民法、或謂五取、今季安按、其云上田收柒斗伍升、應因白雜租也、而上方田畑、皆應輸米、故十分之、其一分輸大豆、價如石代、見後、三分二出於田入、充御廻米、價視諸國、三分一出於畑入、價如石代、皆易銀輸、斛高法詳見後篇、

永高第十六

所謂永高、關東諸州中古量價、計其租入、多用永樂錢、故得其名、因地肥磽、異價貴賤、曰、田永若干畑永若干此也、故壹貫地、各有廣狹、不自地言、自物言之、是為永別、永盛、按盛、即賦、其壹貫田則入粳伍斛、畑入收價、謂之貫代、而當時租、專令以粳輸、後迨入糙、其田租則減粳半、收米貳斛伍斗、而如畑入、到于今、猶收其價、則以永一貫

易米貳石伍斗、以金輸云之類此也、今關東斛高變、於永高、專主段別、故其遺法遂為流俗、謂之關東段取、其略曰、段別上田收柒斗、中田收陸斗、下田收伍斗、每品殺斗、上畑收貳伍拾文、中畑收貳伍卅文、下畑收貳佰拾文、每品殺廿、然於田畑皆均云、又一說、壹貫當田伍段、求之今高、東國當玖石、西國當捌斛、雖所當異、大抵拾斛、得其中云、亦應言之也、但其云伍段、今以貫代伍斛、所米云伍斗、其價則水一貫也、是校之貫高、則其糶當伍佰為貫代、或石代因國不同云、坪所獲也、而以三六步求之畝數、於其地則當壹段參畝參拾貳步、未必當伍段、而以中田法量其租、則東國玖石當伍斛肆斗、西國捌斛當肆斛捌斗、所謂永高、地有廣狹云、亦應此也、稽延喜式、給馬料錢有以貫言、則曰神祇佰六貫、大副四貫、以神稅給之、或一位官伍十貫、二位官卅貫云之類、蓋其所首乎、於我藩自古爾、未之有聞而已、

京制第十七

我藩租法、蓋變自村高、按、文祿元年八月、豊太

閣遣(藤孝)細川幽齋、來革租法、見朱壘書、然莫知其詳、三年七月、石田三成亦奉旨、使大音新介(一本名本)、

為三總奉行、黑川左近助、高橋新太夫(一本作新兵衛)、坂上源

丞、奧田傳介、猪子彌平次、村山理介(一本作村山)、山田

孫七(孫或)、山羽小左衛門、雨森勘左衛門(或作富森)、村地助

九郎、木内五右衛門為卒口、來於薩摩、中小路傳吾、

多賀吉四郎(吉或)、川崎新六、海老名源介、富田九兵衛

河内州人也、曾於郡地頭、麻藏一柱石、其文如左、

隅州日州堺御檢地時柱石也、川内住人富田九兵衛尉、隅州住人石崎圖

書介、同長友助左衛門、同奧岐勘解由、曾於郡井内原村、文祿三年十一月二十一日、今置之廢誤也、置所舊建處可也、惜哉失境、

井助兵衛(或作助)、駒井勝介、行松四郎太夫、安樂武介、

能勢與右衛門(一本安樂)、亦為卒口、來於大隅、大橋

甚右衛門為奉行、今井傳左衛門、白井三郎衛門、島

田彌五右衛門、田邊宗兵衛(一本作宗)、富森九介(國廣)、島

謂堀川、上林助兵衛、友田新允(一本上林以為三卒口、來國廣云、)

於諸縣郡、徧丈三量之、乃十六日示令曰、此時令書二通

門家、相傳曾祖越中預此文量、故傳至孝右衛門、貞享二年十月、福慶清雄徵藏、史局云、應必是也、

凡長陸拾步、闊伍拾步為壹反、而其量地、除疆溝、以定斗代、

凡段別上地上田壹石陸斗、石柒斗(十一日亦示令、作壹)、中田壹石

肆斗、下田捌斗(壹斛)、上畑壹斛貳斗、中畑壹斛(玖)、下畑

捌斗、或作陸斗、又中地上田壹斛肆斗壹石、中田壹斛貳斗壹石、下田壹石柒斗、上畑壹斛伍斗、中畑捌斗參斗、下畑陸斗、壹斗壹石、又下地上田壹斛貳斗玖斗、中田壹斛陸斗、下田捌斗參斗、上畑捌斗貳斗、中畑陸斗壹斗、下畑肆斗、三斗、又有山畑四斗、下下地上田壹斛、中田捌斗、下田陸斗、上畑柒斗、中畑伍斗、下畑參斗、民宅壹斛、市宅壹斛參斗、宜三以分レ品レ謹レ檢レ定レ之、其他除寺社・土宅・市廛・莊屋等、外應皆巡量、且如山浦川藪之財產桑漆・茶竹等、亦宜三檢注以定レ其稅、必勿レ疾レ民矣、但如竹藪、宜三年レ代三十分一以輸三于官、縱令百本年代三十本レ取三其九本、令三主取一一本、茶勿ニ必稅、但宅若畑量ニ有レ茶地、宜三稅注レ意焉、九月十四日、正薩摩經界、始三自大口、而隅州始三於十月、至四年二月二十九日三州丈完、其與レ事者、皆會計三於加治木町湯淺讚岐守宅、三州諸邑精レ算術、士亦聚與云、隅日堺柱石河内人富田九兵衛尉一人、配隸隅州人、三士之類可推量也、凡總計薩州貳拾捌萬參仟肆佰捌拾捌石、隅州拾柒萬伍仟伍拾柒石、諸縣郡拾貳萬佰捌拾柒石、通計伍拾柒萬捌仟柒佰參拾二參石、而除三其中 太閤領壹萬斛在加治木、三成領陸仟貳

※ 佰石在曾於郡清水、幽齋領參仟石、在肝所レ餘皆係三松齡公義弘封稅、乃六月二十九日、太閤賜三公朱璽書二使三以領レ之、則伍拾伍萬玖仟伍佰參拾參斛、謂三之京竿御朱印高、是年、太閤令三於諸州二定三田租制一曰、天下賦稅宜三三分斛二令三地頭取一其一農夫取二其二レ謹勿レ使レ疾焉、白尾氏等說、收舍反レ之、孰必有レ誤、一說京文祿五年三州稅額陸拾萬伍仟捌佰陸拾參石陸斗參升壹合、而薩州則參拾壹萬伍仟伍石陸斗、就中拾捌萬捌仟伍佰玖拾陸石捌斗伍拾伍合為水田稅、拾貳萬肆仟貳佰玖拾玖石陸升玖合為白田稅、貳仟伍拾捌石陸斗肆升陸合為確黃桑漆山稅、隅州則拾柒萬捌佰參拾參石肆斗伍升壹合、就中玖萬玖仟伍拾伍斛壹斗參升壹合為水田稅、柒萬仟參佰捌拾捌石伍斗玖升柒合為白田稅、參佰捌拾玖石柒斗貳升參合為桑漆山稅、日州諸縣則拾貳萬貳拾肆石伍斗捌升、就中柒萬仟捌拾陸拾玖石玖斗玖升肆合參勺為水田稅、肆萬捌仟伍拾陸石伍斗捌升伍合柒勺為白田稅、州日京制以前、去レ古未レ遠、諸國往往皆為三兵農、雖三武門人二無レ躬耕以勤レ稼穡一、至レ是一變、士專業レ武、不レ暇受レ田、故多離レ土、君子就レ祿、野人勤レ農、各至レ異レ職、遂建三此制二云、則縣官所レ謂村高、始三於文慶間二云亦應レ言レ之也、而今我藩多置三郷土、乃古之遺俗尚存二乎今一矣、則信陽春臺、勢州南泉等所レ謂薩州・土州皆置三兵農二云是也、又川島重貯曰、其云三高壹斛則分米大豆壹斛、而三分之二、其一當三參斗伍升、而入二其二則領主所レ收當三柒斗、農民所レ取當二

參斗伍升、又石田三成所對、亦高壹石租則柴斗代云、

據此、當時壹斛亦壹斛五升、而其增伍升、則知與

今廩米所謂五先法同焉、其云壹斛伍升則以先言

之、其只云壹斛則以起言之、故三分而其一當參

斗伍升云、亦以先言之、今所謂起先法、知其既

首於京制矣、匪但我藩、他邦謂之出目米、於關

東謂之斗立若廻米之類亦是也、詳見本篇、

※(ハリ紙)

「御朱印高者五拾五萬九千石を正税とす、一説之如き者、蓋慶

長四出水五万石 御拜領之後を後年より追書せし誤歟、文祿

五年とするも尤誤ル、但御朱印高ニ五萬石を取合せ候へハ、

六拾万九千餘石ニ相及、只今之御判物高より少シ過上、只今

之員數ニ相成ハ基本考訂可申候事」

19 村高第十八

所謂村高、肇於文祿慶長間、非獨田入、舉村所

稅、故曰村高、而其百斛即柳石云、其賦之則有

石盛法、所謂其法亦上田壹步得柳壹升、而至壹段

則得柳參斛、凡春柳壹升而去其穀、大抵得米伍

合、以量參斛則所得米壹斛伍斗、謂之十五盛、其

他中田十三為高壹石參斗、下田十一為高壹斛壹斗、

每品穀貳斗、而於此盛以益為強、以捐為弱、

凡水陸兩毛、工作商利、若富饒里、頗雖強稅、猶堪

以輸、如不便田燥原礮陵或貧寒村、必察從弱最為

要務云、而雖百斛以柳言則所謂穀祿、而其所入

米或肆拾斛、或參拾斛、不皆一概、又易其佰斛給

米俸、此云御切米也、則為佰俵、而廩人授之亦定參拾伍斛、

我藩切米、昔以斛呼、至正德二年正月九日、令革此制、今所謂四物

授以俵數、故其壹斛為伍俵云、因言切米事亦附註焉、

成、言四三物成、言三三五分物成、五石云即此也、而

其俵則受三四斗、或受三斗伍升、故謂之肆斗俵、或

謂參斗伍升俵、亦自斯始、往古壹俵受伍斗為定法

云、而今關東諸州及出羽村山郡等受參斗柒升、又其

因郡或受肆斗捌升、奥州岩城及作州受參斗參升、

白川福嶋及越前後參遠駿濃丹但等諸州竝受肆斗、甲

州受參斗陸升、尾州及豊前後播攝等受伍斗、各國異

同、未必一概如此類也、

20 今制第十九

凡段別上田稻五拾束為_レ粳、伍斛春去_レ其穀得_レ米貳斛伍斗、中田稻四拾束為_レ粳、四斛春得_レ米貳斛云、本_二於延喜式_一、可_二併知焉_一、通_三上中下_一以率_三其租_一、則於_二伍斛_一民舍_レ二地頭收_レ一、而其_一當壹斛陸斗陸升、以積_三於町_一、知_三其租穀當_一拾陸斛陸斗、以_三石盛_一言、則曰_二三十六_一者是也、又下田為_レ粳參斛、而於_三其中_一民二地頭一、則其一當壹斛、以積_三於町_一、知_三其租穀當_一拾斛、以_三石盛_一言、則曰_二十_一者是也、畑亦準_レ田、賦_レ粳如_レ之、其尤下畑為_レ粳壹斗、以積_三於町_一、知_三當壹斛、以_三石盛_一曰_レ一者也、而古之授_レ田者、上田一段、中田二段、下田三段、通率_三其人_一、則於_三其地_一雖有_レ廣狹、各隨_レ肥磽、概準_三上田_一、不_レ得_レ皆過_レ壹斛陸斗陸升、大抵各自當_三石盛十六_一而已、其或曰_二二十三_一、四十四者不_レ但_レ田入、稅_三上田_一兩毛若_レ工商等利云、自_レ文祿中_一有_レ二村高制_一、皆為_レ穀祿、故高佰斛即收_レ粳佰斛、至_レ仟萬斛亦準_レ之耳、中古以來_レ治_レ輸_レ米、則有_三三分一三分二_一、六兵四兵六民等之法、而田祿名實、雖_レ稍乖異、推_レ是求_レ之、他可_レ準知_レ也、今制所_レ謂_三四分六分_一、則六兵四民、而_三十分田入_一、地頭收_三其六_一、令_三民取_レ四、

21

凡上田灌_レ水為_レ田、使_レ燥為_レ畑、歲有_二兩秋_一、則強_三稻租_一亦弱_三麥入_一、其弱_三麥入_一見_レ慶長三年_{十二月十日}
(義久、善弘、家久)
 貫松慈_三三公_一所_レ令書_レ此也、而於_三中田_一地頭收_三其四_一、令_三民取_レ六、下田地頭收_レ二、令_三民取_レ其八_一、通計地頭所_レ收_三十二_一、民所_レ取_三十八_一、故割_三四分六分_一為_レ永制_一者縣官法云、

三役第二十

所謂_レ伍取者、於_三上田壹斛伍斗_一、領主所_レ取則柴斗伍升、而民所_レ取亦柴斗伍升也、然於_三其中_一、又民有_レ輸、曰_レ諸掛米、則石別收_レ陸尺給米貳合及御傳馬宿料六勺、又御藏米入料、於_三關東_一則石別出_三錢貳文伍絲_一、上方出_三拾伍文_一、謂_三之_一三役、又有_二口米_一、亦於_三關東_一每_三參斗伍升_一出_三米壹升_一、每_三永壹貫_一出_三參拾文_一、於_三上方_一石別出_三參升_一、每_三銀百錢_一出_三參匁_一、元和二年令每錢百文口錢參文云、而口米多寡各國異_レ制、奧州_一常州石別六升或出_三貳升_一、每_三永壹貫_一出_三肆拾壹文_一、或出_三陸拾貳文_一、甲州石出_三肆斗_一、斗疑升誤始_三於信玄_一云、其或不_レ同如_レ此類也、且_三關東_一俵雖_三其所_一受曰_三參斗伍升_一、而又收_レ之則猶益_三貳升_一

取參斗柴升、其本首於填散闕云、而於遠國則謂其貳升曰出目米、關東謂之廻米、或曰斗立、遂為定法、若不_レ少足_レ不_レ得_レ以納、故又今竊謂之伍合、曰_レ合米云、今季安按元和二年七月關老令、每壹俵參斗柴升_レ取_レ口米壹升、每錢佰文_レ取_レ口錢參文云、據此、其為參斗柴升_レ亦非_レ近古_レ可_レ以知_レ也、而其口米及合米皆混容_レ之、則所謂參斗伍升俵其所實容、應是參斗捌升伍合也、而併此三俵以為壹斛、則實餘於斛、應壹斗伍升伍合也、我藩所謂役米、代米、賦米或口米起先等之法皆本乎此、可類知也、

度考第二十一

我藩之田制亦於上古皆因田舍間、而以六尺為步、以三十六步為畝云、而其字則假為畫以便急捷、所謂畝或作_レ丁、二畝作_レ川、三畝作_レ川、四畝作_レ川、五畝作_レ一、六畝作_レ丁、七畝作_レ丁、八畝作_レ可、九畝作_レ可、多見古書、則文永元年八月久經道忍公施藥師苗代、田書等此也、皆非今畝云、今三書紀通證曰、中古之制、六尺五寸為步、即一間也、而天正中

復用_レ六尺云、我川島氏說異乎斯、曰、暨文祿三年豐太閣正藩之經界、以六尺三寸步、悉丈量之、故謂之京竿、事見其所著田賦集、則制度通所謂田畝尺、而今曰京間云者此也、又本田親孚曰、六尺五寸為步則太閣所_レ革制、而其復六尺、稻葉濃州所_レ定也、但於吾藩尚因_レ太閣制云、未_レ知孰是、又讀史餘論、豐太閣變_レ田畝制云亦應是也、但其云三百步為町校諸古町三百六十步減六十步、恐未_レ免_レ誤、夫三百步、固為段者明矣、而其町當三千步、則百必千誤、十必百誤、可_レ以知也、而和爾雅所謂方六尺五寸為壹步、即壹參拾步為壹畝、長六步拾畝為壹段、長六十步闊五十步、即三百步、拾段為壹町、長六百步闊五百步、據親孚說則知太閣所_レ革制、不_レ與此二矣、然貞享中川島重貯輯纂我藩所_レ自_レ古傳諸說、以著田賦集、今按其由既建矣、歷廿八年至元和七年、家心慈眼公使河野文右衛門通宣輯文祿簿、皆藏諸樓門庫、時於三州、如飯野杉水流村帳、既散逸焉、後剩廿年、正保季、亦使野村內藏助更點檢之、既而後亡於廿五年間、失其所_レ在矣、於是延寶元年光久、寬陽公命河島新左衛門重貯為郡奉行、遍訪_レ求之、竟無_レ獲焉、但得杉水流簿一冊於故紙櫃中、乃元和中所_レ逸云、後治貞享元年得杉編經清雄聞總郡座事、使黑葛原治部忠通復命重貯及田中五右衛門國明、原口次兵衛大探索之、于時又獲山之口富吉村文祿故簿二冊於北鄉氏、於是重貯乃幸賴此三冊尚存於世、博稽、旁證涉、倭漢籍、專祖述之、繼取我藩慶寬後之書、參考演述以著書三篇、此田賦集也、則曰、文祿京

制六尺三寸為步、三十步為畝、而除畝八寸一步溝塗疆一尺五、以丈量之云、制度通亦概同之、如其六尺五寸為步法、則至慶長季、自疆而量、始因此制、六尺五寸、琉球、後寬永十年、萬治二年丈量田畝亦皆因田畝亦因之云、遂為永制云、亦制度通則曰里程・宅地尺者此也、據此、我藩田畝、蓋自得佛公未享封前迄文祿三年、皆因田舍間、六尺為步、三十六步為畝、而壹段當參佰陸拾步、壹町當參仟陸佰步者徒可知也、何以言之、按建久八年六月日向國圖田帳、載救仁院九十町・救仁鄉百六十町、校之天正十六年八月豐太閣賜松齡公朱璽書、亦載九拾町救仁院・百六拾町救仁鄉、又薩摩國所載荒田莊八十町、不與天文六年十二月廿四日大翁公賜本田董親書異、又建治二年八月石築地賦所載隅州山之路二十五町、不與永正十一年二月朔日蘭窓公賜本田親安書異、又小濱六町・東郷六町、不與天文十一年十二月六日・十二年四月十日大中公賜董親書異、而自天正距建久年剩三百卅、觀其間多同而不少差、可以証也、後至文祿稟京制、而增三寸、六尺、又降慶長增之二寸、遂為今制、六尺三寸、

故以文祿前步方為六尺、校之今制、古之一步方六尺、則於今之一步六尺雖方減伍寸、今之一畝步三十於古之一畝步三十因畝減六畝、隘古畝者陸分柒厘肆毛零、其積至段、亦猶減古者陸步七分肆厘伍毛零、又其至町、減古町者陸拾柒步肆分伍厘伍毛零、聞諸飯牟禮某云、其算法則自乘古制六尺為三千六百寸坪乘之三十六、為十二萬九千六百寸、坪又自乘今制六尺五寸、為四千二百二十五寸、坪乘之三十為十二萬六千七百五十寸、坪而以今制除於古制、則一畝餘二千八百五十寸、坪一段餘二萬八千五百寸、坪一町餘二十八萬五千寸、坪以是為丈、則五丈三尺三寸八分五厘三毛零、而以今制六除之、為八間二分一勾三撮零、又自乘之則為今制六十七步四分五厘五毛零、而以三除之畝七步四分五厘五毛零、以是測之、古之一段廣、於今之一段為六步七分四厘五毛零、又古之一畝廣、於今之一畝為六分七厘四毛零云、余憚乎數煩人算之爾、而我藩古之壹町、稽諸史說、則曰、率上下於中田、大抵當今高參拾伍石、伊地知重英云、日州田島莊八拾町當今高貳仟捌佰石、其壹町亦當參拾五石、又吉田清純云、古之捌仟町當今之高貳拾肆萬石、仟町當參萬石、百町當參仟石、拾町當參佰石、壹町當參拾石、又白尾國柱云、古之八町當今之貳佰石、其壹町當貳拾五石、物徂徠說與此同、又聞諸郡吏云、以中田廿五法求之壹町、當貳拾陸石肆升壹合陸勺陸撮、諸說異同未可知孰是、然今季安參證衆說以考之、則古今異制、畝有廣狹、

租有輕重、或推今狹論於古廣、或以古廣當於今狹、前輩所言、因本不揣、其說雖各有所承、未得皆至一概、故我藩史官所自古傳言當參拾伍石、或清純所謂參拾石等者、蓋皆因古之畝、六十、併之諸役高等、舉其大數可知也、元龜年間大口地頭新納忠元始頭屋祭、而邑士領壹町以上者、自古與之、到今不絕、而今則有高參拾石以上者、得仍與之、為故事云、據此、大抵當參拾石以上者明矣、又國柱所謂貳拾伍石、郡吏所謂貳拾陸石肆升零、蓋皆就今畝、三十、惟舉田租、而如諸役高、蓋略焉已、皆不揣本、則其不合、至如是亦宜哉、

斛高第二十二

古者計田、位職皆以田呼、則田令所謂位田、一品八十町、職田大臣四十町云云之類是也、蓋北條季變乎貫高、或為永高、竝詳本篇、蓋如我藩則西陲僻遠、而尚因古制、未聞有其以貫呼焉也、至豐太閣革田畝制、令計以斛、縣官所謂斛高應言之也、故天正十五年、我貫明公始朝于京師、

太閣賜公萬斛之半租於上方、攝播之地、觀其云斛、當時上方既以斛呼可亦証也、十六年秋、太閣更益

松齡公封於日之諸縣郡、授之目錄猶書幾町、據此我藩知時仍因延喜舊矣、而家忠日記、則始乎十八

年云、未悉為然、又十九年八月松齡公書亦云、

六月初旬、令于諸國有御前帳事、所謂斛高行於

諸國、應在此間也、然如我藩迨文祿中稟太

閣制計以斛斗、載籍亦然、享保十四年、大家訪我藩、以查議其由、質諸京竿、纂古令七通、以呈大家、其所對亦不與此異云、由是諸家所知行稅額

天下皆遂至普謂之高、蓋所以其謂高者、何以其

積小至於高也、稽延喜式曰、六位諸王任職事

者王祿官祿從一高給、或收納穀若干、積高若干丈尺

云之類似其所首焉、ハシメル、シハズ姑書應說、埃來哲爾、

代官第二十三

所謂代官、地頭屬官也、寶治二年九月十下知狀、以

本田五郎兵衛尉為地頭御代官於薩摩國、按、時地

頭乃當我道佛公、(忠時)又建武元年二月二日、

光嚴帝以道鑑公為豐後井田鄉地頭職、而公之居

其職也、遣伊地知輝正忠季隨為地頭代官於鄉之柴比名、年月、二年八月二十、三月十一日カ、公以本田孫次郎久兼為代官於山門院內、又四年八月、酒勾兵衛次郎為御二代官於守護之類、亦其守護若地頭云則皆當、公者明矣、又文明七年、以宮丸某為忠直圓室公御代官、又天正中伊勢如閑為御二代官於貫明公時之類可併觀也、而降文祿中京制既建、分遣代官於三州諸郡、令各掌其租入、事多雜出乎諸舊記、則如伊佐郡係貫明公封域、乃使伊地知民部少輔重堅遷地頭於山野兼領代官事、五年二月、和田玄蕃居地頭於小根占、以有馬銀右衛門為下代、以橋堅物ツマ為筆者、令掌宮原倉、猶古郡司掌倉院時、慶長三年、飯島領主小川藤八郎師立于朝鮮得罪於公、故沒其地、遷酒勾勘右衛門景信・岩崎出羽守為地頭代官、景信居任十一年云、四年六月、小根占地頭川上右京亮兼代官事、以川窪五右衛門・播磨屋久兵衛等為下代、令掌伍仟伍佰斛租入於山本・田代等、赤瀬川甚介為筆者焉、十二年四月、以長谷場主膳純常・木原七郎左衛門為根占代官、下代如前、

十三年十月、相良勘解由頼豐遷地頭於根占亦兼代官事、下代如前、十六年十月、友野次郎右衛門為小根占代官、掌租入於山本・田代・佐多・邊塚等、後兩分之、以湯地左近將監為川北代官、以日高與市兵衛為川南代官、寬永五年、前此高岡噯河上參河守忠辰及猿渡喜之助直信・中村主水佐等為代官於日州掌廩入事、然高岡噯廣巨多務、不任兼掌、於是四月、命隸府下廩入云、十五年、國老三原重庸之領御物奉行也、遣國分士有馬丹後守純定及飯隈山東壽坊為代官、國分士新橋傳右衛門頼重・田實九左衛門重安為下代、令掌貳萬斛租於肝屬郡、十六年、純定致代官、多如此類、不遑悉書、推此觀之、當時代官帥下代及筆者、莅掌租入、或兼地頭亦間有之、足以証當時、故據古簿粗載于此、按文祿中石田三成奉太閤命正藩經界、又分其祿則割陸拾參萬斛於我三公、各有差、而拾肆萬斛係貫明公封、就中拾萬斛為公廩入、所餘肆萬斛為諸給地、拾貳萬斛係松齡公封、就中捌萬斛為公廩入、餘肆萬斛為諸給地、參拾柒萬斛係慈眼公

封、就中拾貳萬斛為_二公廩入、餘貳拾伍萬斛為_二諸給地、又 太閤命_二貫明公自_二覺府移_二於大口、而徙_二松齡公於覺府、然皆不肯、貫明公乃居_二于國分、時云富隈、松齡公居_二于帖佐、慈眼公遂都_二于覺島、竝其封內也、由_レ是考_レ之、爾後沿革雖_二審_レ知、今所謂表方廩入據_二其總計為_二拾貳萬斛、則首_二乎慈眼公廩入拾貳萬斛、而國分組本_二乎貫明公廩入、帖佐組本_二乎松齡公廩入、各因_二其遺名亦足_二以概知焉、慈眼公薨、寬陽公嗣、國用不_レ足興_レ利說行、公志_二勸農、正保二年四月、公命_二殿役奉行右松安右衛門祐、(マ)後醍醐院喜兵衛、有馬治右衛門純成、村田藤左衛門_二、市來五兵衛家昌兼領_二郡奉行_二事、分巡_二諸郡督_二察之、於是十一日、國老島津圖書頭久通、川上因幡守久國、顯姪左馬頭久政、山田民部少輔有榮移_二文諸鄉_二曰、宜_レ修_二溝堤_二斤_二荒田畝_二遵_二每年例、若其荒者雖_レ士營_レ之、必處_二其科_二如_二農及諸家僕、必_レ輕重、或獄或拘、將_レ近日遣_二奉行_二莅督、察_レ之勿_二必怠慢_二矣、慶安二年正月、始置_二郡奉行、以_二猪俣為_二右衛門則康、東郷肥前重方_二任_二此職掌、以_二小野千右衛門中村_二

兵衛為_二之筆者、乃重方掌_二東郊諸郡五十鄉、則康掌_二西郊及祁答院、菱刈諸郡五十鄉、而其租入則置_二藏入奉行、班列亞_二國老、乃萬治元年二月書所謂新納又左衛門久了、町田源左衛門忠代是也、一說曰_二御郡代取納奉行亦應_レ言_レ之也、時分_二廩入、一曰御郡代方、一曰御國仕方_二、皆置_二代官、而御郡代官則有三組、曰日州組、曰南組、曰出水組、所謂三組代官此也、又御國仕方有_二三組、曰顯姪組、曰加世田組、併_二前三組_二謂_二之五組代官_二云、前_レ此重方等總_二計稅額_二校_二御判物、則所_レ減拾壹萬玖仟參佰參拾斛零、於是重方建_二白田野未_レ關務始_二墾田、凡獲_二貳萬肆仟斛零、故是年八月、公召_二于前賜_二重方食、且使_二相良土佐賜_二二百石_二以賞_二其功、冬又命_二菱刈孫兵衛重敦、汾陽次郎_二右衛門光東、令_レ蓄_二其稅_二以益_二關_レ之、皆隸_二郡座、寬文五年、置_二之代官_二令_レ掌_二租入、乃以_二佐藤孫左衛門祐豐_二、宮里五右衛門正行_二任_二此職掌、六年七月、書_二郡方代官、或書_二郡座附代官_二此也、九年三月二十一日、公使_二喜入五郎兵衛久_二、賜_二重敦_二、光東腰刀各一口_二、以褒_二賞_二之、皆正房所_レ造也、十年、省_二顯姪_二、加世田_二

組、混日州・南・出水三組、而每組定代官各二員、十一年、改郡座附代官曰帖佐組代官、延寶三年二月、令帖佐組混國分組墾田捌仟柒佰伍拾斛零、以同掌之、而分二組曰新田方・古田方、前此府下醫師鮫島加心以其所食禄拾伍石貳斗肆合捌勺玖撮施諸萩原天神、又以拾伍斛貳斗玖合伍撮施野本藥師、請其所併參拾斛肆斗壹升三合玖勺肆撮年輪官倉、永給神祭佛餉及修理料、是年四月、命混表方如其所請、七年五月、先是為寬文中事、大乘院主僧政眞弟子捐師遺金新作仁王門、舊葺以茅、又以餘金買府士祿參拾斛貳合捌撮、亦請年輪官倉永給修理料、至是命混表方亦如所請、天和元年冬、重教・光東所與關田、凡獲參萬肆仟參佰玖拾斛零、二年七月、公召御組頭禰寢八郎右衛門後改丹波、清雄於前、口親命預聞封內勸農及租稅事、八月二日、又命御物方今御勝手方也、御家老島津帶刀久元、為之總督、令及清雄偕議行之、於是建署於役宅、此云役屋鋪、四日、命其署曰惣郡座、而郡座及代官座亦竝隸焉、而擢筆者一兩員、令給事之、此月併三組為二組、省代官員更為

四人、令以掌收拾貳萬斛零租事、謂之表方代官、蓋慈眼公廩入之遺制而中謂御郡代方及御國仕方、今御勝手方、者亦應是也、三年七月七日、命表方及二丸廩入世子、隸惣郡座、使清雄領之、前此置廩入筆者及手代、至是減省、二十日、令殖楮於封內諸邑、使松下五郎右衛門等為楮見廻、徧巡外城、催檢之、十二月、令帖佐組代官、混新田・古田二組、同領其事、而貞享四年十一月、置新田代官座、以帖佐組代官東鄉伴右衛門重依任此職掌、元禄八年正月、停帖佐組代官隸新田代官座、十一月、改新田代官座曰帖佐組代官、寶永四年十二月、先是承應二年勝軍院主僧眞尊為愛宕堂、遍募府士、以各所施銀買拾玖斛玖斗捌升玖合伍勺捌撮於木上某、私輪寺僧、至是寺主以請年輪官倉永給祀事、此月有命、亦混表方如其所請、八年二月、初、寬陽公遷片平毘沙門於護摩所、至是淨國公命復寢マシ寝片平、如故、且施之三斛、亦混表方令年給之、享保七年、間歲諸顯職催講于磯天神、混各所投資買拾玖斛於川上某、年輪社司、至是九月、國老承吉貴、繼世淨宥二公及月

須磨・吉原室

桂君旨、亦混表方、永給祀事、十一年三月初、大

玄公時創月船寺、使僧愚門為之住持、愚門請命、

以所貯銀買貳拾斛壹斗柒升柒合柒勺壹撮於鮫島某、

故混表方、年給寺主、亦如其請、間歲一乘院主僧

堯周請建智慧光院、永為宿寺、買陸拾玖斛玖斗玖

升玖合玖勺壹撮於府下土祿、以輸官倉、年給寺料、

是年八月命混表方、亦如其請、十二年冬、文完、于

時所謂表方、混諸寺社所廩輸租、總計拾貳萬參佰

柒拾壹斛玖斗肆合柒撮、其後大乘院主僧盛嚴亦請于

官、以其餘銀買肆拾玖斛伍斗壹升貳合、年輸官倉

永給之於善行院、故延享元年六月命混表方、如其

所請、又大乘院主僧盛有退老於威光院、為摩利支

天買府士祿肆拾貳斛於家村某、請輸官倉、年給寺

產、於是明和五年七月命混表方、亦如其請、而至

寬政七年、代官上斛所載表方、則拾貳萬仟佰玖拾斛

玖斗參合柒勺捌撮、於其中拾貳萬斛貳斗捌升貳合壹

勺參撮為拾貳萬斛廩入、而護摩所領貳佰柒拾柒斛貳

斗陸升伍合壹勺、佛餉料曹源君貳拾玖石貳斗壹合肆撮、

淨國公(總意)宥邦公(宗信)慈德公(重年)圓德公各佰伍拾斛、其他菽

原天神・野本藥師仁王堂・後迫愛(44)・片平毘沙門・大

磯天神・月船寺・智惠光院・善行院・威光院領等皆如

載前、所謂國分組・帖佐組、按代官疏、其所以名

則由乎重方等所墾闢始自帖佐云、然季安按、國

分乃貫明公所居、而當時廩入有拾萬斛、帖佐亦

松齡公所居、而當時廩入有捌萬斛、終二公世、

亦其取出物等猶在世時、則觀元和四年國分士人坂

元彦右衛門等取出銀、六年三月帖佐支配所授目錄

之類可概知也、且據國分組既有古田方、則雖上

疏曰所墾闢由自帖佐、因其地舊係二公廩入、

以各存其舊名、却似有謂、而如國分、寬永十三年、

寬陽公為世子、欲修築新城、徙以居之、既稟霸

府雖得其命、遭慈眼公疾不不起而不果焉、後

至明曆萬治之際、曰御鷹方伍仟斛者即國分組廩入

云、延寶中則國分組總計捌仟柒佰伍拾斛零、天和二年、

禰寢清雄之聞勸農亦稟于公、且專盡力乎國分組、

每往還輒給馬一疋、屢莅監之、或多齋鉢、或齋

管笠(實力)、頒之貧民、令以勤耘耕、遂聞惣郡事云、

而享保六年、淨國公老於磯館、取諸國分組、凡壹

萬伍仟石、十二年丈完、所總計國分組捌仟柒佰貳拾
 伍斛壹斗玖升陸合參勺捌撮、磯附廩入柒仟玖佰捌拾柒
 斛捌斗零、老公廩入壹萬壹陸陸升零、延享三年、有
 邦公告、老亦取諸國分組、如淨國公例、蓋皆似襲
 貫明公遠蹤、而近至（重考）明和八年、大信公時、命割其
 壹萬斛、隸御納戶、安永二年、復以壹萬斛、隸御納
 戶、併前貳萬斛、天明八年、公既告老、割其貳
 萬斛、以壹萬伍仟斛、供償上方債金、料、令授表方、
 今謂之國分組廩入、以其所餘伍仟斛、為御鷹方、
 故今謂之御鷹方伍仟斛廩入、隸御納戶、如故、而寬
 政七 year 上疏、則國分組總計捌仟柒佰貳拾捌斛捌斗參升
 玖勺柒撮、於其中、諸所沒入柒拾捌斛伍斗伍升貳合
 柒勺壹撮、月桂君佛餉料佰斛、又今有御納戶附廩入、
 其總計則肆仟貳佰貳拾捌斛貳斗伍升肆合參勺貳撮、於
 其中、所墾關、凡貳仟肆佰肆拾柒斛伍升捌勺貳撮、他
 皆諸所買若沒入、詳見上疏、然略其由、季安按、
 貞享元年、寬陽公命禰寢清雄、以出水租價及牛馬
 出銀買諸士錄、名用心高混帖佐組、三年七月
 公命清雄、凡惣郡座所買租入皆勿出物、如御納戶

所買入高云、據此、御納戶買入、始乎貞享以前
 明矣、所謂用心高、享保竿有曰助用高者、疑當
 之否、後曰御內用方者、應必此也、書、識者爾、
 所謂帖佐組、寬文始則參萬肆仟斛零、至享保竿、為
 伍萬貳仟貳佰玖拾玖斛玖斗柒升貳合壹撮、而寬政中則拾
 萬伍佰肆拾六斛柒斗貳合陸勺柒撮、於其中、柒萬仟佰
 伍拾陸斛貳斗陸升玖合捌勺玖撮、為帖佐組廩入、陸佰
 肆拾伍斛柒斗壹升柒合參勺陸撮、為享保壘田、壹萬柒
 仟陸佰玖斛壹斗陸升貳合伍勺陸撮、亦為墾田、參佰陸
 拾參斛參斗貳升陸合捌勺柒撮、為尾畔墾田、參仟玖佰
 陸拾柒斛柒斗柒升壹合壹勺玖撮、為申歲所買、參仟
 參佰陸拾捌玖斗陸升捌合柒勺、為內用方、參仟肆拾
 斛肆斗捌升陸合壹勺、為諸士沒入、而佛餉料則佰斛、
（竹原、繼世室）
 淨岸君、佰柒拾斛、為慈眼公、貳拾伍斛、為月桂君、
 又參拾斛、給彌勒院、貳佰斛、給壽國寺、其他、國母、
 翁主食料及諸顯官職祿、致仕食料、皆取諸帖佐組、因
 歲損益、則貳仟斛、為御部屋君、貳仟陸佰斛、為御內證
 君、而玉仙、心鏡而翁主、各參佰斛、為市田執政、
非常
 職祿、壹萬柒仟佰參拾陸斛、為諸職祿、肆佰斛、給島津

幽翁・島津嘯山・宮之原春山・川上頼母各佰斛、令終身食云之類此也、所レ謂享保墾田、原其所レ肇、享保班田既訖、多レ諸士所沒入レ禄、故十二分之レ命諸

士許_レ其二、收_レ斛別值銀佰貳拾錢_レ復為_レ士禄、而值

總計銀拾玖貫錢、(調カ)十分二上地申受、先是申受價銀四拾錢為常、而享保中世間高價佰三拾錢至五六拾錢、故二倍舊、乃命_レ郡奉行_レ令_レ以墾田、既而費多、假_レ帖佐

組得_レ以成_レ功、故令_レ其租入混_レ帖佐組_レ年償_レ費云、御内用方不_レ詳_レ其首、然代官相傳墾_レ田於宮内原、享保

參拾參石捌斗捌升貳合壹勺六撮、實_レ其租入_レ以買_レ士禄、混_レ帖佐組_レ期_レ官米乏_レ令_レ以_レ時補_レ云、享保竿内用廩入既有_レ伍佰拾

參斛伍斗捌升伍合玖勺肆撮、又申歲買入亦相傳、為_レ元文五年_{申所レ}令_レ買云、享保竿既有_レ日_レ新買入_レ者凡

佰柒拾參斛捌斗柒升陸合柒勺肆撮、疑亦混_レ合于此、又有_レ伍萬斛廩入_レ、乃世子料而曰_レ御部屋方_レ者此也、

寬文三年、(續カ)泰清公之為_レ世子_レ也、寬陽公賜_レ四萬斛為_レ世子料、使_レ堀宗勲掌_レ之出納、後至_レ大玄公

為_レ世適_レ亦謂_レ之_レ二丸廩入、天和三年七月、命_レ禰寢清雄隸_レ物郡座_レ令_レ以掌_レ之、如_レ表方例、斛高未考、元禄七年、

淨國公之為_レ世子_レ也、大玄公賜_レ參萬斛_レ為_レ世子料、

八年五月、取_レ其參萬斛、更賜_レ伍萬斛、謂_レ之_レ伍萬斛方、享保竿則伍萬貳仟陸佰壹斛肆斗捌升壹合柒勺、而

至_レ三十五年、命_レ隸_レ表方_レ混_レ御續料、至_レ元文五年_レ為_レ伍萬肆佰玖拾斛零、是年七月、慈徳公之為_レ世子也、

命定_レ食料_レ限_レ伍萬斛、而世子不_レ立則混_レ表方續料_レ如_レ故、以_レ其所_レ餘隸_レ帖佐組、故世子料若有_レ損田、宜_レ割_レ帖佐組_レ以填_レ補之、由_レ是自_レ寬延三年_レ至_レ寶曆三年、(曆)

供_レ價_レ上方債_レ料、四年秋、復混_レ表方續料、天明二年、今_レ溪山公之為_レ世子_レ也、割_レ其中參萬斛_レ為_レ世子料、(齊意)

餘貳萬斛備_レ表方料、六年七月、命_レ諸代官_レ皆加_レ御字_レ曰_レ御代官、七年七月、大信公告_レ老、併_レ伍萬斛_レ為_レ御隱居料、八年六月、割_レ貳萬斛_レ復隸_レ表方、寬政六年五月、復還_レ壹萬斛於表方、備_レ上方債

債料、於是併_レ參萬斛_レ皆隸_レ表方、而_レ老公乃取_レ貳萬斛、以_レ故七月、命_レ謂_レ之_レ貳萬斛廩入云、七月上疏、

則貳萬石廩入為_レ貳萬斛貳合貳勺、又參萬斛廩入為_レ參萬斛貳撮、他詳_レ享檢篇、可_レ併觀_レ焉、

萬斛貳撮、

※1 (頭注)

「寬文五年之上」張紙、

拾壹万九千三百石已下之文、

正徳年中、東郷家より呈状ニ而已為據候得者、今少シ確なら
ざるかと奉存候」

※2
（頭注）

「帶刀久元之上ニ張紙、

惣郡座被相立候以前ニ惣田地座あり、寛文九年より新ニ被召
立、菱刈重敦与光東兩人是ニ奉行たり、蓋寛文之末ニ至て止

む」

※3
（頭注）

「宮内墾田、

自正徳元年至享保元年畢功、墾田凡六千餘石、光東次子四郎
兵衛盛常董其事」

復封第二十四

我藩三州雖舊封也、自文祿制、太閤少削焉、慶長
四年、松齡公以朝鮮功復封於出水・高城二郡及
封内所除地、凡稅額五萬石、於是公得全復兩州
一郡、既而五年九月、公應西軍及神祖戰于
關原、八年和成、於是國老伊勢貞成・本田親正承

公旨、使川上掃部助、本田助允親貞・帖佐彦左衛

門宗光等莅正二郡經界、今其故簿在親貞後、推此
益封地應皆然也、此年八月、長谷場越前守宗純載

三州稅額於其所著翰游集、後曰薩州拾四郡田畑・山
桑・漆・硫磺役總計參拾壹萬肆仟捌佰伍石玖斗壹升柒
合伍勺、大隅八郡田畑・桑榎役總計拾柒萬捌佰參拾參石

玖斗陸升陸合、日向諸縣郡田畑・桑榎役總計拾貳萬玖
仟玖佰陸拾柒斛肆斗參勺肆撮、通計陸拾萬伍仟陸佰柒

石貳斗捌升參合參勺玖撮、田賦集、伍仟以下作捌佰陸拾參
石以下曰陸斗貳升參合壹勺、足以補耳、而其田則參拾伍萬捌仟伍佰玖拾貳石

陸斗捌升玖合柒勺、亦捌仟以下作玖仟陸拾陸石零、其畑貳拾肆萬肆仟參
佰捌拾石壹斗陸升貳合肆勺參撮、亦肆仟以下作參

礪・桑漆・楮役貳仟陸佰參拾肆石肆斗參升壹合貳勺參
撮亦肆石以下云、是則知寫文祿籍而所載焉、又一
說、通計陸拾壹萬斛、以高拾斛為貳拾捌苞、總計

佰柒拾壹萬貳仟拾柒苞云、見十九年三月
文・量出水等、亦因京制者明矣、問雖少異、大抵同

矣、亦載于此以備異聞云、凡段別所獲米、上上
田賦集、壹斛陸斗、上田亦中田、壹斛肆斗至三五斗、肥後・

田賦集、壹斛陸斗、上田亦中田、壹斛肆斗至三五斗、肥後・
作上田、壹斛陸斗、上田亦中田、壹斛肆斗至三五斗、肥後・
豐後上

田壹石參斗、見中田壹斛參斗至肆斗、肥壹斛貳斗、下田制度通、後倣此、豐壹斛壹斗、肥壹石、壹石壹斗肥同之、豐玖斗、至參斗、下下田捌斗至壹石、肥壹石、田賦集下下田、伍斗至陸斗、上畑壹石貳斗、上島壹石至壹斗、肥參斗、中畑捌斗至壹石、肥柒斗、下畑伍斗肥同之、豐壹石、豐捌斗、至捌斗、肥下下畑、山畑參斗至肆斗、肥山畑分上中下、而壹斗伍升、參斗伍升、荒畑貳斗至參斗、宅地壹石謂之斗代、地有肥磯、因田品異、以此乘彼、佗可推量、又田畑外、山有山稅、川有川稅、浦有浦稅、或曰山桑役、或曰漆役之類是也、其桑大抵一根養蠶收綿三匁、而至拾匁為米伍升、漆亦大抵一根收三匁、易米為伍升、一說百目、又屋久種子等島則曰山役、川役、浦役、又硫磺島曰硫磺役、日州曰楮役、皆賦其稅、謂之諸役高、凡稅桑・漆見延喜式、稅桑・麻見續紀、而後世所謂上木高之類應必本乎此也、今季安按、京制一町所獲米、上上田拾陸石、即時高也、又延喜式上田所穫米貳拾伍斛亦應時高也、校之京制、則文祿高減於延喜高者為玖石矣、而以京租法柒斗、乘其高拾陸斛、則領主收拾壹斛貳斗、而農夫取肆石捌斗、又延喜租五分、之一乘其貳拾伍石、則上收

五石、而下舍貳拾石、但於其地、廣於文祿町者貳畝拾玖步零、故文祿高本減於古、既如算上、而租強於古者陸斛貳斗矣、雖固調庸除如絹布、猶可四以知其為三重斂焉、古之調庸詳見本篇、可併考也、